
ふおっくすている

玉藻&土鍋ご飯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふおつくすている

【Nコード】

N0762W

【作者名】

玉藻 & amp · 土鍋ご飯

【あらすじ】

アクションチームに参加していたユウスケ。開発中のゲームに参加した事でファンタジー世界に行くことに。狐娘二人と一匹の九尾狐でのんびりまったりと、冒険していきます。たまに分かる人だけ分かるパロディが出てきます。作品内に出てくる料理・食材は基本作者が触った事があるか調理した事があるものになります。ユウスケとコンスケ二人の視点が基本交互に入っていきます。

狐尻尾はふかふかだよ（前書き）

前々から温めていたストーリーをようやく文章にしました。
初投稿の為、手探りながらやっております。

狐尻尾はふかふかだよ

「コンちゃん〜15番テーブル料理あがったよ〜。」
「は〜い!〜!」

ランチタイム。宿屋1階の大熊亭は書き入れ時。

ご飯屋さんが村に一つしかないという訳でもないんだけど、元宮廷料理人だったという噂がある親父さんの腕がいいから、みんなついついやって来てしまうのだ。

まあ暇だったら私もクビになっちゃうから困るんだけど。

「はいお待たせしました!日替わりのこだわりチキンソテー定食です。」

「待ってました!いや〜コンちゃんやっぱこの飯はサイコーだね!」

「ありがとうございます!」

「しかもこんな可愛い娘に持ってきてもらえるとなおの事おいしく感じるよ!」

「も〜褒めても何も出ませんよ〜。冷めないうちにお召し上がり下さいね。」

お店が混み合う前に汲んでおいた井戸水をコップに注ぎその場を離れる。

すぐに戻らないと次が来るのだ。

「コンちゃん〜今度は2番テーブル!」

「はいは〜い!すぐ行きます〜!」
ほらね。

髪の毛が料理に入らない様に巻いた三角巾の間からよっこりと覗

いている狐耳にはちょっとうるさい位の喧騒。だけど、お客さんと軽口叩きながら、親父さんとおかみさんと連携取って忙しい時間を切り盛りしていくウエイトレスのお仕事は結構好きなんだよね。

.....

「ふう…。今日も忙しかった。」

賄いを食べてちょっと休憩し、洗い物や後片付けをして…気付けばもう夕方。

お店の営業は昼だけ。夜は一応村には一軒位ないとねって開けてある宿屋業務（けどほとんどお客さんが来ない）をのんびりやっている。私はお昼だけ働いてる。

夕飯も食べたいぞってお客さんも多かつたんだけど、おかみさんが一時期身体を壊してしまっていたのと、翌日の仕込みをしっかりとやりたいっていう親父さんのこだわりでやらないことにしたらしい。私ものんびり出来るし、この位のペースが親父さん達にもちょうどいいんだと思う。

私がかこリーフタウンの宿屋兼お食事処「大熊亭」で働く…いや御厄介になったのは大体一ヶ月前の事…。

親父さんが近くの森に食材を調達に行こうとした時、森の入口付近の切り株の上で丸くなっていたのが私らしい…。

私としては気がついたら、宿屋のベッドの上で親父さんに見下ろされてたという衝撃的な出会いからしか記憶がないのだ。

熊とのハーフじゃないのかと疑いたくなるような髭モジャでがっしりした大柄な親父さんは、昔冒険者だった事もあるらしく、眼光鋭く威圧感半端ない。目覚めた瞬間に悲鳴を上げかけて、その目力ですぐさま無言で震えてしまった。

見た目と違ってものすごく優しく、おかみさんと二人で私をま

るで自分の娘の様に扱ってくれる。

色々訊ねてみて記憶がないと分かると、思い出すまでここにいていいと言ってくれた。何もしないで置いてもらうのもなんだし…とお店の配膳のお手伝いを始めたら、元々素質があったのかすぐに覚えて働けるようになり気付けばお店もさらに繁盛、お給料まで頂ける事になった。

私も記憶が無いのは不安だけど、なんにも思い出せないもんだから今は今の生活を楽しんでいる。おかみさんと三人で毎日忙しく働いている内に気付けば一ヶ月…っていう感じだ。

狐尻尾はふかふかだよ（後書き）

感想等もしあれば非常にありがたいです。

そこは憩いの場所（前書き）

体調崩して遅くなりました。二話です。

そこは憩いの場所

太陽が沈み始め外も段々橙色から紺色にそして墨の色に変わっていった。

さて今夜も出掛けるかな。

うちの宿屋は比較的村の賑やかな所にあるんだけど、そこに比べると山を後ろにして静かなそこは、村の中でも少し毛色が違う場所。宿屋から少し歩き、村の表通りを抜けると綺麗に手入れされた庭がある。その庭の先の入口の扉の横には左右からドラゴンの彫刻がお出迎えしてくれる。片方は口を開いていて、片方は閉じている。悪いものが来たら食べてしまう様に、そして逃がさないようにという守り神らしい。

このドラゴンの彫刻を私はなんだか気に入っていて、必ず撫でてから入る事になっている。

カラーンコロ〜ン

「マスターこんばんは〜。」

「いらっしゃい。」

渋いバリトンの声でマスターが声をかけてくれる。黒色の髪、黒い服に素敵な髭の渋めのおじ様だ。

ここは「烏龍亭」私が気にいっているお店。私の定位置のカウンター席の端っこに座る。

お店自体はあまり大きくはなく、20人入ろうとしたら溢れる位。こじんまりとしながらも、お洒落なインテリアが色々配置されている素敵なお店だ。

壁際にはフルートやバイオリンと呼ばれるらしい楽器が飾っており、そこから静かに音楽が流れてきている。マスター曰く、妖精と契約

してるとか。

「御注文は？」

「いつもの」

「あいよ。」

ニヤツと笑いながら頼むと、マスターもニヤリと返してくれる。

いつものって言う常連さんの言い方に憧れて、二回目に来た時から私も無理矢理使ってる。

尻尾が床につかないように、少し高めの椅子に座ってるんだけど私だと足が床に届かない。

足をプラプラさせながらマスターが「いつもの」を用意してくれる様子を見ているのは楽しい。子供扱いと笑われる事もあるけどついやつてしまう。自分が幾つなのかは覚えてはいないけど、知識量やなんかで子供ではない…とは思う…多分。

逆に黒髪をオールバックにしている、銀色の前髪が何本か垂れてるマスターは渋くて大人って感じた。年齢は内緒らしい。こういうお店のマスターはこういうものだというこだわりがあるんだとか。いつかあの前髪に触ってみたいと思うけど、それこそ子供扱いされそうで口には出さない。

毎日の暮らしやお店が忙しくて基本的に忘れてるけど、自分がどこから来たか、何をしていたのか、そもそも誰なのかわからないっていうのは結構面倒だ。

宿屋で働きだした時もお客さんに色々聞かれても何にも答えられず…親父さんに随分助けてもらった。最近じゃ常連さんの顔も覚えて軽口を返す位に慣れてきてはいる。

そうこう考えている私の前でマスターは豆を計り始めた。お客さん毎に豆を入れ直すし、分量も違うらしい。

昼間の内に焙煎した豆を天秤で図る。小さい竜の形をした分銅が何かの単位らしく、目の前で竜が二つ三つと揺れながら天秤の片側に置かれていく。もう片方に置かれた紙の上に粉が少しずつ置かれ、揺れが止まると、素早く濾紙へと移される。そして静かにお湯を注ぐ。

この瞬間・時間が私は好きだ。

「はいお待たせ。いつもの。」

「ありがとうございます。」

ニマニマしながらカップを受け取る私をマスターもまた素敵な笑顔で見つめている。

持ち手も竜の彫刻になっているカップの中で上品な香りを漂わせている黒い液体は「珈琲」だ。

「いただきます。」

一口飲むと身体が温まってきて……を通り越して熱くなってくる。そして身体がぐんにやりしてくる。

むふふーん

そう……何故か私は珈琲で酔っ払うのだ。

「相変わらず面白いなコンスケちゃんは」

「なにがですかあ？」

「見てて飽きない。」

「よくーいわれますうー。」

カップ半分位飲む頃にはもう結構へにやへにやだ。

なんだかんだで、記憶がないというのはストレスになっているらしく、普段は無意識に張り詰めているものがここでは緩む。

初めてここに来た時もそうだった。目が覚めて親父さんに色々聞か

れて何も覚えていない…というよりも、まるで何かが抜け落ちた様な空白でパニックになりかけた時、親父さんは黙ってここに連れてきてくれた。

まあ親父さんも私が珈琲で酔っ払うなんて思わなかったらしく、ぐんにやりと溶けてる私を見て随分驚いていたけど。マスターは何も言わず、溶けてんだかよくわからなくなっていている私をただ優しい目で見ていてくれた。それから仕事終わりに時々来る様になり、今に至る…。

そして私は今日もマスターにくだを巻くのだ

「ますたあぁ〜きいてくださいよおおお…。」

「全くコンスケちゃん尻尾に触ろうとするなんてヤツは殴っていいんだよ。全くこの極上の銀色フサフサ尻尾を。」

「ますたあ、さわってみますかああ。」

「ほらほら、そういうのは大事なヤツの為に取っておきなさい」

「そういうもんなんですかあ。」

マスターだけは、フルネームのコンスケで呼んでくれる。女の子なのに、なんでコンスケなのかはわからないけれど、私は自分の名前がコンスケだという事だけは知っていた。大体はみんなコンちゃんとか可愛らしく呼んでくれる。

マスターも誉めてくれる私の尻尾はお尻から、頭の後ろ位まで、「のの字」に少しカーブを描きながら伸びている。綺麗な銀色で、櫛通りもよくて私も気に入っている。寝るときは抱きしめて寝れるから最高だ。

絡みながら意識が段々と怪しくなる私の話に相槌をうちながら、マスターは珈琲にミルクを垂らしてくれた。黒い珈琲の上をミルクが

綺麗に渦を巻いていく。見ると綺麗だけど目がまわってきて、目をギョツとつむる…。マスターの声だけなんだか遠くから聞こえて来る…。

「銀河系みたいだろ。」

「？」

「世界の境界もこんな風に溶け切らないで曖昧だからお前達みたいなのが来れるんだよ。なあユウスケ。」

（わたしはコンスケだよマスター…）

そうして意識が飛んで行く私は心の中でマスターの謎の質問に答えながら眠っていった…。

そこは憩いの場所（後書き）

コンちゃん並に頭グラグラしながら書いたから何かおかしいかも…
（ー）アフィン

身体が資本のお仕事です。(前書き)

ようやく投稿出来ました。ちょっとこの辺りから毛色が変わります。

身体が資本のお仕事です。

「ユウスケ早く起きて支度しな！」

「…わかっているからデカイ声出さないでくれよ姉ちゃん…。」

今日も姉ちゃんに叩き起こされ、俺は夢から強制的に覚醒させられる。

「ふあゝあ。…今日はなんだっけ…？」

「あんたがこの前やったモーシヨンのやつ。あれの最終調整でしょ？遅れたら許さないわよ！もう入り時間迫って来てるんだから早く行きなさい！」

「んー。」

割と身長が高めの俺をさらに超える姉ちゃんは、声も態度に身長に…と全部でかい。あ…胸もデカイな。

モデル並の顔してんだから、黙ってりゃいいのって言うたら、黙ったら窒息しちゃうでしょと平気で返してくるぐらいだ。手が口の先に…ではなく、手と口が同時に出るから注意も必要だ。

多分本来の意味の戦う大和撫子を地でやれんだろうな…。この前の舞台でも振袖着て戦ってたし…。

うちは【ブルー】という何の捻りもない名前のアクション事務所だ。といっても元自衛官の親父が立ち上げて、俺と姉ちゃんとが所属しているだけの小さな事務所だ。

ヒーローショーをやったり着ぐるみを着て野球場でバク転したり、舞台でのアクション部分を担当したりと色々な仕事がある。最近ゲームのキャラクターの動きを撮影…いわゆるモーシヨンキャプチャーの仕事なんてのも増えてきた。寝起きに姉ちゃんから言われた「モーシヨン」というのもコレの事だ。

さっさか着替えて昨夜のうちに用意しておいたリュックを担ぎ、玄関に傘と一緒に置いてある愛用の木刀を持つ。用意完了。

「じゃあ、行ってくるー。」

「はいよ、飯はちゃんと喰ってから現場入りすんのよー。」

今日は時間ないから食わないで出て来てしまったけれど、身体を使うのがメインの仕事だから、食事は本当に大事だ。朝飯でもちゃんとご飯を二杯はおかわりする。何があってもいいように飯は食つとけというのが親父の口癖だ。

【株式会社神無月】

誰もが名前は聞いた事のある大手ゲーム会社だ。格闘ゲームから流行りのハンティングアクション、さらにはRPGまでと手広く作っている。都心の一等地に本社を置き、支社も幾つかある。この会社は早い段階で、ゲームにモーション技術を取り入れて滑らかな動きのゲームを作った事でも有名である。

いまだ学生である俺も幾つか参加していて、うちの家計は大助かり。自分が参加したゲームは発売後にもらえるから家で暇な時は、自分の動きのチェックを兼ねて遊んでいたりもする。

ビルの入口入ってすぐの受付で受付嬢さんに声をかける。

「すみません、社長と約束していたブルーのユウスケですが。」

「はい、伺っております。少々お待ち下さい。」

椅子に腰かけるまでもなく、社長がエレベーターから降りてきた。

「待たせたね。行こうか。」
「はい。」

最上階まで直通の高層エレベーターの無重力感を味わっていると、素敵バリトンの社長の声が狭いエレベーターの中で響いてきた。

「実はね…、ユウスケ君にやってもらいたい最終調整というのは…、実際にゲームプレイの部分なんだ。」

「え！この前のあれはもう完成してるんですか？」

「一応一通りデバッグは済んで、動作も最適化は進んでるんだけどね…。ただ…」

「ただ…？」

「実際に動かそうとすると、何か引つ掛かるんだよな。テスターが出払ってるし、実際にユーザー目線でもゲーム出来る人が欲しくてね。」

「で、俺ですか。」

「そういうこと。」

社長はプログラマーから会社を興した人だ。ここぞという部分の勘所も鋭く、ツボを押さえた丁寧なゲーム作りは定評がある。俺も直感で生きてる気がするけど、社長のは天啓みたいな感じだ。おかげで今まで出したゲームも常に高い評価を得ている。

「まあ今回の作品ばかりはバグなんてあつたら洒落になんないですからね…。」

「そんなんだよ、だからユウスケ君を呼んだんだ。」

「でも、俺プログラムなんてまるつきりわかりませんよ。」

「大丈夫だよ、頭よりも身体使ってもらうから。」

「??？」

そうこうする内に到着したエレベーターは俺と社長を吐き出すと地

上に帰って行った。

身体が資本のお仕事です。（後書き）

【モーションキャプチャー技術】

昔は全身に色々貼付けて動きを取り込んでいましたが、最新式は壁にカメラが埋め込まれていて、体育館みたいな所で動くだけでいいそうです。一度撮影すれば、ある程度流用出来るけど作品毎に結構取り直したりしたりするそうです。

いんにちわ赤ちゃん私がママよ？(前書き)

湿気で頭が痛いです…。台風イヤーです。

「こんにちわ赤ちゃん私がママよ？」

コンピューターが並ぶ無機質な部屋。

10人位は入れるだろう部屋は今は無入だ。

社長はそこを素通りして奥のロッカールームらしき部屋に俺を案内する。

「とりあえずこれに着替えて。」

「全身タイツ…って、まだ何か動きのキャプチャーありました？」

「まあね。」

着替え終わるとさらに奥へ。

今度は幾つかの小部屋が連なっている。インターネットカフェみたいだ。小さな部屋にカプセルが一つずつ設置してある。多分このカプセルの為の部屋なんだろうけど、これって…。

「ベツカムカプセルですか？」

「そうそう、やっぱりユウスケ君は知ってたか。」

「使わせて貰えるのはありがたいけど、ゲームには関係ないですよね…？」

「まあいいから入ってごらん。」

「はあ…？」

半信半疑ながらも、最近疲れてたからなあとかプセルに滑りこむ。何度か使った事あるけど、よく眠れるんだよな…。

「じゃあ行くよ…。楽しんできてね…。」

いつの間にか部屋から出ていたらしい社長の声が、カプセルの内部スピーカーから聞こえてくる。

「え…？楽しむって…。」

酸素が漏れないように気圧が変化し始めるプシューという音が聞こえ、同時にゆっくりと視界が明滅する。あまりの眩しさに目を閉じた所で……

……

……暖かい……ん？

森の中？

まぶたを開けるといきなり視界一面緑が広がっている。

随分とすっかりした木々だ。

都会の公園に生えてる様なレベルじゃなく、山の中に生えている様に大地から根強く伸びている。

そして何故か俺は切り株の上に寝ていたらしい。

俺が丸まって寝れる位だから、この木も元々は随分と立派な木だったんだろ？な……って、今更ながらここはどこなんだ？

「社長……！何なんですかここは……？」

周りに人の気配もないけれど、とりあえず声を張り上げてみる。何だかいつもより声が高いな。しかも視界が低い気がする。

P i i ! ! !

いきなり電子音と共に顔の目の前に半透明な板の様なものが現れた。

「うひょあ〜！」

なんか随分と可愛い（？）悲鳴を上げてしまった。

『アローアロー。ユウスケ君聞こえているかい？』

「聞こえてる…というか文字が見えていますよ。これ…チャットウィンドウですか？」

『そうそう飲み込みが早くて助かるよ。』

「これ…今、俺がいるのはゲームの中とか言いませんよね…。」

『またまた正解。もう説明必要ないね。これが開発中の新作ゲームだよ。』

「ゲームって…臨場感ありすぎですよ！というよりも本物にしか見えないですよ！」

『今の君にとっては本物だよ。』

「え？」

『こちらの…酸素マシーンの中で寝ている君の精神・考え方のパターンや思考経路等をコンピュータで取り込んで、そちらで再現させているんだよ。そこに今いる君は現実と全く同じ様に見たり聞いたり感じる事が出来る。』

「じゃあ酸素マシーンの中の俺が今起きたら、この事は何も覚えていないんじゃないですか？だって俺自身からすると、寝て起きただけですよね？」

『セーブ機能を使えば大丈夫。終了時にそちらで経験したことを、こちらの記憶とくつつけるから、ちゃんと記憶として反映させる事が出来る。』

「なんかスゴイですね…。」

『ただけど開発中だからね…。多分大丈夫だよ。』

「…恐ろしいですね…。」

『とりあえずステータス画面開くから色々確認してね。』

Pii!!

またさっきの電子音と共にどうやら俺らしき人物の全身が表示される。

「…って社長！これコンスゲじゃないですか〜！？」

俺の叫び声が再び静かな森に広がった。

こんにちはわ赤ちゃん私がママよ？（後書き）

ベツカムカプセルⅡ酸素カプセルです。

酸素吸うだけの機械もありますが、カプセルだと、気圧を変えて外に高濃度酸素が漏れない様にして、しっかりと全身を酸素で満たしてくれるので非常に疲れが取れます。今欲しい……。

しっぽっぱー（前書き）

絶賛台風の影響の豪雨中です。音楽かけても何もきこえまじえん。

しっぽっぽー

『そつだよ、慣れてるだろうっ?』

「いや…慣れてはいますけど、女の子ですか…。」

コンスケとは、以前俺がモーションをやり、実際にとあるゲームで使用されたキャラクターだ。

頭の上に突き出した三角の金色ががった色の狐耳、同じ色の髪の毛。「の字」を描いた狐のもふもふ尻尾も金色。背は小柄で可愛らしい感じの女の子だ。俺の姉ちゃん凶暴さとか存在を全て裏返したら出来る感じ…。

女形もやった事はあったけれど、可愛らしい感じの女の子の動きをお願いされて相当苦労した覚えがある。その分かなり愛着あるキャラクターだ。デザインを決める時も色々好みを反映させてもらっている。

まさか自分がそのものになるとは思わなかったけど…。ちなみに女の子なのに、コンスケという名前は、ユウスケに狐の鳴き声でコンスケらしい。安直だ社長…。

アクション関係の仕事をしていると、モデルさんと一緒に仕事をする機会も多いけど、色々こっちが気を配らないといけないから正直あんまり異性として恋愛感情はもてない。一度中身も凄く素敵で惚れ込んだ人もいたけど、酒癖悪くて背中寝ゲロされさすがに冷めたもんだ。

で、あんまり身近にいない妹系キャラがいい!って社長に頼みこん

で、こういう感じにしてもらったのだ。だって俺の周り背が高くてカッコいい系の女の子しかいないんだもん…。筆頭は姉ちゃん。ちなみに学校はあんまり最近行つてないからクラスメイトの顔すら覚えてない。

『ユウスケ君が演じた動きの中で、一番世界観にあつてたし、何より可愛らしいからね。』

「そうですね。最近モンスターとかも多かったですしね。」

『さてさてノツテきた所でいい加減本題に入ろうか。ユウスケ君に試してもらいたいのは、地獄の門までのルートの確認と、正常に動いているかの確認なんだ。併せて通常動作をちょこちょこ試す…これはまあ移動してたら大丈夫かな。』

「やることは何でもいいですけど前もつて教えて下さいよ。さすがにビビりますよ。起きたら狐っ娘とか。」

『表情も反映するからさ、ビックリしたコンスケの顔も見たくてね。』

「それもテストですか……？」

『半分は趣味だよ。』

「さいですか…。」

『それに精神の取り込みのラグなんかも見たかったからね。予備知識がない人間でもラグはなしと…。』

自分がコンスケになつてゐるなら口調も変えた方がいいかもしれないが、面倒なのでそのままだ。すまぬコンスケよ。

「地獄の門ってなんか凄そうなもの入れましたね。」

『ああ、あれだよロダンの地獄の門。』

「…急に芸術的ですね。」

『世界に七つしかない未完成の芸術だよ！あれを上野で見た時にビ

ビツと来てね。モチーフとして使わないわけにはいかんと。』

「確か上野のは野外だから汚れてましたよね。」

『静岡もその後に見に行つたんだよ。』

「すごい熱意ですね。とにかく、とりあえずどっちに向かえばいいんですか？」

『そこから見える範囲で、針みたいに尖つた山はあるかい？』

「ええと…、あつちに。はい、見えます。」

『その山の頂上付近に洞窟があるからその中を目指してほしい。もしあまりに時間がかかりそうなら助けを出すよ。』

「はい。」

とりあえず、尻尾が付いているからな。歩くのに邪魔でないといいけど。お、結構バランス取れるな。

「服は動きやすいようにショートパンツに、足元はしつかりしたスニーカーみたいな靴だ。よかった…これも実用性よりも趣味を優先されたら動きづらいところだった。」

とりあえずテクテクと歩きだす。視界がいつもより低いし歩幅も狭いけど、普段の自分から感覚を修正してく。歩くたびに尻尾が少し左右にフリフリ動くのはなんかいいな。後ろから見たら絶対ニヤけると思う。

「そういえば社長はどういう感じでそつちから見えてるんですか？」

『ああ、このチャットウィンドウがそのまんまディスプレイになってるよ。だから前を塞がないでね。文字が出てる方が前だから。』

「あーい。」

なんかやり取りはいつも通りんだけど違う人間の違う身体で見えている世界は新鮮だ。

いる世界も違うからなおさらだけど。

落葉樹でないのか、あまり葉っぱは落ちてない。普段なら多少の段

差でも何でもないけどコンスケの身体だと丁寧に越えてかないと駄目だな…。

しっぽっぱー（後書き）

モデルさんとアクションチームは結構絡む事が多いそうです。寝ゲ
口の件は知り合いの実話を元にしていきます。合掌…

きちゆね現る(前書き)

うとう中々話が進みませぬ・・・。後何話かで一区切りになるかな？

きちゆね現る

「ううむ〜」。

大分歩いてはみたもののやっぱり女の子の足では速度が出ない。

うっそうとした森というわけでもないけれど、都会に慣れた自分には中々歩きにくい上に感覚を調整しながらだから神経を使う。

獣もあまりいないのか、通り易い部分もないし。気を抜くと迷子になれそうだ。

とかため息つきつつ考えていると尖った枝で指先をちよつと怪我してしまった。うわあ…ちゃんと血が出るし痛いわ。リアルだなあ。

仕方ない困った時の神頼み。

「社長〜」。

「はいはい」

「もう見飽きたでしょ〜？そろそろなんか乗り物とか出しませんか？」

『もうギブかい？まあ通常動作の範囲はもうよさそうだし、助っ人だすか。』

「助っ人？」

『さっき怪我したでしょ？その血をちよつとひらけた地面に垂らしてごらん。』

「えつと・・・」

振り返ると程よくひらけた場所があった。ちよつと痛いけど…。指をギョつと。

ポタリ

「垂らしましたよー」。

『うん、OK。ちよつと待ってね……はい！』

ぼろろんとんだかマヌケな音がして、煙と共に何かが見れた。社長のこだわりがよくわからなくなってきたなあ…。煙が晴れると現れたのは、

「おお！九尾のきちゅね！」

コンスケの守護用の霊獣九尾の狐だ。名前がきちゅねなのは…まあ以下略。

真っ白い毛皮につぶらな瞳。もさも尻尾はちゃんと九本生えている。

「これは…もふるしかあるまい！！」

少しびびるきちゅねを無理矢理なで繰りまわす。

「ふかふかだああ…うへへへ…へへへ…」

「くくくんきゅーん…コン…コン…」

『おお…い、ユウスケ君ほどほどにしないと嫌われるかもよ。』

「はいすいませんやめます。ごめんねきちゅね。」

きゅーんという鳴き声と共にちよつと潤んだ瞳で下から見上げてくるきちゅねは破壊力あり過ぎる可愛さだ。ぐつと自分を抑えて、きちゅねに問いかける。

「で、どっちに行けばいいのきちゅね？」

きちゅねは首をしゃくって、背中を指し示す。乗れってことか？乗っていいのか？

「社長乗っても大丈夫なんですか？」

『今のユウスケ君の体重なら大丈夫だよ。本気出せば二人はいけると思うし。』

四つの足を折り曲げて、身を屈めてくれたきちゅねの背中によじのぼる。普段の自分ならひょいってサイズなのになあ。俺が乗ったのを確認し、きちゅねがゆっくりと身体を持ちあげる。優しいなあイ

イコイコしてあげよう。

『ちゃんと掴ってなよ。速度は結構でるはずだから。』

「本当ですか？」

『うん、馬くらい出るから。』

「え？」

俺が思わずぎゅっと毛皮を掴んだとたんいきちゅねは走り出した。

「おわあああああ~~~~~」

早い！これで馬位なのか！？

自分の身体の差なのか、すごい体感速度ですわよ！

思わず身体全体でしがみつきつつ目を閉じてしまっけど、耳元（頭の上の方）がびゅびゅびゅ言っている。

ゆっくりと目を開けると…スゴイ！

地面に足が付いているのが不思議なほどに軽やかにきちゅねは走っていく。疾走と言っていいと思う。障害物も軽々飛び越えていくのに、足の裏でしっかりと衝撃を消しているのか身体に負担はない。

「よしこのまま一気に山までGO！きちゅね〜！」

あ…チャットウインドウ見えないや。まあいいや。

きちゆね現る（後書き）

きちゆねは完全に私の趣味です。すいません。

この門をくぐりしものは一切の希望を・・・(前書き)

どうしてもここまで書きたくて夜更かしです。

「この門をくぐりしものは一切の希望を・・・」

あんなに遠くに見えていたと思っていた山の麓までも、きちゅねの速度ではあつという間だった。早い、安全、快適と最高だ。

「よーきちゅね一旦ストップ！社長？」

Pii!!

『はいはい。』

「この山ですよ、結構登ります？」

『これだよ。頂上付近に設置したはずだからそこそこあると思うよ。』

「了解です。きちゅねもうちょいお願いね。」

さわさわと頭をなでてやると、目を細めて嬉しそうに感じた後、山道を登り始めた。

本当は自分で登ってもいいんだけど、山頂近くは岩だらけに見えるし、きちゅねの乗り心地は快適だからついつい甘えてしまう。

しかし、開発中だからってここまで虫も動物も一切いない世界ってなんだか不気味だな。

自分が今乗っているきちゅねはふかふかして温かく、すごく安心する。でも周りは、風の音なんかは聞こえるけど生き物の気配がなく殺伐と感じる。この山の雰囲気のせいかな。

岩だらけで灰色一色の山。麓からの緑の切り替えも極端だ。

「これかな？」

山頂付近までも快速きちゅねで楽々だった。

『ああこれだよ。この中を確認して欲しいんだ。何故かこの中がプログラム上でちゃんと確認することが出来なくてね。ずっと進行止まってたんだ。自分で見に行ってもよかつたんだけど、客観的に見て修正したかったし動きの修正や痛みのフィードバックとか修正もやっちゃいたかつたからね。ユウスケ君待ちだったのさ。』

「バグですかね？リアルに巨大な虫とかいたら嫌ですよ…？まあ行つてきます。」

ここからはさすがに歩くか。

「きちゆねお疲れ様。」

ひよいと華麗に降りたいところだけど、片足ずつよいしょと不格好になりそうになった所できちゆねが身体を下げてくれた。いいこいいこ。

さて、きちゆねを横に従えていざ洞窟へ。なんかいかにもダンジョン的な感じた。

「中は随分暗いなあ。明りなんて持ってないぞ。」

そつつぶやくと、きちゆねが身震いし始め、すぐに身体から3個ほどの火が浮かんで空中で静止した。狐火か。

紫色だからちよつとまだ暗いけど、光量としては十分だな。

「お前便利だなあ。」

そのままきちゆねに横を歩いてもらい奥へ進む。

目が慣れてくる位の時間トコトコ歩いた頃に、随分と広い空間に出た。ちよつとした体育館並みの広さだ。

ここにあるのかな…？おお！あつたあつた。

結構な広さで狐火でも全体が見えるわけではないが、奥の壁側に巨大な門があつた。

大人三人分程の高さに、横は整列したら大人でも4〜5人は並べる程の幅。

漆黒の光る材質で出来ていて見上げるとかなりの迫力だ。

現実ではロダンが製作し、世界に七つ存在している地獄の門。ダントの神曲からインスピレーションを得たというこの門は、有名な「考える人」の像を含め、多数の像が鑄造されくつついている。

「社長着きましたよ。」

Pii!!

『おお着いたのか。見た感じで何か違和感はあるかな?』

「特に問題はなさそうですね。上野で見たアレと特にデザインとか変えてないですね?」

『そのはずなんだけど…なんか随分と黒光りしてるね。オリジナルと同じブロンズで設定してあったんだけど、パラメーター間違えたのかな?』

軽く触つてみると、金属というより石の感触だ。

「これ黒曜石とかじゃないですか?」

『おかしいな…今こちらでも確認したけど、確かにブロンズで設定してあるよ。他には何か気付いた所はある?』

「後は…あれ?竜の彫刻なんて付いてましたっけ?」

『そんなの付けないよ。ファンタジーだけど、これは実際に見た感じを伝えたかったからカタログも見ながら細かく設定してあるし。』

「じゃあ、明らかにおかしいですね。」

そんな話をしていると、何やらゾクつと気配を感じる。

きちゅねは真横にいる。この世界に入ってから一切感じた事のない気配…殺気だ。

「社長：モンスターの設定ってしていませんよね…？」

『まだ何も配置してないよ。村人とかは村に配置してるけど、モンスターはまだこれからだったから。』

グルルルルル

この広い空間の中に明らかに何かいる！

「きちゆね！」

意図を察したきちゆねが振り返った俺が見ている方向に狐火を飛ばす。

そこにいたのは…

「社長：ロダン…ダンテの後は黙示録からですか…？」

明確な殺意を持ってこちらを睨んでるのは発達した獅子の足、巨大な羽、頭が10本のドラゴンだった…。確かヨハネの黙示録の海から現れたドラゴンの王じゃなかったか。こんなまで作ったのか。すごい迫力だわ。そしてこの地獄の門と同じサイズの巨大な生き物からは、きちゆね以上に生き物としての生々しさを感じる。

『こいつは完全におかしいぞ！ユウスケ君、ここはとにかく逃げてくれ。ラスボス用に作って寝かしておいたプログラムで攻撃パターンも設定していないから何も出来ないはず…通常は。武器は送れないし、まともに攻撃されたらマズイ。痛みの感覚はこれから調整予定だったんだ…。』

「つまり、攻撃されたら痛いなんてもんじゃないですね…。」

『強制ログアウトを試してみる。が…さっきから割り込みが入って思うようにコマンドの受付がされない。とにかく時間まで逃げてくれ！』

「こんな鬼ごっこは燃えますねっ！」

悠長に話している間に素早く距離をつめてきたドラゴンは前足を振り上げて攻撃してきた。こいつ早い！

きちゆねに乗る暇もない。後ろはすぐ門。横に逃げるしかない！

「がはっ！…！」

前足をどうにか左に横転してよけた俺に追撃で頭が噛みついてくる。10本中8本が前後左右から攻撃してくるのを避け切れず、右腕と尻尾をやられた。残り2本の頭はきちゆねをけん制している。

これは…この世界でもし死んだら精神はシヨック死するんじゃないか…。

骨折なんかもしたことあるし、結構痛い目にあつたことはあるが、この痛みは尋常じゃない…。

社長には大丈夫と言われているけど、イレギュラーは続いている。ここでもしも死ぬような目にあつた場合、正直保障はない。

「保険は入ってるけど、仕事途中で死ぬのなんてのは勘弁だな。」

大体、この俺が死んだ場合、あつちの俺は記憶がこの分が入らないだけかもしれないが、今この場に存在しているこの俺は確実に消えるだろう。それは結局一つの死じゃないのか…。

ダランと感覚なくぶら下がっている右腕をおさえつつ、痛みでパニックになりかけながらも無理矢理避ける。尻尾も切られてせいでせつかく慣れたバランスを崩していて動きも怪しい。

どうにか距離をとつたが、相手もさるもの。

俺らが入ってきた入口を背中にしてやがる…。どうにか隙を作らないと外に脱出も無理だ。

「きちゆね！」

俺の声に反応して合流しようとするきちゆねに、ドラゴンは炎を吐きかける。

きちゆねの速度でどうにか回避は出来ているものの、動ける場所が狭まってくる。

「社長！まだですか!?!」

『お待たせ！後1分で強制ログアウトだ！なんとか逃げ切ってくれ！』

「らじゃ。帰ったら焼き肉たらふく食わせて下さいよ。」

『店貸し切って食べさせあげるよ。』

「OK、聞きましたよ。きちゆね狐火!?!」

炎を避けながら、きちゅねが狐火をドラゴンに向かって飛ばす。そこに狙い定めて足元から素早く拾った石を投げつける。

ちよつど炎を吹きかけようとした一つの頭の口付近で狐火が拡散し、目くらましになった。今だ！

俺は無理矢理走ってきちゅねの方へ向かう。ドラゴンは混乱しているのかそこから中に炎をまき散らしながら暴れまわっている。どういう原理か、ドラゴンの炎は消えずに燃え続け障害物になっている。走る勢いのまま、きちゅねが拾ってくれらることを見越してジャンプ！よし乗れた。

「きちゅね今のうちに逃げるよ。」

片手できちゅねの速度に耐えるのはきついが、しっかりとつかまる。頭の中にカウントダウンが始まる。システムメッセージか。

後30秒で強制ログアウトします。30…29…

暴れて開けてくれた広間の入口もまもなく、これは間に会ったな。

25…24…ニガサンゾニンゲンヨ…
「え！？」

その瞬間凄まじい勢いで伸びたドラゴンの尻尾に吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。

「つぐあ……」

『ユウスケ君！！』

13…12…キボウヲ…10…ステヨ…

ああああ…避けられない…爪が振り下ろされ…俺は…俺は…

2…1…ログアウト完了致しました。またのプレイをお待ちしております。

この門をくぐりしものは一切の希望を・・・（後書き）

BADENDではないです。まだ続きます。

ロダンの地獄の門は静岡の県立博物館で常設展示（写真撮影OK）、上野の美術館では野外に置かれています。有名な「考える人」は元々地獄の門の一部品だったけれど、人気があったのでばらしても扱われているようです。

玉葱目に染みても…

「雨降りは嫌だなあ…。」

玉葱の下処理という地味で目に沁みる作業を繰り返している私は涙ぐみながら外を見る。

農作業とか、狩りが基本の村の人達が常連さんなので、こうして雨が降ってしまうとお店は途端に閑古鳥。

まあいつも忙しいからたまにはいいんだけどね。

「よしっと…終わりで。」

さすがに一日分ずつと玉葱の仕込みとかきついね。皮剥いて刻んで…。

涙ぐみながら厨房の親父さんに声をかける。

「親父さん終わりましたよう。」

「おおコンちゃんお疲れ様。悪いねえ。女の子泣かしちゃって。」

「いえいえ暇つぶして終わっちゃうのも勿体ないですし。」

「掃除も終わったし、この様子だとお客さんも来ないだろうから、上で休んでいいよ。忙しくなったら呼ぶから。」

「はい。」

お言葉に甘えて休憩することにする。暇疲れと玉葱疲れで妙にだるい。

二階に上がるうとすると、入口のベルが鳴った。

「あーいらっしやいませ〜！」

「いいよコンちゃん。こんな雨の中いらっしやいませ。」

「何か温かいものを頂けたら…と。」

「あいよ。濡れたマントはそこに架けといてくれ。煮込みシチューなんかでいいかい？お客さんんんん！……！」

「え?!親父さんどうしました?」

「コ…コンちゃん!？」

「えええっ!？」

慌てて降りてきた私が見たのは、絶句して口をパクパクしている親父さんと…私と同じ顔だった。

.....

親父さんは何か感じたのか、料理を出したら店を閉めて2階にあがっていった。私は話しを聞く為にお客さんと同じテーブルに座らせてもらった。あちらも話したそうだったし。

「驚きました。」

「俺も驚いたよ。」

私とおなじ顔をしたお客さんは、驚いた声も出さずにパクパクとご飯を食べている。

ほんとに鏡を見ているみたいにそっくりだこの人。

だけど、尻尾の色が私の銀色と違って金色だ。

「あ…水お代わりちょうだい。」

「あ…すみません気付かなくて…。はいどうぞ…。」

「ん…ありがとう。」

自分の声もこんな感じなのかな。落ち着いた雰囲気と話し方で私よりも凄く大人に感じる。

「さて…どこから話したもんかな。」

.....

あの時、ログアウトは間に合った。
ただし半分だけ。

目が覚めた俺に社長は平謝りしてくれた。まあ正直、あちらの体験はこちらの身体にダメージはないから関係ないけれど、身体を真っ二つにされたなんて気持ちの良いもんじゃない。

念のため、病院にも行かされたが、当然何も異常はなかった。

…身体には。

遅くなってから帰宅した俺を見るなり、珍しく家にいた親父は開口一番こういった。

「お前気配が薄い。」

姉ちゃんも何か気づいたのか、「影が薄い」と失礼な事を言ってきた。

普段からそうだなとか納得してはいけない。

直感とかで本能的に生きている我が家だから、あながち冗談なんかではない。

そしてそれが実証されたのは一週間後の事だった。

「精神が半分ゲーム内に残ってる!？」

「うん…どうやらあの時に分かれてしまったらしい。」

「そんな事ありえるんですか!？」

「ありえる訳ないけど、そうとしか考えられないんだ。」

そんな簡単に信じられるわけがないが、あの場所での経験はゲームだから…というもので済ませられるレベルでなかったのも確かだ。

「今のままだと、精神のバランスを崩してユウスケ君は弱り、あちらのコンス케も弱り…最後は二人とも…。」

「…。」

「強制コマンドを色々試してみたんだけど、ゲーム自体今こちらからのアクセスをほとんど受付なくなっているんだ。単純にウィルスやハッキングという問題でもないみたいだ。」

「一体何が起きてるんですかね。」

「何者かの意識的な妨害を感じるよ。こちらから何人かがINしようとして試みたんだけど、全て弾かれた。まるでユウスケ君だけを呼んでいるみたいなんだ。」

「一体誰が…。」

「あの世界の神とでもいう存在がいるのかもしれない。我々にとっては何になるんだろうね。」

「邪神ですか…。」

「それこそゲームの中のラスボスだよね。」

「…。」

「ともかく、あれからコンスケは稼働し続けてる。ログアウトも受付ない。モニタリングは出来ないけれど、明らかに自らの意思しか呼べないもので動いているみたいだよ。」

「何か保険はかけてなかつたんですか？」

「ある。あのゲーム内の再起動キーである天国の門を発見出来れば大丈夫…だと思う。7つの地獄の門のうち一つがそうなんだけど、ランダムなんだよね。メインシナリオとして配信する予定だったんだよ。」

「コンスケのここに行って、勇者よ目覚めなさいというわけですね。」

「…。」

「そんな感じ」

「受け入れるでしょうか？こんな現状を。」

「未知だね。そもそも、ユウスケ君そのものがあつちで動いているのかもしれないよ。とにかく可能な限りのサポートはする。行ってくれるね。」

「まあ自分の為でもありますし。」

.....

「とまあそんな感じ。俺がユウスケだよ。」

「え……と……。」

「全然分かんないよね。とりあえず俺と君は同じ魂持った兄弟みたいなもんだよ。」

「姉妹と言いましたよ。」

「だって俺は男だもん。」

「見た目も身体も女の子ですよ。というか私と同じなんですよね。」

「んだよ。」

「むむむむむむ……。なんか一番釈然としません。」

「他は信じるの？」

「信じるも信じないも、私は昔の事なんて何も覚えてないんですもん。別に信じてもいいんじゃないですか。」

「前向きというか失うものがないってのは強いね。」

「それ褒めてます？」

「褒めてるよ。」

「それで私はどうすればいいんですか？」

「このままここで働いてもいいし、俺についてきてもいい。とりあえずは……。」

「はい……。」

「なんかデザートちょうだい。」

この人……わざとやってるのかな……。

玉葱目に染みても…（後書き）

なんか修正されてなかったなので再度修正。

あいであいてー（前書き）

執筆中々進まずよつやくの投稿です。

あいでんていてー

結局デザイナーまで平らげたユウスケさんは満足したのか親父さんを探しに行った。今日はそのまま泊まるつもりらしい。

私としては、口ではああ言ったものの、考え出すと頭がぐるぐるしてきたから早めに部屋で休む事にした。気付けば外はもう暗いし。レストランが一階、兼任の宿屋が二階。さらに三階の屋根裏部屋が今の自分の部屋。昔は物置だったらしくてちよつと狭いけど、余ったベッドを入れてくれて、眠るには充分。私がスモールサイズだから…というのでは断じてない、…きつと。

頂いたお給金（基本日払い&チップ）でちよこちよこ買い足した日用品、ちよつとの服、そして女の子なんだから…という理由でお袋さんがくれたスタンド付きの鏡。

ベッドに横になりつつ、その鏡に写ったユウスケさんと同じ顔を見つめながらまた考える。

自分の過去を知りたいと思った事はあつたけど、他人が全て語ってはい君というものはこれだよ！…って言われてそうなんだって納得して受け入れられる人なんているんだろうか。

理屈は通るけど、荒唐無稽だし、感情的には納得は中々出来ない。信じられるのは、自分にはほぼ何も無いという事実と、あの人の姿形があまりにも私に似過ぎているという事だけ。

今の毎日の生活に愛着はあるけれど、記憶が戻るまでに仮り暮らしだったのはどこか思ってた。だけど、いきなり答えからぽんつとやってくるなんて思いもよらなかった。

そもそも、自分って何なんだろう？コンスケって名前は多分本当だと思っけど、これも、もしかしたら違うのかもしれない。「狐族」だよって言われても自分以外は見たこともないから（今日までは）、そういう種族はホントにはいなくて私一人だけなのかもしれない。そうやって全て疑ってしまえば私には何も無い。自分で築き上げた

ものがほとんどないんだ。

私は依って立つものがないんだ。

じゃあ記憶さえあれば私なんだろう？記憶があつたら今こつやつて考えている私はいたのかな…。

そんな事をぐるぐる考え続けて布団に横になり…いつの間にか眠ってしまっていた…。

.....

「あああああああ！！！！寝坊したあああああああ！！！！！！！！」

目が覚めたら外はバツチり明るい。太陽さんがこの部屋に当たり始めたら起きていなきゃなのがいいいい！！もう通過しかけてるじゃないのよう。

慌てて乱れた髪の毛と尻尾に櫛を通し（これは必須だよ！）、鏡でお顔チェック！

ちよつと目の下にクマがいる〜〜。

とりあえず大丈夫だと判断して急いでレストランへ。

「おはようございます！すいません！寝坊しました！」

配膳用のエプロンを巻いて、髪の毛が料理に入らないように三角巾を巻きつつ慌てて厨房に入った私が見たのは、高速で動く親父さんとおかみさん。そして何故かユウスケさんだった。

「親父さん！ポークソテー3つ追加！おかみさんセットのサラダを後5個お願いします！」

「ユウちゃん！今のでポーク終了だ！チキンかパスタランチに振ってくれ！！」

「了解しました!!」

「ええええ…なんでユウスケさん働いてるんですか!?お客さんでしよう!?親父さんもおかみさんも馴染んでるし!」

「コンスケよ…そこにお客さんがいる限り、走らねばならんのだよ…ふつ。」

なんかカツコつけてそう言い放ち、水差しを持ってお客さんの高速移動するユウスケさん。速い…むしろ疾い。

「ああコンちゃんおはよう!とりあえず洗い場回ってくれ。いやあ聞いたよ。ユウちゃんは双子のお姉ちゃんなんだって?言ってくれば昨日ももつと豪勢な食事出したのに。」

「そうだよコンちゃん。昨日は随分話し込んだんだって?体調悪いみたいだから休ませたってユウちゃんに聞いてたから無理せず寝てもいいのよ…といたいところだけど今日は大盛況なのよね。」

これもユウちゃん効果かしら。呼び込みしたり、段取り考えたりすごいよ。」

「え…あ…はい…??」

とりあえず混乱し続けながら洗い物を続ける私を尻目に、三人は見た事もない速度でお店を回し続けるのでした。

「ありがとうございました〜!」

「毎度あり〜!いやあしかし助かったよユウちゃん!」

「いえいえ〜身体が勝手に動き出す〜って感じですよ。」

「でもやっぱり双子の姉妹よね。見た目だけでなくて筋がいいのもソックリよ。コンちゃんもちょっと教えたらすぐ覚えたわよ。」

「ビクビクしながらですよ〜。それにあんな速度で動けませんよ私なら。」

「そうよね〜。私達も毎日が今日の速さだったら身体が追いつかないわよ。」

とかなんとか言いながら、きっちりユウスケさんにデザートも薦めさせてたおかみさんは充分間に合ってたと思う…。

そんな今日の繁盛っぷり立役者ユウスケさんは涼しげな顔でお水を飲んでる。なんで腰に手を当ててるんだろう…。

「さてと…そろそろ飯にするか。」

「二人はゆっくりしてていいからね。」

親父さんとおかみさんは、売上が2倍近かったとホクホクしながら賄いの用意を始めた。忙しさも二倍だったけど。

「さて…ユウスケさん…。」

「コンスケお疲れ様。どしたん？」

「どしたん？じゃないですよ！なんですか姉妹って、何を二人に話したんですか?!」

「生き別れの姉妹を探して旅をしてたら偶然出会った。昨夜は遅くまで話し込んでたから起きて来ないかもしれないかもしれんと、手伝いを申し出た。以上。」

「姉妹って、ユウスケさん男だつて言いましたよね？」

「じゃあこの見た目で男です…とか、実は違う世界から来ましたつて言ったら信じてもらえたと思う？」

「んぐつ…。多分無理だと思いますけど…。」

「まあいいじゃないか、二人共喜んでくれたみたいだし。」

「まあ…そうなんですが、なーんか釈然としないような…。」

「お前の仕事を奪ったのは悪かったよ。昨日あんな事話してきつと混乱してるかなと思つてさ…。迷惑だったか…?」

「いや…その…迷惑とかでは…ない…です…。」

なんか先に全部言われてしまい私がダダこねてるみたいだ…。

「手伝いがてらに情報収集出来たし、俺にも悪い話しじゃなかったな。」

「情報収集?」

「門の事。なんか怪しい建造物とかないかって配膳しながら聞いて回ったら何人か知ってたよ。」

「そんなものこの近くにありましたっけ?」

「あんま近くはないけど、山一個超えた所に隠者がいるらしい。その人がその建造物について知ってるらしい。」

「へえ〜。」

「で、どうする？今回ついてくる？まあ朝早く出れば日帰りの予定だけ。」

「山一個超えるのにそんなに早いんですか!？」

「秘密兵器があるからね〜。」

「秘密兵器!？」

「見てのお楽しみ。」

そういつてユウスケさんは不敵に笑った。

あいであいてー（後書き）

やっぱり携帯よりPCで書いた方が早いですね。
次回も早くUPしたいと思います。

きちゅうね再び（前書き）

昨夜は十五夜でしたね。お月見の話もちよっと書きたくになりました。

きちゅね再び

あれから一週間経った。すぐにでも出発するのかと思いきや結局ユウスケさんは毎日お店を手伝い、親父さんとおかみさんを喜ばせた。私にも仕事のコツなんかを教えてくれて、随分効率よく仕事が出来るようになった。

余裕が出てくると周りが見えてくるもので、ユウスケさんの仕事をちょこちょこ見ていると無駄がない。

オーダー取りつつ、食事の済んだお皿があれば下げながらデザートを勧めたりお水を足したり。

一回ホールを回って複数の動作をやって帰ってくる。ううむ。

しかも愛想がいいし、お客さんの冗談にもほいほいと乗っかってしまえる。すごいなあ。

最近ユウスケさんが双子の姉だというのが広まり、狐姉妹見たさのお客さんまで来ていて呼び込みを特にしなくてもお店は大忙しだ。息つく暇なし。なんかもう雨降って欲しい…。

そしてユウスケさんは仕事終わると、いつの間にかいなくなっていていつも姿が見えない。また情報収集してるのかな。夜には帰っては来ているみたいだけど。

今日も賄い食べ終えて自分の分を洗い物していると、ユウスケさんが出て行くこうとするのが見えた。

「ユウスケさん！」

いつも何してるのかいい加減気になる。今日こそはついていってしまおう。

「どしたんコンスケ。」

「今日はついてきます。」

「別にいいよ散歩だし。」

「いつもの情報収集じゃないんですか？」

「情報収集は大体終わり。場所は絞れてるし、後は秘密兵器待ちなの。今日あたり来るんじゃないかな。」

どっかから何か届くのかな？街から村に届く定期便や商人さんが来るのはまだ先だったと思うけど。

「行くぞ。」

考える私を無視してさっさか外に出てしまった。

「待って下さいよー。」

手をふきふき急いで後を追う。

「ユウスケさん、こっちは森ですよー。食材の仕込みでもするんですか？」

「うんにゃ、もうちょい歩けばわかる。ホラ着いたよ。」

「ここって…。親父さんに何か聞いたんですか？」

「何を？」

「私が始めに親父さんに発見された場所ですよ。」

そう私が気付けば寝ていたという例の切り株だ。

「あゝやっぱりサーブポイントだからそこから始まったか。」

「ほへ??？」

「俺も今回はここから来たんだよ。前回ログインした時の場所は何かアクセス不能らしくてね。」

全く何を言ってるか分からないけど、ユウスケさんにもゆかりのある場所なのかな？

「よいしょつと。社長〜こちらユウスケ。応答どうぞ。」

P i ! ! !

「ひゃあ！なんか板みたいなのが出てきましたよ！！」

思わずユウスケさんの背中に隠れる。

「大丈夫取って食いやしないから。」

『はいはい、こちら社長ですよー。例の物は出来てるからいつでも』

召喚OKだよ。』

なんか文字が出てるみたい。手紙なのかな？

「お〜やっです。ね。了解しました。」

ユウスケさんはおもむろに持っていた針で指をチクツと刺すと、血を一滴地面に垂らした。痛くないのかな。

ぼう~~~~ん

その場所から何やら白い煙と共に妙な音が…。そして煙が晴れた後には…。

「おお〜きちゆね久しぶり。きちゆねも完全に回復したみたいだね。」

「ユウスケさん！魔法使えたんですか！？そしてなんですかこの可愛いもふもふのこは？ハグしていいですか！！」

「魔法じゃなくて召喚かな。あ〜ほどほどにね。なんかどっかで同じようなことがある光景な気が…。」

「く~~~~んきゅーん…ココ〜ん」

「ふかふか〜もふもふ〜えへへへ〜。」

「ほらユウスケそろそろやめなさい。首締まってるし…。」

「はいごめんなさいやめます。ごめんねきちゆねさん。」

「俺と同じリアクションしやがって…やっぱり俺らは思考回路とか同じなのか…。」

「いやあ、お二人さん大分笑わせてもらったよ。ああ、きちゆね君に幾つか装備をもたせたから使ってくれ。ただ、やはり高性能の物は送れない様になっているみたいだから、簡単なものだけだね。」

「了解です、ありがとうございます。丸腰よりは安心できますよ。」
『検討を祈るよ。』

P i ! ! !

きちゅねさんをもふもふしたりしている内に終わったのか、板みたいなものは消えていた。ユウスケさんはきちゅねさんから大きな鞆を降ろして自分で背負っている。

「なんか文字が出てましたけど、あれで会話してたんですか？」

「んだよ。こつちはしゃべってればいいけど、あつちからは文字だから読まなきゃいけないんだよね。あれ社長ね。」

「しゃちよー？」

「この世界を創った人。」

「神様ですか！？」

「万能ではないけれどある意味そうかもね。そうすると俺は天使かねー。」

「え〜。」

「何そのえーってのは。」

「特に意味はないです。」

「あるだろ〜。お姉さんに話してみなさい…。悪いようにはしないから。」

「お兄さんでしょー。とにかく帰りましょうか。暗くなる前には帰りたいですよ。」

「はいはい。あ、きちゅねに乗ってもいいよ。」

「いいんですか!？」

「俺も乗ったしね〜。二人で乗っても大丈夫らしいよ。明日は二人乗りだな。」

「明日？」

「お休みもらって行くこうじゃないか、隠者さんに会いに。お弁当どうするかな。」

「ハイキングみたいですな。」

「その位の気楽な感じでいいよ。ほら乗った乗った。」

きちゅねさんはちゃんと姿勢を低くして登り易くしてくれる。よいしょと登るとのんびりと歩きだした。おお視線が高いぞー。大人目線だ。そしてお尻の下にふかもふ。

「これは…素敵ですね。」

「だしょ？」

きちゆねの頭を撫でながらユウスケさんは笑顔で私を見る。いつも
こついう顔してればお姉さんぽいになあ。

きちゅうね再び（後書き）

秋めいてきましたね。スズムシの鳴き声聞きながら書いてました。

H・D(前書き)

ハードディスクではないですよ。

「行ってきま〜す!」

「行ってきます。」

「二人とも気をつけるのよ〜。」

「お土産は無理しなくていいからな〜。」

親父さんとおかみさんに見送られてまだ薄明かりの中出発する。

昨日は宿に戻つてすぐに、今日二人で出かけるから休みたい旨を伝えたら快く承諾してくれた。

最近忙しかったし、だったら今日はお休みにするか〜だって。

お弁当もこさえてくれたし、優しいなあ。

ちなみに二人はきちゆねを見て可愛いなあと部屋に入れる事を当たり前に受け入れてくれた。

昨夜はユウスケさんの部屋（2階の客間。私の屋根裏部屋より広い）で寝かせたらしい。いいなあ〜ずるいなあ〜。絶対もふもふしながら寝たに決まってる。

そういえば今朝からユウスケさんの様子が変だ。旅用のマントとしっかり巻き付け、フードもしっかり被っている。全然格好が見えない。

「ユウスケさん今日なんか調子悪いんですか？マント暑いと思うんですけど…。」

「え？あ！うん？大丈夫元気よ！うん。」

明らかにおかしい。目線逸らしっぱなしだし。何か絶対隠してる。よ〜し、こうなったら…。

「あ！あんな所に空飛ぶ焼き立てパンが!」

「え!?!どこに!?!」

こんなよく分からない事を言って引つかかるなんて絶対怪しい。

「えいつ。」

「きゃああああ!」

やたら可愛い悲鳴上げたよユウスケさん。ってこの格好は…。

「ち…違つんだコンスケ…。これはその…社長の趣味で…。」

しどろもどろになりながら真つ赤になつてあたふたしているユウスケさんは見たこともない可愛らしいスカートとスカートの格好だった。

.....

今朝方の事。

俺は早めに起きて、一緒に寝ていたきちゆねを起こさないように、そつとベッドから出る。

もふもふのふかふかのきちゆねをハグしながら寝るとか、高級な低反発布団とか枕とか超えるね。羽布団も要らない…。いいですなあ。昨夜は今日の為に早く寝てしまったから用意は全くしていない。きちゆねハグして夢の中へGOだった。

昨日帰って来て部屋に置いたままの社長に送ってもらったリュックは、俺がよく使ってる親父から貰った官品の自衛隊鞆だった。凄い丈夫だし中身が濡れにくいからいいんだよね。

中に迷彩服入ってたなら笑えないな。丈夫で防御力あるけどこの格好でやったら完全にコスプレだ。

お！これ前から使ってみたかった【長脇差し】だ。確かに強力な武器は送れないって言うてたからな。一応強化してあるみたいだ。研がなくてもいいとかだと助かるな。サバイバルナイフとかの軍用ナイフとかでもよかったけど。なんか銘が入ってる。えーと【稲荷】。凝り過ぎだしまんまだよ社長…。

後は何かな…。

「……………コスプレかよおおお！！！」

和装セーラー服。黒いセーラーに臙脂色のミニスカートで袖が着物みたいに袂まで付いている。マニアックだ！絶対社長の趣味だ！なんでファンタジー世界にセーラー服！？あ、メモが付いている。

『アバター用に見た目重視で作ったやつなんだけど、防御力は結構高いよ。送れるものの中で一番の防御力だから使ってね。後、コンスケ君ではなく、ユウスケ君が着ること。専用服にしてあるからね。』

「……………しゃちょう……………。最早呪いの防具ですよぅう……………」

コンスケ用にはピンクのフリルの服とか入ってた。どうみてもこれもアバター用じゃないのか…。…見栄え重視し過ぎ…。コンスケの武器は守り刀。銘は【葛葉】護身用の短刀だ。

「これ着なきや駄目だよ…な。」

いつのまにか起きていたきちゅねが固まってる俺をベッドの上から

見て首をかしげていた…。

.....

「違うんだ…コンスケ…違うんだよ…あの…」

「可愛いですよ！なんで隠すんですか？」

「いやあの俺さあ、女形とかやったことはあるけど、あれって着物でこんなミニスカートとか履き慣れてないし。女の子の子したのとか…ああああ。」

おやま…とか言われてよく分からないけど、確かにユウスケさんはスカートも基本履かず、ズボンしか履いてなかった。

「よく似合ってますよ、ユウ姉ちゃん。」

「ああううう…。確かに身体はコンスケと同じでも男の意地がああ…。」

何やら葛藤が随分あるみたいだけど、見た目は基本私と同じだし（私との性格の違いか、ユウスケさんの方が最近釣り目だ）、よく似合ってる。つまり私もこういう格好も似合うんだろうなあ。

「私はないんですか？」

「あるよあるんだけど…あるって言ったら朝からこの格好見せなきゃじゃん…。休憩の時にでも渡すよ…。親父さん達に見られなくてよかった…。恥ずかしさで多分硬直してたよ…。」

ユウスケさんは何かに負けたといった感じで白くなってる。

「さあ、道を知ってるのはユウスケさんなんですし、先導して下さい。」

「はい…。きちゅね乗るよー。」

昨日の様に身体を下げて乗り易くしてくれた状態のきちゅねさんに
ユウスケさんは素早く乗ろうとする。

「スカートだから気を付けて下さいね。」
「わ…わかつてるよ！」

いちいち顔を赤らめながらそろそろと動くユウスケさん。可愛いな
あ。

「ほらコンスケも。」
「はい。」

きちゅねさんの上から手を伸ばしてくれる。こっやってちよこちよ
こ気を使ってくれるんだよなあ。

「今日は二人乗りな上に、速度は昨日の比じゃないから、俺にしっ
かりつかまってるよー。」

「あーい。」
「よし！きちゅね、こっちの山の方向ね、GO！」
「のわあああああ！…！！！」

あまりの速度で今度は私が悲鳴を上げるの番だった…。

途中お弁当&mp;着替え休憩を一回挟み、山を一つ越えてさら
にもう一個の山の中腹の滝の近くでユウスケさんはきちゅねさんを
止めた。

「はい、きちゆねお疲れ。」

「きちゆねさんありがとうね。」

「今度お稲荷さんを作ってあげよう。」

「お稲荷さん？」

「ふふ…今度ね。」

なんだろう。食べ物かなあ。ユウスケさん料理も上手なんだろうなあ。

「さて、ここみたいだね。」

「綺麗な所ですね。」

「もうお昼ちよつと過ぎか。結構かかったな。」

「ユウスケさんが動揺しなければ多分もう少し早かった気が・・・」

「うっしやい。」

また顔が赤くなった。いつもお兄さんの感じだから、からかうとおもしろい。

滝に向かって張り出した岩壁の先に小さな家が一軒。周りは綺麗なお花畑になってる。香草なのかな？お店でよく嗅いだりする匂いも漂ってるけど、一番香ってくるのはラベンダーの香りだ。

ユウスケさんを先頭に、私、最後にきちゆねさんがとことこついてくる。

「ごめん下さい。」

ノックをすると中から声がする。在宅中みたいだ。

「はいはい、どういった御用かしら？」

「村で門について知っている隠者さんがいると聞いてここに来たの

ですが。」

そうユウスケさんが応えると静かにドアが開いた。

「あら、可愛らしいお客様ね。狐が三匹も。私はその隠者H・Dよ。」

H・D（後書き）

自衛隊で採用されている備品はどれもスグレモノです。

基地によってはお土産で買えるのでかなりいい感じですよ。戦闘用糧食がおススメです！買えないけど、自衛官の迷彩服は本気で丈夫なので防御効果は確実に高い模様。

女形「おやま（おんながた）ですね。アクション俳優が演じることがはまらない…という訳でもなくやれと言われたらやるそうです。当然着物にカツラ、白塗りです。普通の男の人には慣れるまで葛藤があると思います。

うわあ〜綺麗なお姉さんだなあ。なんかこう淑女って感じ。

髪の毛銀色でサラサラだし、何か光ってツヤツヤしてる。服も薄紫色主体で何か全体として色気があるなあ。

ぽけ〜っと見取れてる私をほっというてユウスケさんはさらに質問を続ける。

「その門の場所はどこですか？」

「慌てるごじきは貰いが少ないわよ。狐でもね。とりあえずお上がりなさいな。お茶でも飲みながら話しましょう。」

「ああ…すいません慌てちゃって。お邪魔します。」

「お邪魔します。」

「くーん。」

きちゅねさんもそのままついてきたけど、H・Dさんは何も言わず笑顔のまま客間に案内してくれた。

部屋には窓際にハーブが吊るしてあって、落ち着く香りがする。部屋の真ん中には大きな木製の机と椅子のセット。使いこんであるみたいで表面はとっても滑らかだ。棚には大量の本が綺麗に整頓されて入ってる。背表紙に書いてある文字は読めないなあ。どこの言葉だろ。家具なんかはどれも年月を感じさせるものなんだけど、手入れがよくされていて味わいがある。

部屋の中を色々見てまわってるうちにH・Dさんがお茶を入れてきてくれた。これも素晴らしい香りがする。

「うちの庭から摘んだハーブティーよ。身体にいいんだから。」

「頂きます。」

「いただきます。」

「…コン…。」

きちゆねさん熱いのは駄目そうだから冷ましてあげよう。黙ってきちゆねさんの分も出してくれたけど、飲むのかなあ。

「いいお茶ですね…。」

「でしょ？土がいい上に日当たりも程よいからスクスク育ったうちのハーブ達なのよ。手入れしないとすぐに好き勝手生えるから大変なのよね。」

「ハーブ類は繁殖力旺盛ですからね。」

私がきちゆねさんの分をふーふーしてあげてる間になんか主婦の様な会話が続いていく。

「さて…本題ですが…」

「私もね…」

ユウスケさんの話を遮ってH・Dさんが話し始める。

「話してあげてもいいんだけど、我らが王もつるさいのよ。見極める…とか言われてるんだけど、荒事は嫌いなよね…。もう真っ向唐竹割りされるのは趣味じゃないでしょ？ニンゲンさん…？」

「つつ！」

「ユウスケさん！」

穏やかな語り合いから、いきなり殺気立った気配でユウスケさんが

立ち上がり腰の剣に手をかける。

「例のヤツの仲間か。」

「…だから、荒事は嫌いって言ってるでしょ。こぼしたお茶は拭いてよね。最後まで話を聞きなさいな。」

「ユウスケさんとりあえず落ち着きましようよ。きちゅねさんもお茶飲んでますし。」

冷ましてあげたらちゃんとお茶飲み始めたきちゅねさん。器用にカップを傾けてのんでる。さすがに持ち上げないでテーブルの上だけど…。

「その娘の言う通りよ。言ったでしょ慌てるこじきは貰いが少ないって。話はまだ終わってないわ。」

「…すみません…。」

「王からは見極めるなんて言われてはいるけど、別にやり方は決められてないわ。だから…。」

「だから…?」

まだ殺気立ってるのかユウスケさんが低い声でつぶやき返す。恐いよお。

「料理対決なんてどうかしら?」

ガッタン!

今度こそお茶を完全にこぼしながらユウスケさんはひっくり返った。

「よくわからん…が戦闘にならなくて助かった…。」

「料理対決かぁーユウスケさん何作るんですか?」

「肉類禁止で基本この辺りにあるものだけ…ならサラダか…炒め物

「いやパスタもいけるかなあ。」

毒気を抜かれ、さらには料理のレシピを考える…と、ユウスケさんはぶつぶつ言いながら家を出て花畑に材料を探しに行った。しかし、H・Dさん面白い人だなあ。

「なんかすいません。姉が迷惑かけて…。」

「大丈夫よ、カップも割れてないし。お皿は木製のものにしておこうかしらね。」

「お願いします。でもなんで料理対決なんですか？」

「夕飯のおかずが増えるでしょ。それにお客様がいるのに楽しまなくちゃね。」

マイペースだ…。でもさっきの会話幾つか気になるなあ。

「さっき王…って言うてましたが、王様がいらっしやるのですか？」

「あら？ユウスケ君から聞いてないの？あなた達が分離したきつかけ作った人よ。まあ正確には人じゃないけどね、私も。」

「へ？」

「ある程度力を付けると変身出来るのよ、人間形態に。これ以上は内緒。王は封印されて長かったからね。また色々別なんだけど。」

「??？」

「ともかく、あの子を支えてあげてね。二つに分かれてしまったのは私達も想定外だったけど、中々うまくやってみたいじゃない？」

「はあ…私が支えられてますよいつも。」

「それも甘えの一種かもしれないわよ。隙を見せないタイプもいるんだし。とりあえず私も料理作りにかかろうかしらん。」

話しは終わりとばかりにH・Dさんはエプロンを付けてキッチンに向かった。

「食材は肉類以外はあった…パスタかな…」

俺はぶつぶついいながら複雑だった。あの物言いは明らかに全部分かってる。分かった上で楽しんでる。私達と言ったが何人か門の守りに入っているのか…。一人ずつでもあの時のレベルのが来たら勝てる気がしない…。コンスケを残してきてしまったけど、明らかに戦闘する気はなかったから大丈夫だろう。いざとなればきちゆねに逃がして貰う事も出来る。

気付けばハーブ園を越えて、ラベンダー畑の辺りにまで来ていた。

この身体で嗅覚が上がってるからあんまり長くいると鼻が麻痺するかもしれない。

そういえばあのH・Dもラベンダーの香りがしていた。

ラベンダー畑の端に何かある。近付いてみると墓だ。【L・D】とだけ書いてある。H・Dの家族のものかな。一応礼だけしておこう。

「さてそろそろいいかしら？」

「OK！」

「私はこれよ！」

やたらとテンション高いH・Dさんの作ったのはピザだ。ルッコラやバジル等の香草たっぷり、チーズもたっぷり乗っている。採れ立て新鮮のいいハーブを使っているから香りが凄くいい。

「俺はこれだ！」

ユウスケさんも負けない位高いテンションで出してきたのは、 Pastaだ。刻んだバジルをオリーブオイルでソースにしている、松の実と茸が爽やかに彩る。

いつの間にか審査員にされた私を羨ましそうにきちゅねさんが見ている。後で分けたげよう。そもそもこれは明らかに4人用位の量がある。私1人で食べきれないわけがない。

どちらも一口、二口程食べてみる…これは！

「ううむ甲乙つけがたしです…。でも！」

神妙な顔した二人がゴクリと喉を鳴らす。

「パスタの勝ちです！」

「よっしゃああ！」

「負けちゃったかあ。あらら残念。」

「松の実の香ばしさで若干ユウスケさんのパスタの風味がよかったです！」

「ううむ松の実なんてやるわね。」

「滝から流れて来ていたのをたまたま見付けただけですよ。H・Dさんも鮮度を活かしたピザよかったですよ。」

熱く握手を交わす二人に何やら友情が芽生えたみたい。よいことだあー。

「取り皿持ってきますね。」

仲良くおいしく料理を頂き、また食後のハーブティーを飲んでまったり。

「ああそうそう、これ渡しとくわね。」

H・Dさんがユウスケさんに手の平大の薄い板みたいなのを渡した。真珠色つていうのかな、角度によって色が変わって綺麗だ。

「私の鱗だから大事にしてよね。それがあれば滝の裏の門の所に行けるわよ。」

「うるこ？」

「解った。大事にしますよ。」

なんだかよく分からない私をほつといて二人は何か納得したようだ。

「洗い物はやっておくからさっさと行ってきなさいな。泊っても構わないけど、今日中に帰った方がいいんじゃない？」

「ああそうだった。すっかり寛いじゃった。ありがとうございます。」

「

「うちのお店にも今度来て下さいね。」

「コーン。」

H・D 2 (後書き)

ハードディスクやレーザーディスクじゃないですよ。
ユウスケが作ったのがジエノベージェ。

H・Dさんが作ったのはハーブピザかな。
どちらもうちで作った事があるものを出しています。

原初の愛は我を作る・・・

「ここか…。」

鱗が反応したのか、滝壺の所に飛び石の様なものがかほのかに光りながら浮かんでいる。暗くなり始めてきているから目立つ。

そこを渡っていくと、何故か滝の水に濡れずに通過出来た。

後ろでコンスケがあわあ言いながらついてくる。身体能力は同じのはずなのに、危なっかしいなあ。

案の定滝の裏は洞窟になっていて、一人ずつしか進めない程の狭い道をくぐると大きな空間になっていた。そしてその奥に黒い塊…門だ。

「ふわ〜おつきいですねー。」

コンスケ背伸びしても届く訳ないぞ。

俺ときちゅねは前回の事もあって、警戒したまま近付いていく。今のところ変化なし、脇差しはいつでも抜けるように右手は柄辺りに左手は鞘に触れておく。

「これだな。」

「これが門ですか？」

「そうだ、もしかしたら何か急に現れるかもしれないから警戒しておいてくれ。」

「わ・わかりました。」

さすがにそろそろ気を引き締めてもらおう。二人ともスッパリ切られて四人になるとか笑えないし、そもそもそんな事になる前に死ぬ可能性も高い。

見た所、この前の門と形は同じだな。特に材質も違いは見られない。仕方がない、触るか。

「コンスケ下がってる。きちゅねのそばを離れるなよ。」
「ひゃい。」

俺が真剣な声を出したからか、コンスケも緊張してきた。ぺたり。冷たい石の温度だ。それ以上は何も感じないし、何も変化は感じられない。

「ハズレか…。」
「当たり前もあるんですか。」
「うむう…。」

思わず詰めていた息を吐き出す。コンスケもきちゅねも俺が脇差しから手を放し、気を緩めてからようやくと気を抜いた。

「しかし立派な門ですね。これ開かないんですか？」
「ロダン氏の一番始めの設計の時点では美術館の入口にする構想だったらしい。でも結局間に合わなかったとかで、普通に美術品として作っただけから、特に開いたり動いたりはしないよ。そもそも裏側は壁との間に隙間が少しあるだけだろ？門を開けられたとしても何もないよ。」
「あーほんとだ。しかしなんか装飾ゴテゴテですね。」
「ダンテの神曲という作品にインスピレーションを得たらしい。地獄の門というタイトルだしね。」

「地獄…？」
「悪いことした人が死んだ後に行くところらしい。実際はわからん。死んだ経験はないからな。あー一回あるか。意識なくなって終わりだったから覚えてないわ。」

「へえ。」

「まあ真似すんなよ。文字通り死ぬほど痛いからな。」

「真似したくもないですよ！」

「さてと…何も無いようだから帰るか、そろそろ完全に暗くなる。

きちゅね「狐火。」

「コーン！」

「あら明るい。」

「触ると熱いから気をつけろよ。」

「はい。あれ？」

「どうした？」

「門の上の方、色が付いてますよ。」

「本当だ。きちゅねあの辺りに火を持ってきてくれ。」

「コン。」

真珠色のドラゴンのレリーフが付いていた。勿論オリジナルにそんなものはない。今回ここに来る前に嫌になるほど写真を見せられて覚えさせられていたから間違いない。意味はあるのか…社長に報告しておこう。

「ふう。目を凝らしてて疲れた。あくまで飾りみたいだ。」

「じゃあ帰りましょう。夕飯に間に合いたいです。」

「そうだな。」

洞窟を出ると、もう辺りは大分暗くなってきていてH・Dの家の明かりも点いている。

休憩なしで一気に帰れば、そう遅くならずに帰れるだろう…。

.....

「随分静かになったわ。たまには賑やかなのもよかったですでしょう？あんまりお客さんも来なかったし。B・Dもお店があるからって中々会いに来てくれないのよ。まあ、あの子達の事もあるから今度は私から会いに行ってくるわ。」

狐達が去った後の家近くの墓にH・Dが声をかけている。

「ラベンダー水置いておくわね。お休みなさい父さん。」
返事をするかの様に風がラベンダー畑をざあっと駆け抜けていった。

原初の愛は我を作る・・・（後書き）

【L・D】に捧げます。

温泉町ツリータウン(前書き)

久々の更新です。

世界観も設定してきたので、今後始めの辺り等に修正する可能性があります。

温泉町ツリータウン

「あ〜あ〜ベトベトするっわああ……。」
昨日から宿屋の風呂窯（薪を入れるタイプだ）がぶっこわれてしま
った…。

普段は仕事明けに宿屋のそこそこ広い共同風呂でのんびり汗を流し
ていたからなあ。昨夜はお湯を沸かしてもらい、濡らしたタオルで
身体を拭くだけというのでしのいだが結構きつい。

狐の一種？だからか汗かく量は少ないんだが、やっぱり昼間働いてる
と汗はかくからシャワー位浴びたい。むしろ疲れを取るにはやはり
湯舟に浸からないと…。

「コンスケ〜生きてるかあー。」

「無理ですう…。」

屋根裏部屋で溶けているだろうコンスケに声かけてから入る。
案の定コンスケもダラダラ溶けている。

「今日も厨房でお湯沸かしてもらおうか…？」

「身体拭くだけですからねえ…。なんか毎日わざわざ沸かしてもら
うのも悪いですし…。」

「尻尾拭けないしなあ。川に水浴びに…」

「それもなんかヤです。」

ううむ…我が儘なヤツめ。中途半端に現代人的な思考め。

大体が、ファンタジー世界なのに、共同の風呂付きの宿屋に拾われ
た時点で結構甘やかされてるからなあ。まあ社長もただだけ考えて
作ってるんだか…。こちらドラム缶風呂レベルとか、部屋に風呂

桶置いて沸かしたお湯入れる（中世風？）とか、川で行水…とか覚悟してたのに、普通に旅館の風呂レベルだもんなあ。

村共通の銭湯もあるらしいけど、混浴…。きついなあ。一応身体は女の子だから周りも気を使うだろうし。

村の女の人達は大体まとめ入っちゃうれしいが、俺達が働いてる時間にささっと入ってるみたいだしなあ。

ヒーローショーのテントの中で男女ぐちゃぐちゃに混ぜたって着替えたりしてたけど、やっぱり今の状態だな。

「時間見計らって銭湯行くか？二人で行けばまだ恥ずかしく…ないかもよ。」

「エー。」

なんか風呂入れないストレスでグダグダだな。気持ちはわかるが…。

「コンちゃんユウちゃん！」

「はい！」

「はい！」

「お風呂直るの一週間かかるってー！」

「ええ~~~~~!!!!!!」

流石に二人の声が八モった。

「コンスケよ…由々しき事態だ…。」

「そうですね…。」

「コン…？」

寝ていたきちゅねも起こして作戦会議である。非常自体宣言発令中である。

「銭湯はもうすぐ時間的に男祭になる…。」

「はい…、そこに特攻なんてありえませんか。」

「昨日の方法では、我々の尻尾まで満足に洗えない。」

「はい…付け根が既にイヤな感じですよ…。」

「隣町に素敵な温泉があると聞いた。」

「なんと！」

「しかも男女別だ！」

「素敵！」

「コーン？」

「ただ…」

「ただ…？」

「俺と一緒に入るの平気か…？」

「ああ…そこは大丈夫です。どうせ私の身体じゃないですか。」

「じゃあ行くか。」

「はいです。」

「コーン？」

着替えなんかをまとめ、二人してきちゅねに乗り込む。目指すは隣町ツリータウンだ。きちゅねの足ならすぐに着くだろう。

ツリータウン…と町を名乗ってるけど、正直リーフタウン（村レベル）と同じでそんなに賑わってないだろうと思ってたら湯治客が結構いる様だ。

温泉饅頭とか温泉卵とか売ってるってどこでも同じなのね…。お土

産買って帰るか。

「コンスケどこのお風呂にしようか？」

「沢山あって選ぶの大変ですね。」

きちゆねを後ろにタラタラ歩く。客引きとかはあんまないのね。

「お！ここなんていいんじゃないかな？」

「どれどれ。いいんじゃないですかー！」

ちよつと洒落たホテルの様な外観の建物の前に看板に色々書いてある。なんか竜の彫刻まで置いてあって豪華だな。しげしげと見てみると頭に鉢巻きを巻いてハッピー（風）を羽織ったお兄さんが出てきた。

「可愛いお嬢さん方いらっしやーいませ。うちはお肌スベスベになつて疲れも抜ける炭酸風呂がウリだよ！」

「素晴らしい！」

「ユウスケさん行きましょうー！」

「はい！二名様ご案内！」

ニコニコしながら俺らを先導する。しかしこの人背が高いな。親父さんよりでかそう。

「（なんかお食事処みたいな客引きだな…。）」

「（ですね。）」

「コーーン。」

「おお！なんか内装も落ち着いてるし、いい感じだなあ。」

「うみゅー。これは安らぎますね。」
「小旅行って感じだなあ。」

ホテルの様な素敵な館内に案内された俺たちは履き物を脱いで、結構リーズナブルな受付を済ませ、共用のロビー部分を通って脱衣所へ。勿論女性用だ。きちゅねも当たり前についてくる。何も言われなかったけど風呂屋からすると何扱いなんだろう？ペット？すばぱーっつと脱いで浴槽フロアへ。

「コンスケお先！おゝ豪華だ！」

山あい開放的に作られたお風呂場からは遠くまで風景が見渡せて、これから沈もうとする太陽が随分と幻想的だ。

「綺麗ですね。」

いつの間にか来ていたコンスケも一緒に見とれていた。

「今日という世界が終わって、また明日の朝に世界が始まるんだな。」

「毎日生まれ変わってるみたいですね。」

「そうかもしれないな。」

「身体洗いますよ、風邪ひいちゃいますよ。」

「だな。ん…コンスケしつかりとタオルで隠してんのな。」

「だって恥ずかしいじゃないですか。ユウスケさんこそ腰回りだけじゃなくて全部隠しましょうよ。」

「胸隠す程ないんだからないんだからいいじゃないか。」

「…！！…う…ああ…。それでも…それでもお…」

「あ…ごめん…コンスケほら…背中洗ってやるから許してくれよ…。」

「髪の毛も洗って下さいよ…。うう…ペタンコだって需要あるもん」

…あるんだもん…！」

姉ちゃんで巨大な見慣れてたからなあ…。俺はどちらでもいいし、揺れないから動き易くてありがたいたが。大きいと肩凝るから大変らしいけど、そんな事言っても慰めにもならないな…。ああ、コンスケがこの世の終わりの様な顔して床に「のの字」書いてる…。

用意してあった石鹸と身体洗うタオルを取り出して、コンスケに渡す。

「前洗つたら声かけるよ。」

「…はい…。」

こいつ、へこんでるからって尻尾で受け取りやがった…。器用だな。とりあえず俺も汗を流すか。

「ほらちゃんと目をつむってないと目が痛くなるぞ。」

「そんなんわかってますよーだ。」

「俺もだけど髪の毛長いから洗いづらいだろう。」

今二人共、肩甲骨位までの長さはある。

「普段は尻尾で桶絡めて、下向いたままシャンプー流してます。水で濡れた髪の毛で顔が埋まると大変なんですよね。」

「俺は桶にお湯ためてそのままガシガシと目つむって洗ってた。ずっと下向いてると疲れるよな。」

「気合いですね…。あゝそそ気持ちいいです。なんだか慣れてますね。あれ？ユウスケさん女の子とお風呂入る機会多かったですか？モテモテですか？」

「んなわけあるか。姉ちゃんの髪の毛洗わされてたんだよ。面倒臭いからやれーって言われてな。」

「ふふふ仲良いんですね。」

「まあ家に大体二人だけだったしな。」

「そうなんですか？」

「ああ、親父もお袋も仕事で家に滅多にいなかったからな。おかげで俺も料理随分慣れたし、大抵の事は出来るぞ。姉ちゃんはあるま何も出来ない…っか出来てもやらないな。」

「ほへへ。」

「ほーら流すぞ。」

「あいー。」

「ふ~~~~。」

解放感溢れる露天風呂。

贅沢だな。都会に住んでみると自然が豊かなのは貴重だと感じる。空気も料理もうまいし。

「ほにやら〜。」

「コンスケお前いつもそんなに溶けてるのか？」

「今日だけですよー。髪の毛も凄くサツパリしたし。尻尾も綺麗。言う事なしじゃないですか〜。」

「確かに。」

結局俺も髪の毛洗ってもらい、尻尾も泡立てて綺麗にした。特に尻尾は盛大に泡立てるから他にお客さんがいたら中々出来ない。貸し切り状態は最高だ。ちなみにきちゅね身体を洗ってやった後は勝手にそのままに炭酸風呂や足湯を楽しんでいる。頭にタオルでも乗せたら似合いそうない顔してるし。

「なんかー。」

「んー？どうしたー？」

「こーやって見上げてると星空に吸い込まれそうですねー。」

「んーだなー。そういや星ってさー。」

「んー。」

「今見えてる星の光って何千年も前のものらしいぞー。」

「どーゆーことですかー？」

「あんまりにも遠くに星があるから光が届くまでに時間がかかるんだってさー。」

「へー。あの星が実際光った時にはここには誰がいたんでしょうねー。」

「案外うちらみみたいな狐が同じ様な事を話してたのかもな。じゃなかったら神話の人達かもなー。」

「じゃあ、きつとーきちゆねさんもいましたよー。」

「かもなー。」

なんだかそんな光景を想像して笑ってしまった。

「ゆだったー。」

「顔赤いぞ、大丈夫か？」

「だいじょーぶれすー。」

「駄目だ…。」

結構長湯したなーとコンスケに声かけて出たのはいいが、俺と違い途中で一度も身体に水かけたりしなかったコンスケは完全に湯あたりしてのぼせた様だ。まさに溶けてる。

仕方ないので用意されてる浴衣（みたいな服。着易い。）を着せてやった後扇いでやっている。

「しゅぽー。」

「うーん。なんか冷たい飲み物でも…」

え！？なんでここにこんなものが売ってる！？まあいいやもう突っ込むのやめた。

「コンスケこれ飲んでみる。」

「なんれすか？コレ？」

もつきゅもつきゅと飲み始めた。

「コレ！美味しいー！」

あ、シャキツとした。

「ちなみにこれはフルーツ牛乳だ…。」

温泉町ツリータウン（後書き）

作者が温泉に入りたいという願望もあります…。

F・D（前書き）

コーヒー飲むと酔っぱらうのはコンスゲだけです。

「そう、うちの看板商品のフルーツ牛乳だぜ。」

ロビーで休んでいる俺らの所に案内してくれたお兄さんが声をかけてきた。

「いいですね！フルーツ牛乳！」

「そうだろう、そうだろう！」

なんかやたらテンション高いなこの人…。赤い髪の毛がさらに、なんだか、うっとおしい……。

「うちの素敵ラインナップに、温泉卵、温泉まんじゅう、川で取れた魚の塩焼きなんてのもあるぜ！」

「素敵！」

なんか渋いなあ…。この世界だと斬新なのか…？

「お！そっちのお嬢ちゃん！何も飲んでないじゃないか！ホラこれ飲みな！俺の驕りだぜ！」

声デカイなあ。しかも渡されたのはコーヒー牛乳か。イチゴ牛乳とかはないのか。

「イチゴ牛乳忘れてた！パックでは見たあつたけど、瓶では見た事なかったなあ。ありがとう！」

「ああ…ハイ…。」

「ユウスケさんなんですかその素敵飲み物は!？」

「ああ…うん、コーヒー牛乳だよ。飲むか？」

「もちろんです！」

「あゝそんなに一気に飲むな。俺の分残しとけよ。」

「ぷはぁ美味しいです！」

あー飲み切っちゃった…。少し飲みたかったのに。アレ？一回シヤキツとしたコンスケがまたぐにやぐにやしてる…。

「おいコンスケ大丈夫か？」

「だーいじょーぶれ〜す！」

なんか耳も尻尾もくたりたりとして酔っぱらってるみたいになってるなあ。もう溶けて動かないからきちゅねに乗せとこう。

「きちゅねゴメンな、頼む。」

「コーン。」

体を乾かしてたきちゅねにぐんにやりしたコンスケを乗せる。

「おいおいそっちの嬢ちゃん大丈夫か？湯あたり直ってなかったのかな。」

「そつみたいです。ちよつと横になれる所ありますか？」

「今日は宴会入ってないから宴会場に寝かしといていいぜ。」

「ありがとうございます。きちゅね行くよー。」

「ココン。」

洋風のホテルの外観、内装なのに宴会場は畳…。なんでやねん。また突っ込んでしまった。

座布団を枕代わりにして、コンスケを寝かせる。

「コウスケさんが4人に増えてる〜。分身の術覚えたんですか〜？」

「そんな高度な技覚えてたらお店で使ってるわ。ほら寝てなさい。」

「ひゃ〜い。」

素直に眠り始めた。酒癖も悪そうだな…。

「なんかすいませんお兄さん。」

「いいて事よ。それだけうちの風呂が気持ち良かったって事だろ？ありがてえよ。ああ俺の事はお兄さんじゃなくて気軽にF・Dと呼んでくんな。」

「…F・D…ですか？」

「おうよ。まあ愛称というか通称みたいなもんだから気にんすんな。」

まさかね…。明らかに俺を女の子扱いしてるし、そういう気配もなし。大丈夫かな。

「それでよう！お客が来たのはいいんだがご年配ばかりなんだよう！コンセプトは間違っちゃないと思うだがよう！」

「はあ…。悪くはないと思いますけど。」

何故か俺はそのままF・Dに捕まって宴会場でクダを巻かれている。といっても二人とも飲んでるのはフルーツ牛乳とかコーヒー牛乳のはずなんだけど…。雰囲気酔いつてやつなのかな？

F・Dはこの温泉旅館のオーナーをやりつつ、このツリータウンの温泉協会の顔役みたいなものもやってるらしい。で色々PRしてるらしいんだが、若い客層が来ないと嘆いてる。確かにこういう温泉街ってご年配多いよね。

「お隣のリーフタウンから若い衆がまとめて来る時あるんだけどよ、季節毎にしか来ないんだよ。」

「ああ鉱山で働いてる人達の慰安旅行ってここなんだ。」

「おお！嬢ちゃんリーフタウンから来たのか！いつもありがとよ！後でお土産に饅頭持って帰るといい。」

「ああ…ありがとうございます。」

やっぱりあれか、レジャー施設化しないと駄目なのかな。そもそも定期便が少なのと、馬飼ってるお宅少ないし旅は気軽に行けるものでもないだろうなあ。送迎バスとかないし。後はあれか美容とか名所で売り出すとか…。そんな事を現実世界の事を伏せつつ軽く話してみる。

「定期便…。専用の馬車で温泉行きとか作るか…。後は名所といったらあれだな！嬢ちゃんちよっとついて来てくれ。」

「？ああ…はい。」

何かあるのかな。コンスケを放置するのは怖いけどきちゅねが横にいるから大丈夫だろう。

温泉旅館の裏側、山に少しだけ入った所に野ざらしにそれはあった。

「これなんていかにもご利益ありそうだろ！」

「……………ええ……………」

もう突っ込む気も起きない。地獄の門でございます。この人守護しるとかのH・Dと同じ感じじゃないのか？適当過ぎる…。しかもご利益とか言ったら尚更ご年配向けの感じじゃないか。

「この黒光りする石！ちよっと裏手にあるというワクワク感！いいだろう！」

「ちよっと触ってみていいですか？」

「おうよ。」

警戒する気も沸かないな、ペタペタと触ってみる。黒曜石かな？冷たくて気持ちいいや。上の方に赤く塗られたドラゴンのレリーフがあるな。案の定何も起きない。これもハズレか。じゃあもう観光名所でも何でも好きにして下さいな…。

「せめて若者向けにするならパワースポットとか言いましょうよ。」

「お！それ採用！流行りそうだな。」

「朝焼けや夕焼けも綺麗に見えそうな場所ですし、それを見た後うちの温泉へどうぞ的なPRでいいんじゃないですか…？」

「いいねいいね！」

温泉旅館へ戻りつつ、テンションがまた上がっていくF・Dさん。
俺のテンションは…言うまでもない。

後日、早速始まった温泉直行便（もちろん馬車）が宿屋にチラシを置いてった。

曰く、「パワースポットでご来光を眺めよう！その後は温泉でしっぽりと！」「美容と健康に素敵なひとときを。」

なんかうたい文句が古いのはもう突っ込むのすら諦めた。つーかチラシのイラストに狐娘使ってるとか許可取られてないぞ！今度文句言って温泉入り放題券を奪ってやる！

F・D（後書き）

お風呂でお酒飲むと美味しいいらしいですが危険なのです。

キノコをもとめて（前書き）

お待たせしました。
今回は難産でした…。

キノコをもとめて

「明々後日までにポルチー二茸を取って来て欲しい。」

「またレアな食材を……」

「なんですか、『ぼるちー』って?」

「香りが良くてシャキシヤキと歯ごたえもいい美味しい茸なんだよ。煮込んだりすると美味いんだ。贅沢なんだぞー。」

「ユウちゃんよく知ってるね。」

「ええ、家でよくパスタとか作ってましたから。」

仕事が終わって、今日も一仕事終えたと和んでいる私達に親父さんがそんな頼みごとをしてきた。

なんでも昔お世話になった人が、明々後日の夜に食べに来るらしいんだけど、仕込みもあって手が離せないそうだ。

結構珍しい茸で、この辺りだと水晶の谷という所でしか採れないらしい。水晶の谷にはポコポコ生えてるらしいけど、虫食いが多くて選別したりするのに時間がかかるものらしい。

ここから馬で一日かかるかどうか……位の距離だった。

きちゅねさんの速さなら、明日朝早くに出発すれば期限までには帰ってこれるかな?

今回の旅は野宿の必要もあるからと、ユウスケさんがテント等をしやちよーさんに発注すると言って出ていった。

私は食糧の調達に村の雑貨屋さんへ。お会計が済んで買い物袋に物を詰めていると声をかけられた。

「おおコンスケちゃん奇遇だね。」

「あれマスター?どうしたんですか?」

烏龍亭のマスターだ。最近お店に行っていないから久しぶりな気がする。

「俺も買い物位するよ。シナモンきらしててね。コンスケちゃんこそ、こんな時間にそんなに買い込んで明日はキャンプでもするのかい？」

「そんな感じですよ。ちよつと水晶の谷まで茸採りに行くことになって。」

「水晶の谷か……。」

マスターが渋い顔になった。なんだろう？

「あそこはC・Dの管轄だから……。何もなければいいけど。よしこれを渡しておこう。」

「なんですかコレ？」

「お守りだよ。必要ない事を祈ってるよ。気を付けてね。」

マスターから何か薄い板みたいなものをもたらった。手の平より小さい位のサイズで、光が透けない位に真っ黒だ。

私にお守り？を渡してくれた後、シナモンが入った瓶を持ってマスターは行ってしまった。お礼は今度言っておこう。

買った物を二階のユウスケさんの部屋に運び入れる。

「おかえり〜。おい……コンスケ買い過ぎじゃないのか？リュックに入る量を越えてると思うぞ……。」

「あれ？だつてユウスケさんいっぱい食べるから。」

「確かに俺は結構食べるけど、荷物になるし、現地調達出来るものもあるからそんなには必要ないよ。まあ入らない分は置いていこう。」

「はい。」

確かに鞆はある程度大きいけど、今回は寝袋やテントも持ってくから結構な量になっていた。失敗したなあ。

「よし、これを詰めて……後は明日でいいかな。明日は朝早くに出発

して、暗くなる前には水晶の谷へ到着、一泊して明るくなったら茸採って帰る。期限の日の前日には帰ってこれる予定。何か質問意見文句その他ある人？」

「はい。おやつにバナナは入りますか？」

「つぶれたら嫌だからなしです！。つーかベタなネタを…。ほらさつさと寝るぞ。きちゅね連れてベッドにGOー。」

「はい、お休みなさい。」

翌朝早く宿屋の前で親父さんの見送りの中、ユウスケさんはきちゅねさんの脇に紐で荷物を括り始めた。

「帰りは食料品が茸だけになって軽くなる予定だ。我慢してくれよな？きちゅね。」

「コーン。」

「わかったわかった。ちゃんとブラッシングもしてあげるから。」

「温泉にも連れて行きましよう。」

「それお前が入りたいんだろ？まあ戻ったらのんびり温泉もいいな。」

F・Dのとこ行こうぜ。」

「いいですね。」

「よし出来た。」

「二人とも頼んじやって悪いが気を付けて行ってきてくれな。」

「大丈夫ですよ親父さん。」

「旅慣れてますから。」

「では行ってきます。」

「行ってきます。」

真横にいた太陽がすぐに私達を見降ろす位置になった。雲もなくて

日差しがちょっとチリチリする。
きちゆねさんは普段より速度を落として、揺れないようにと意識してくれているみたい。
「いい天気でよかったですね。」
「そうだな。雨だと視界も悪くなるし、きちゆねもこんなに速く走れないだろう。」
「湿気で髪の毛や尻尾がはねるのも嫌ですよ〜。」
「爆発すると直らないんだよな〜。」
そんな事を話してる私達を乗せながらきちゆねさんは軽やかに駆けていく。

ちよこちよこ休憩挟みつつ、夕方になるかならないか位で水晶の谷へ到着した。景色が森の緑から岩の灰色に変わり、切り立った崖に挟まれた谷底は涼しそう。崖の途中途中にキラツと反射するものがある。あれが水晶かな。

「よし、まず野宿出来る場所を探そう。」

「はい〜。どういう所がいいんですかね？」

「ん〜。出来れば木の根元とか。洞窟なんかがあると楽かな。テントが風に飛ばされたりもしないし。」

「あそこの洞窟なんてどうですか？」

「お！いい感じ。ちよつと見てみよう。」

谷に入つてすぐの所に、おあつらえ向きの洞窟があった。奥行きもそんなに広過ぎるわけでなく、程良い感じ。

「獣の気配もなし。寝ぐらにされてもないみたいだし…良さそうだな。ここにしようか。」

きちゆねさんから下ろしたテントを洞窟の中に二人で広げてユウスケさんがテキパキとテントを設営する。

「この中で空気も流れてるし、火も炊けそうだからご飯にするか。」

腹は？」

「途中で軽くパンをつまんだりしたただけだから結構空いてます。」

「ん、キャンプ定番のカレーでも作るよ。テントの中に荷物運んじやっというてー。」

「はい。」

その間に辺りから集めていた小枝でたき火の用意をし、食事の用意を始めるユウスケさん。

「ユウスケさんも疲れてるだろうし、なんか何も出来なくてごめんなさい。」

「どうした急に？」

「いえ…なんかいつもやってもらっちゃってるし、私何にも出来なくて…。」

「野宿なんてやったことないんだから、いきなり出来る訳ないだろ。出来ない事は悪い事じゃないよ。少しずつ覚えようとしてくれればいいんだし。お店の仕事だってすぐに覚えたんだろ？俺も少し教えただの見た感じコンスケは覚えがいいから大丈夫だよ。」

そっぴいながら優しく頭を撫でてくれた。ちよつと涙出そう…。

「はい。」

「ん…今日は朝も早かったし、さっさと食べて寝てしまおう。食器の用意お願いな。」

ご飯を食べて後始末している間に一気に暗くなった。私はテントの中、ユウスケさんは火の番をしながら寝袋にくるまった。みの虫状態だ。きちゆねさんは流石に疲れたのね、もうぐっすり寝てる。

静かなんだけど、虫の声や鳥の羽音が聞こえる度にちよつとビクッとしてしまう…。ごそごそと寝がえりうってるとユウスケさんが声をかけてきた。

「ん…コンスケ…眠れないのか？」

「はい…何だか寝付けなくて…。」

「お泊りは初めてだもんな。しかも野外だし。眠くなるまで少し話

すか？」

「いいですよ。ユウスケさんの昔の事とか聞いてみたいです。」

「昔ねー。さつき食事の前に話した事だけどさ、俺、昔は何にも出来なかつたんだよ。」

「そうなんですか？完全無欠みたいに見えますけど。」

「そんなに何でも出来るわけじゃないよ。前にも話したけど、姉ちゃんとか二人の事が多くてさ。色んな事を失敗しながらちよつとずつ慣れていったんだよ。」

「そうだったんですか…。ちよつと意外です。」

「武術と一緒にさ、まずは基礎をずつとやるんだよ。で、身体が覚えて来たら少しずつ他の事もやっていって。まあずつと勉強だけどな。そうやって積み重ねたものが自信になるんだよ。怖がらずにやったらいい。俺もフォローするからさ。」

「…はい…。」

何でこの人はこんなに優しくして強いんだろう。私はまだまだだなあ…。ちよつとずつやれたらいいな。

話してて落ち着いたのか眠くなってきた。その後は物音も気にならず、すぐに睡魔がやってきた…。

翌朝明るくなつてすぐに支度して谷底を進んでいく。

きちゆねさんは荷物番&休息。今日もまた走ってもらうしね。

まだ太陽が高くないから薄暗い。一人だったら絶対行きたくないな。なんか怖いし。

ちつちやいリュックを背負ったユウスケさんが目を閉じて深呼吸する。

「こつちかな…。」

「匂いでわかるんですか？」

「かなり独特だからね。」

「へえ。」

「あれだ。」

ユウスケさんが指さした先に、木の根元に茸が固まって生えていた。

「なんか…随分存在感ありますね。」

「THEキノコって感じの形だよな。実際に生えてるのは俺も初めて見たわ…。」

親父さんが描いてくれた絵と比べても間違いなさそうだ。

「ここにある分で足りませんか。」

「いいんじゃないかな。かなり量あるし。お客さんに出す分と俺達も食べられる分だけ採ったら残しておこう。あんまり荷物になってもきちゆねにも負担だしな。あ、あんまり穴が開いてるのがあったら採らない様に。」

「はい。」

二人してもぎゆもぎゆと茸を収穫する。持ってきた籠が一杯だ。

「この中で虫食いがあつたら捨てなきゃだな…。切ってみるか…。」

ユウスケさんがまな板と包丁をリュックから出してきた。用意がいない。

「私が切りますよ。虫の確認とかよく分からないですし。」

「あいあい。二つに分ける位でいいからね。まかせた。」

スパツ！と半分に切つて渡すを繰り返す。いつも仕込みでやる要領だね。虫出てきませんように…。

「う〜ん。」

「え！虫いました!?!」

「いや、逆…。全くない。普通ウニヨロウニヨロしたあれがいるんだけど、すごい綺麗。持った感触もスカスカじゃないしね。すごいなーこの茸。」

「よかったです…。」

切つててそんなものが出て来たら悲鳴上げちゃう…。

結局採った分を全て切っても虫は出て来なかった。よかったー。

籠にまた詰めて、落ちない様に布でくるんで口をしつかりと結ぶ。

「よし、まだ昼にもなっていないし帰りは楽勝かな。」

「ささつと帰りましょう。」

来た道を辿って谷の出口へ向かって歩き始めると、洞窟があった。

「昨日泊ったのはこれでしたっけ？」

「いや違うよ。もっと谷の入口の辺りだったはず。そもそも朝通った時他に洞窟なんてあったかな。」

「中で何か光ってますよ。水晶かな？近くでまだ見てないから行ってきていいですか？」

「俺も行くよ。結構光ってるけどでかい塊なのかな？」

少し入ると結構中が広い洞窟だ。光ってるのは平らな面が大きく綺麗に磨かれた様な塊だ。

「鏡…ですかね？」

「鏡みたいだよ…。水晶で出来てるのかな？随分透明度高いなあ。」

二人で鏡に身体を映しても充分余裕がある。高さも横幅も私達の二倍位だ。

「えへへ。こうして見ると本当に双子ですね。」

「そうだな。」

並んで鏡に映るなんてないからなんか新鮮。金の尻尾でちよつと吊り目のきりつとしたユウスケさん。銀の尻尾で垂れ目でほわーんとしてる私。ああ妹って言われて納得するなあ。

フイイイイン

突然響き渡る音に耳が痛くなる。

「ユウスケさんこの音って一体…。」

「鐘の音…？頭に響く…。」

私の横でドサツとユウスケさんが倒れる。私も意識が…飛ぶ。茸を入れた包みが落ちる。

意識が飛ぶ前に誰かの声が聞こえた気がした…。

キノコをもとめて（後書き）

実際の生のポルチーニは結構虫がいるようです。描写すると気持ち悪くなりそうです…。

以前、乾燥や缶詰めのを使った事がありました。独特の菌ごたえと香りは結構いいものです。気になった方がいたらお店で食べるのをオススメします。

一応日本でも採取は可能らしいですが、ほとんど輸入物ですね。お値段は高めです。

われをくぐりて汝らは入る（前書き）

少し特殊な書き方をしてあります。
読みづらかったら申し訳ないです。

われをくぐりて汝らは入る

気が付くと辺り一面真っ暗闇だ……。目を閉じているよりは少しだけ
明るいけど、自分の手もほとんど見えない。

少し離れた所に誰かがいた。

小さな男の子だ。膝小僧を抱いてうつむいて、なんだか辛そうだ。

どうしたの？どこか痛いのか？

ううん…痛いんじゃないよ…辛いんだ…

間違ったことをするな、完璧でなきゃ駄目、いつもしっかりと
しないといけない

そうじゃないと父さんは僕を見てくれないんだ 姉さんも男なんだ
からしっかりとしなきゃいけないってそう言うんだ でも、ずっとそ
ういうのでいようとしてると疲れちゃうんだ。でも疲れたらそんな
の本当は出来ないから無理しちゃうんだ ずっとそんな繰り返しで
僕、辛いんだ…

私も男の子の隣に体育座りをして、また声をかける。

別に見てもらえなくてもいいんじゃない？そんなに無理しなくても、
他の事できつと見てくれる人がいると思うよ？私だったらそんなの
疲れてヤダよ

でも、今までずっとそうやってきたから、無理しない事がどうい

事が分からないよ

じゃあ何もしなくていいと思うよ

何もしないの？

うん、何もしないで寝転んでね、何かしたくなったらやればいいと思うよ。私はお休みの時に草原とか森でそうやって転がったりしてるよ。それで雲が流れたりしてるのを見てると気持ちいいの。それからやりたくなかった事をやるの。誰かに言われたからやるとかじゃなくてね

でも、そうしたら父さんも姉さんも見てくれなくなるよ…

そこまでしないと見てくれないなら一度こっちも頑張るのをやめちゃうってさ、違う自分を見せたら変わるかもしれないよ。それでも見てくれなかったら…

見てくれなかったら…？

私が見てるよ。私がいなくなっても見てる人がいたって思えたら少し楽にならない？

…うん…きっと今までよりは楽になれると思う。でもいなくなるのはヤダな。一緒にいてよ

じゃあ、いれる間は一緒にいるね

…うん…それでいい。ありがとう…

そこで男の子は初めて顔を上げた。
暗いからはつきりとは見えないけど、見た事のない顔のはずなのに
私はこの子を知ってると思った。
もしくはとてもよく似た誰かを私は知ってるはずだ。何故か思いだ
せないけど。

どこで見たのかなと腕組みしたら、胸ポケットに入ってた何か固
いものが手に当たった。

マスターにもらったお守りだ。出してみると黒いはずなのに何故か
これ自体が光ってる。

まぶしいね　ここは暗いんだって初めてわかったよ

そうだね　すごく暗いし、あんまり長く居たい所じゃないね　明か
りも出来たし、行こうか

うん

私は男の子に手を差し出す。掴まって立ち上がったその子の顔は…

お姉ちゃんどうしたの？

ふふ、私もね　とある人に励ましてもらったんだよ

そうなんだ　そんな人に僕もなれるのかな

絶対なれるよ　そこに向かって行けばね　ホラ行こう　あっちにも
光が見えてきたからきつと出口だよ

うん

私はその子の手を引いてお守りを前にかざしながら光る方向に向かって歩いて行った…。

われをくぐりて汝らは入る（後書き）

ここだけだと意味が分からないと思うのでなるだけ早く続きを書きます。

C・D(前書き)

なんだかんだと遅くなりました。続きです。

目を覚ました私はユウスケさんの手を握って地面に転がっていた。あの鐘の様な澄んだ音を聞いて、そのまま倒れて…寝ていた…のかな？

どの位時間が経ってるか分からないけど、今日中に帰りたいし早く出発しないと。

「ユウスケさん起きて下さい。帰りますよ。」

返事がない。なんかぐったりしてる。息はしてるけどまだ意識が戻って来ないみたい。

こういう時は無理に起こさない方がいい気がする。仕方ないから背負ってきちゆねさんの所まで戻ろうかな。そんなに距離はなかったはず…。

荷物も持って頑張ってユウスケさんを背負った。重いとは言わない。だって私と同じ体重のはずだし。…うん…軽い…軽いはず…だよ？ ちょっとよろよろしながら歩きだした時に後ろから声があった。

「……逃がさない……。」

「え？」

振り返ると、水晶の鏡の陰から白い服を着た女の人が出てきた。前にF・Dさんの所で着たユカタとかいうのに形が似てる服だ。腰まである長い髪が俯いているせいで顔を完全に隠してる。え…なんか怖いんですけど…。

「……………」

「……………へ？」

「……………よ。」

「……………え！…何ですか？？」

「……………で……………なの……………」

「……………えっと…もう帰っていいですか？」

ごめんなさい、何言ってるか全然分かんない。というよりも聞こえないんですけど…。もういいや、ほっといて帰ろう。
無視して入口に向かおうとしたら

「待ちなさい！…！！！」

「ひゃい！」

いきなり叫んだよ。思わず変な声出たよ。

そしてす〜と音も無く近づいてくる…。いやああ…。
肩をガシツと掴まれる。顔近いですけど…。目だけ赤いし…うわあ夢に出そう…。

「…キノコの代金…貴方達払ってないでしょ…！」

「へっ？」

無言で外に連れて行かれ、崖の中ほどを指差される。キノコの事考えて下ばかり見てて気付かなかったけど、目線よりだいぶ高い所に何か書いてある。

えーっと【キノコのふるさと 水晶の谷へようこそ】
隣にはザルに山盛りのキノコのイラストが書いてある。

「え…っつと…」

「…ここ…有料になったのよ…。地元の受けもよくなって…。…これ、
この案内ね…」

パンフレットを渡された。へえ、色々なキノコがあるんだ。松茸・トリュフ・舞茸・しめじ・サルノコシカケ？そんなキノコもあるんだ。あ、本当だ有料だ。料金表によるとポルチャーニさんは、結構高い。そんなにお金持つてきてないよ。

「なんか…すみません…知らなくて。あのですね…今日は…その、持ちあわせがそんなにないので…」

「…ツケでもいいわよ…」

「あ、じゃあそれでお願います…」

「…この紙に住所と名前書いてね…」

宿屋の住所でいいかな、リーフタウン大熊亭方コンスケ&ユウスケと。

「…あら…あなた達…リーフタウンの人だったのね…。…じゃあ今度お店に食べに行く時にお代を頂くわ…」

「あ、はい。お待ちしております。お休みでなければ私達で給仕しますのです。」

「…じゃあこれ証文代わりね…。…返さなくていいから…」

透明な板みたいなのをもらった。なんかマスターにももらった黒いお守りと形が一緒だ。これは光を反射してるけど。

「…お店に行ったら声かけるわね…。…私、C・Dというの。」
「わかりました。失礼します。」

あれ？どっかで名前聞いた気がするけど…どこだっけ？まあいいや早くしないと今日中に帰れなくなるし。

まだぐっすりと寝ていたきちゅねさんの所に着いたら、ようやくユウスケさんが目を覚ました。

「おはようユウスケさん。体調大丈夫ですか？」

「ううん…なんか長い夢を見ていた気がする…。あれ？ここ、きちゅねの所？運んでもらっちゃったのか…悪いなコンスケ。」

「大丈夫ですよ。色々ありましたけど…。」

「色々？」

「長くなるのできちゅねさんの上で話しますよ。とりあえず早く出發しましょうよ。」

「あいあい…。あゝ頭痛いわ…。」

二人して荷物を急いでまとめ、きちゅねさんに括りつけながらユウスケさんに聞いてみる。

「どんな夢でした？」

「なんか暗い所から誰かが出してくれる夢かな？詳しくは覚えてないや。」

「奇遇ですね。私も誰かを連れ出す夢は見た気がしますよ。」

「二人して同じ夢見てたりしてな。」

「ですね〜。」

「よし用意完了！食料はほとんどなくしたし、帰りは速度出していいぞ、きちゅね〜。」

「コン〜！」

しっかり眠って元気一杯みたい。これは早く帰れるかな〜。

その後はどうにか真夜中になる前には帰れて、親父さんにキノコを渡しそのまま二人してすぐさまベッドにダイブしたのでした。疲れた~~~~。

.....

フイイイイン

水晶で出来た鐘が鳴る。

「…浄玻璃の鏡からあっさり抜け出すなんて、あの方の言う通り面白い二人だわ…。…王にも報告しないと…。…とりあえず…。ポルチーニ茸はクリームソースパスタで出してもらおうかしら…。」

音が鳴った後で水晶の鏡が、ゆっくりと門の形に変わっていった。

C・D（後書き）

ちよつとホラーを書こうと思ったのに、登場人物がみんなしてギャグに走りたがるのは私の頭がお気楽なのでしょうか…。

ちなみに「キノコのふるさと」でトリユフを採る場合は豚も貸してください。料金は保険金込みです。採り放題ツアーは残念ながら実施されておりません。

寝ぼけ眼の狐です

翌日、頑張つて朝いつもの時間に起きた俺達だったが、今日は仕込みをするからお店はお休みというありがたい言葉を聞いてそのまま夢の世界に帰つて行つた。改めて起きたら昼を過ぎていた。

「…腹減つた…。」

これ以上は空腹で眠れない。下りる前にコンスケの部屋も覗いてみたが、きちゆねをハグしながらまだしつかりと寝ていたのでそのままにしておいた。俺と同じ様に腹減つたら起きて来るだろう。

「おはようございます…。」

「おはよう、良く寝てたね。随分疲れさせちゃったみたいですねいな。」

「大丈夫です。ふあゝあ…あ！すいません。」

「はっはっは、良いつてことよ。今夜は二人に給仕だけお願いしたいんだが頼めるかな？」

「勿論ですよ。コンスケ起こしてきますか？」

「起きるまで寝かしておいていいよ。腹減つたら？パンとスープでいいかな？」

「ありがとうございます、頂きます。」

親父さんが出してくれたスープにパンをちぎって浸してもきゅもきゅと食べてると、きちゆねを羽交い絞めにしたままコンスケが下りてきた。

「おはようコンスケ。」

「……………」

「コンスケ…？」
「……………」

よく見たら目を閉じたままだ。こいつ…寝てるのにパンの匂いに釣られてやって来たのか？

コンスケは無言で俺の座ってるテーブルまで来ると断りもなくパンを奪い、立ったままもしかもしゃ食べ始めた。

「あ…？コンスケさん起きてますか？」
「……………　　もしか…。」

駄目だ…。完全に意識ないみたいだ。

コップの水も飲んでるし器用過ぎるぞコイツ。

「……………コンスケさんそれ俺のご飯なんです…」
「……………　　ぐう……………」

そのまま立ったまま固まって眠りだしたし…。駄目だこりゃ。
羽交い絞めにされても寝てるきちゅねも凄いけど、可哀想だから外しておこう。

「ハッ！私は何を！？」
「起きたかコンスケよ…。」
「ユウスケさん何で私の目の前にいるんですか？」
「周りをよく見てみる…。」
「あれここ1階？なんで私ここに？」
「寝惚けて下りてきたみたいだよ…。俺のご飯奪いやがって…。」

「そんな夢は見えていませんよ?」
「現実で発生した事でございます、お嬢様。」
「記憶にございません。」
「ネタは上がってるんだ!覚えていなくても貸し一つな!」
「ひどい!」
「どつちが…!」
「だって…私、今お腹空いてるし!」
「知るか!」

そんな俺達に救いの神が…。

「ほら…パスタ作ったから『二人』で仲良く分けなさい」

アスパラとナスとベーコンが入ったペペロンチーノが舞い降りた。

「おお、ありがとうございます。」
「コンスケ、きちんと半分ずつだからな!」
「分かってますよ!」
「ベーコン多めな!」
「はいはい。」

取り皿に分けてもしやもしやり。

「ふー。」
「ふー。」
「ふー。」
満足なり。

「なんか最近前にも増して二人が似て来てる気がするね。」
「そうですね?」
「私こんな食い意地張ってないですよ。」

「失敬な！よく食べ、よく動いて、よく寝て、よく育つ！いい事じゃないか！」

「私と同じサイズじゃないですか！」

「それはどうかな…ふふふ。」

「まさか…。」

また止まらない俺達を止めて親父さんは服を渡してきた。

「もう漫才はそこらでいいから、そろそろ着替えてきてくれお二人さん。」

「はい。」

「ほーい。コンスケ行くぞ〜。」

寝ぼけ眼の狐です（後書き）

もう…漫才がヒートアップしていく…。

胃袋に愛情つめて(前書き)

深夜に読むと、お腹に優しくない描写がありますので(食欲的な意味で)ご注意ください。

胃袋に愛情つめて

「これは!？」

「あら可愛いじゃないですか。」

親父さんから渡されたのは二人分のメイド服だ。ヘッドドレスまで付いている。今日は親父さん気合い入ってるなあ。というか、こんなこの宿屋に置いてあったのか…？

「コンスケ着方分かるか？」

「えっと…そのまま着ればいいんじゃないですか？」

「パニエ…えーと、この骨組みたいなのを下着の上に装着してから、スカート履けばいいよ。上着の方は上から着て背中側を閉める。ボタンプだから留めるの難しかったら言ってくればボタン留めてやるから。」

「は〜い。詳しいですね。これもお姉ちゃんの影響ですか？」

「え？自分で着てたから。」

「え！気持ち悪い…。」

「いやいやいや待て待て！！舞台の仕事で着た事あるだけだよ！普段は着てないよ。」

「…へえ…そう…そうなんだ…。」

「お前俺の事なんだと思ってたんだよ…。」

「ステキナオネエチャンデスヨ。」

「お前なあ…。いいからさっさと着替えてこい。」

「はい。」

着替えた後も、こんな調子でなんやかんやと、きゃいきゃい言い合いつながりながら用意を進め、あつという間に時間が過ぎ、ランプに火を入れた頃にお客さんが到着した。

「いらつしゃいませ〜！」

「いらつしゃいませ。」

「これはこれは…こんな可愛いメイドに案内されるとはな…。」

「ありがとうございます。」

「ああ、案内してくれや嬢ちゃん達。」

「はい。こちらへどうぞ〜。」

コンスケが先導し、俺が男の人の後ろからついて行く。俺の目線よりも少し上位の身長だから…あっちの俺と同じ位か。いい筋肉してるわ。それに軽装ながらも、きちんと鎖帷子を身に付け、手に持った剣も重そうなバスタードソードなのに歩き方にブレも隙もない。かなり出来るなこの人。西洋剣術も知り合いがモーションでやってたけど、ガチで着こむと半端ないからな。鎖帷子から音がしないから銀とか使ってるのかな。擦れると痛いらしいけど…。

「おいおいそんなに背中に熱い視線送らないでくれよ。火傷しちまらあ。」

「っ！失礼しました。この辺りでは中々見ないもので。」

「これだつて使う機会は出してないけど一応形だよお嬢ちゃん。尻尾そんなに逆立てなくていいぜ。別に取って食いやしねえよ。」

いつの間にか身体が緊張してたのか…。やはり侮れないな。敵に回したくはないわ。手合わせはしてみたいけど。

しかし緊張なのか、本能的な（女の子の）身の危険の緊張なのか判断に困る…。

「お前も相変わらなずの腕だなフェリング。」

「お互い変わらんな。」

「の様だな。」

二人はニヤリと笑って乾杯した。

これが通常の量ですか…。あり得ん。ランチの三日分位の量のパン焼いた気がするぞ…。

コンスケも途中から顔が笑顔から真顔になってたし。いや…コンスケさんそんな俺を同類みたいな目で見ててもこんなに食べませんよ…？

「二人とも後は片付けただけだからもう大丈夫だよ。ありがとう。」

「洗い物やっときますよ。凄い量だし。」

「そうかい？悪いね。」

「気が効くなあ嬢ちゃん。どっちか一人残ってお酌してくれてもいいんだぜ。」

「おいおい、うちの看板娘に手出すんじゃないぞ。」

「わくってるって。そんなに軽い男に見えるかってんだ。」

「おお、未だに見えるぜ。」

「酔ってんじゃないかねえのか？」

「それはお前だ。」

「ちげえねえ。」

二人してガハガハと豪快に笑う。仲いいなあ。そしてジークさんノリ軽いなあ。

結局コンスケと二人して洗い物を終わらせる事にした。しかし山の様だ…。

「あんなに食べられる人がいるもんなんですネ。」
「全くだよ。有り得ない量だぞ…。確かにしつかりと給仕してないと追いつかないわな…。」
「普段どうしてるんでしょうねー。」
「考えたくもないな…。」

簡単な汚れは落としてから、石鹸を泡立てて洗っていく。洗ったものは水を切ってからコンスケが布巾で拭いていく。

「キノコ美味しそうだったな。」
「うん、よかったです。」
「苦労した甲斐があったよ。あれ俺らの分つてあるのかな…。」
「さつきキツチンの端のざるに入れて置いてありましたよ。」
「おお楽しみだ〜。」

汚れがひどいのは漬け置きして明日洗うか。

「コンスケそつちは終わった？」
「これで…よいしょっと。終わりですよー。」
「よし上がるか。」
「はい。」

さっと火の周りを確認し、キッチンから出る。

「じゃあ親父さん俺ら上がりますね〜って寝てるし…。」
「だいぶ飲んだからな。まあ俺程じゃねえが。」
「普段飲んでる姿見ないですからね。」
「流石に一人じゃつまらんから、少し酒付き合ってくれや。」

「少し位ならいいですよ。」

「お酒」

あ…コンスケ酒大丈夫かな。まあここでなら潰れてもすぐ連れてけるか。

新しくグラスを持ってきて三人分注ぐ。コンスケのは少なめにしておこつ。

「それ少なめのはユウスケさんのですよ。私これもうらい。」

「あ…馬鹿。お前飲み慣れてないだろ？」

「大丈夫ですよ、ジューズジューズ」

「おう垂れ目の嬢ちゃんもいける口かい？五月蠅いのはほつといて乾杯だ。」

「わ…乾杯」

「ちよつとちよつと…乾杯ー。」

あれだけ飲み食いしたのに、来た時とあまり変わらないジークさんにへらにへらしながら飲んでるコンスケ。もう突っ込まないし、しらんぞ。

親父さんが突っ伏していびきかいてる横で何故か盛り上がるコンスケとジークさん。

「ぶはあ〜。」

「おおイケるねえ嬢ちゃん。ほら注いでやるよ。」

「ありがとうございます。次は赤いのがいいです。」

「おうよ。やつぱ肉には赤だよな。」

「いや…色が綺麗だからー。」

「ハツハツハツ！面白い娘だな。気に入ったぜ。食いねえ飲みねえ。」
「はい。」

あ…なんか俺だけ置いてかれた…。仕方ない…黙って食うか…。
もうテーブルの上には三週目に出した料理が半分位しか残ってない。
おかしい…。

お！チキンのパイ包み焼きが残ってる。おかみさんお手製のパンがあれだけ美味いんだから、パイも推して知るべしってやつだね。
ナイフを入れるとサクツ！といい音がする。

外はサクサク。中は肉汁たっぷり。お肉がスパイスに漬け込んであるのか…。これはお酒進むだろうなあ。

おおーこっちは川魚のフライ。カリッと揚がってて、冷めても美味しいな。レモングラスで風味もいい。

親父さん相変わらずいい腕してるよなあ。そりゃこっやって古馴染もわざわざ食べに来るよ。

自家製のマヨネーズで食べるサラダもいいなあ。マヨネーズって自分で作ると混ぜるの結構大変なんだよな。

俺が黙々と味わいながら食べている内に、気付けばなんか口調が怪しくなってきたている人が一名。

「ジークさん王宮務めなんですかあー。凄いですね！」

「おうよう〜。これでも傭兵隊の隊長なんだぜえ〜。モテるんだぜえ〜。」

「へー。傭兵隊って何やるんですか？」

「訓練ばっかだなあ…。冒険者時代にフェリングと一緒に色々旅してた方が気楽だったよ。最近は付近住民を脅かす魔物と化したデカイ動物〜なんかもいなくてなあ、張り合いねえんだよ。」

「そんなのいるんですね〜。」

「おう。巨大熊と戦った時も凄かったぜ。フェリングのやつ素手で

熊のヤツと掴みあつてよお。どっちが熊がわかんねえでやんの。」

「ああ確かに。」

「結局そのまま熊を放り投げて気絶させて終わりよ。あり得ない強さだよな。」

あり得ないのはあんたの胃袋だ……。という突っ込みは心の中にしまいながら耳を傾ける。

親父さん最強過ぎるなあ。

「そっぴやフェリングに聞いたが嬢ちゃん達探し物してんだって？」

「え？ああはい。巨大な門を探してるんですが……。」

急に話を振られて驚きながらも言葉を返す。王宮務めならそういう情報も入ってくるのかな？

「門なあ……。聞いた事はないが、探し物なら王宮に丁度いいのがあるぜ。S・Dっていう占星術師なんだが。」

「S・D……。まさか。」

「お！聞いた事あるか？都じゃ結構有名なんだぜ。やれ失せモノが見つかつただの、やれ恋の鞘当てが上手くいっただの。」

言い回しが古いなあ。けどこれはヒントになるかもな。行ってみるか王宮へ。

胃袋に愛情つめて（後書き）

なんで夜中にお腹の空く話しを書いてるんだろっ…（；ー）
手作りマヨネーズは空気とふんわり混ぜると美味です。

再びのF・D

翌日ジークさんは夕方近くまで寝ていた。

親父さん曰く、用事がないと飲み食いして翌日はいつも遅いらしい。有り難い。ランチが全滅する所だった…。

コンスケは結構飲んだ様に見えたけど、ケロリとして普通に起きて、普段通りに仕事をしている。お酒強いんだなあ。

「おはようさん。」

俺らがランチタイム後の片付けを終えて賄いを食べていると、2階からジークさんが下りて来た。

思わずビクツと二人してご飯を隠す。

「取らねーって。朝は俺はほとんど食わねえんだよ。」
そういつて水だけ飲んでる。本当に怪しげな胃袋だ。そして朝違
う。

「で、嬢ちゃん達行くんだろ？」

「え、どこに？」

「だから王宮に。」

「ええ、はい。」

「じゃあ用意しな。」

「今から!？」

「これからですか!？」

「おう。飯食つて用意したらよ、ツリートウン行きの乗り合い馬車
經由して行くぜ。一日ちよいで着くからな。今から行ってツリート

ウンで一泊して、朝の便で出発すれば明日の夕方までには着くだろうよ。俺と一緒に行きや王宮は顔パスだしよ。」

「おわあああ。用意が〜明日の仕事が。」

「まだこの前のお出かけから片付けてないですよ〜う。」

「フェリングには許可取ってあるぜ。用意したら向かうぞ。まあ飯食って用意整える時間はあるかな。」

旅装か…。また和風セーラーにマントだな。防御効果は高いけど色々と身の危険を感じる…。

護身用に長脇差しも持っついていこう…。コンスケにも一応持っついていく様に言っとこ。

食い物はいいから着替えと…。

あ…きちゅね連れてって大丈夫かな。折角だから王宮見せてやりたいし。

「お待ちせしました。」

「お待ちせですー。」

「コン。」

「なんだその狐は。まあ連れてってもいいけど、ちゃんと面倒みるよな。」

馬車で揺られて一路ツリータウンへ。

「さて、どこに泊まっかな。」

「当てがあるのでちょっと待ってて下さい。」

「当てなんてありませんたっけ？」

「おう、待たしてもらおうわ。」

FDの経営している旅館へと向かう。

ちよつどいいタイミングで出て来たFDに助走をつけてライーキツク！

「……白……。」

仰向けに倒れたFDが何か呟いたが、無視してマウント取って胸倉掴む。

「こんばんわー、えふでいーさあーん。何勝手に俺達のイラスト使ってるんですか？」

「大丈夫だよ。ちゃんと胸は当社比5割増しで描いたから。」

「5割増しであれかい！何か人に言われるとムカツク。とりあえず今日の宿泊費他は無料でいいですよね？」

「あい…。これが無料パスです…。おかげ様でお客も増えたよ。ありがたやありがたや。」

ごそごそと胸元を探って赤い板…いや鱗かを渡してくる。生温かい。しかしこんな簡単に渡していいのか…。

「今レプリカお土産で売ってるからよかったら帰りに買ってってね。10個買ったら1個サービス中。」

商魂正しいというか何というか…駄目だこりゃ。

「終わったか釣り目の嬢ちゃん。」
「お姉ちゃん激しい…。」

二人と一匹が寄ってくる。

「今日は無料になりました。」

「そりゃ随分気前いいな。」

「身体張りましたからね…。」

「ユウ姉ちゃんいつの間…。キャッ!」

「エロイコトチガウカラナ。」

「なんだつまらん。」

「ですよー!。」

こいつらノリが似てきたな…。しかし、からかい過ぎだぞ。

俺の下にいるF・Dがもそもぞ動いて顔を赤らめながらいい顔して
るから殴って黙らせた。

なんかアクションチームの連中のノリで絡んじやっただけど大丈夫か
な…。

「俺もいいもん見せてもらったからいいんだよ。」

「っ!」

スカートだった…忘れてたあああああ。

ああああああ…。

何かホクホクした顔のジークさんとF・Dと一緒に2階にある部屋
に案内される。

俺・コンスケ・きちゆねの相部屋と、ジークさんの一人部屋。
まあそうなるよね。

当たり前前に畳みに布団が敷かれていて、仲居さんがいる。色々と相
変わらず間違ってる…。

「まあ…ゴホン。何はともあれ温泉入るか。コンスケ髪の毛洗って
やるぞ〜。」

「わーい。」

「コーン。」

風呂上がりに浴衣に着替えて部屋に戻つてくると、仲居さんに宴会
の用意が出来ていると言われ、1階の宴会場へ。

『本日の御宴会 麗しのお狐様御一行』

すみません恥ずかしいのでこんな張り紙外して下さい。

明らかに4人分ではなく団体様向けの量の料理と、既に出来上がっ
て馬鹿笑っているジークさんとF・Dがいた。

「そつななんですよー。若い顧客の獲得がねえ…難しいというか何と
いうか…。」

「んなの簡単だよ。俺が王宮でちよつと噂を流せばイチコロよ。」

「ほほうー。具体的にはどんな感じのものを？」

「あれだな〜。このジーク様もお気に入りの温泉宿で肌をつるつっ
るの綺麗にしてモテモテっつーのはどうよ？」

「おおーいいですなあ。バカウケな感じですよー！」

「だろお？このジーク様にかかれればチヨロイもんよ〜！」

絵に描いた餅を二人でにこやかにつついてるなあ。しかしジーク様
つて、自分で様付けですか…。

「コンスケよ… ああいう大人になつてはいかんぞ…。」
「はい、なんか私もしみじみと思いました。」
「ほつといてさっさと飯食つて寝よう。」
「ですね。」
「コーン。」

うゝん岩魚の塩焼きとか、茶碗蒸しとか、何故かメロンとか…特産品のなものが適当に置かれてる。
統一感ないなあ。売りを絞ればいいのに。でも不思議とどれも美味しい。

「あ、コンスケそれレモン絞つといて。」
「はいはい。あ、これも美味しいですね。この黒い液体はなんですか？」

「あ…多分醤油だね。作つてるのかなあ。その白い四角い物体に少しかけて食べてみ。」

「はい。へえ〜しょっぱいけど美味しいですね。」

「しかし、フォークとナイフで食べるのは納得いかな…。豆腐をすんなり食べるとはコンスケ器用だね。」

「スプーンで食べました！」

「そりゃいいわ。あ、きちゅねそれまだ煮えてないからちよつと待ってな。」

「コン。」

結構雑食だよなきちゅねも。好き嫌いしないのはいい事だ。

明日もそこそこの時間に起きなきやなのにかんないのんびりしてていいのかな。

再びのF・D（後書き）

今回の章は登場人物が多くなりそうです。少し長くなる予定です。

ノック・ナ・ニーヴ

翌朝、全く起きないコンスケを頑張って起こして身支度をさせ、廊下を挟んで反対側のジークさんの部屋に向かう。

この人も起きてはないだろうと、ふすまをノックするがやっぱり返事がない。

「おはようございますー。ジークさん起きてますかー？入りますよー。」

返事はないが人の気配…というかいびきが二人分聞こえる…二人分！？

ふすまを開けると、ジークさんとF・Dが雑魚寝していた。なんで二人共布団から遠く離れているんだ…。風邪ひくぞ…。

F・Dはどうでもいいからジークさんを起こそう。

「ジークさん、朝ですよー。起きないと間に合いませんよー。」

「……ん……………」

「ちょっと…！」

いきなり問答無用でハグされた。寝惚けてる…な。

「ほら寝惚けてないで起きて下さい…ってコラ！」

ハグ…いや羽交い絞め状態から、そのまま唇を突き出してきた…。それは駄目だから…マズイカラ…！

「…ん…」
「ほあぁ！」

首だけ動かして必死に回避！キツツキの様な連続攻撃を避け続ける！
一度でも当たったら何か…ホラ…最期だからね…。

「ん…」

ガシッ！尻尾を掴まれる。

「ひい！」

力が抜ける…やばい…本当にヤバイ…。さよなら最後の砦…。

「なんて…絶対嫌じゃあ…！」

気合いで無理矢理頭を後ろに逸らし、キスを迫る不埒な頭を狙って
振り下ろす！

ゴーーーーーン

「痛えええ…」

犠牲は大きかったものの気絶させることに成功した…。絶対たんこ
ぶ出来てるよ。石頭め。

「危なかった…」

振り払って息も絶え絶えに立ち上がると背後からお尻の辺りに視線
を感じる…。

「……莓…」

振り返って、ほわっといい顔しているF・Dに問答無用で枕をフル
スイングしたのは言うまでもない。

「ふあゝあ。気をつけて行ってらっしゃいましー。」

パンと魚と味噌汁と納豆という不条理極まりない朝ご飯を終えて、やる気のないF・Dに見送られて乗合馬車で王宮へ向かって出発する。お客は俺達だけみたいだから気楽だ。

女の敵ジークを馬車の隅に押し込め、俺・きちゆね・コンスケと、きちゆねを挟んでジークさんの反対側の座席に座る。ちょっと狭いがハレンチ隊長の隣に座る気はない。

「ユウスケさん機嫌悪いですね…。」

「いいわけではない…。」

「何かあったんですか？ご飯の前に隣の部屋から悲鳴が聞こえたけど。」

「痴漢でも出たんだらう…。悪党には天誅が下されるのが世の定めなのだよ…。」

これで話は終わりとばかりに俺が腕組みして窓から外を見ると、コンスケも追求を諦めて同じく外を眺めた。

馬車には電車の窓の様な嵌めごろしのガラスの窓が付いていて、景色を眺めながら旅を満喫出来る。森しか見えないけど。

ツリータウンから王宮までは、長い長い一本道になっていて、森の横を真っ直ぐに通っている街道をひたすら走るだけらしい。非常に単調な景色で眠くなる。

案の定コンスケはすぐに飽きてしまった様で、きちゆねをハグして寝始めた。

ジークさんもとっくに高いびきかいてるし、俺も少し寝るかな。

太陽が真上に来る前に馬車を止めて、お昼と馬の休憩となった。

眠っているジークさんを放置して簡単に食事を済まし、馬に草をやったり塩をあげたりするのを手伝ってまた出発した。

手についていた塩まで舐めようとしてきた馬に手が食べられかけたのはご愛敬。汗かいた状態で近づいてたってもっと危険だったから気をつけないと…。

ポクポクという馬の足音と、サスペンションが効いてもちよつと揺れる馬車のガタガタという音がのんびりしていて気持ちいい。

デジタルの世界でアナログのこういうものを味わうのも贅沢だなあ。乗馬のライセンス取りに行つて以来、馬にも乗ってないし。きちゆねもいいけど徐々に馬にも乗りたいなあ。

ぽやくつとそんな事を考えていると、馬車が急停止した。

馬が棹立ちになったのが見え、興奮したいななきも聞こえてくる。

「どうしました!？」

御者のおじさんに声をかけると、馬を落ち着かせながら答えてくれた。

「おおお嬢さん、街道の先を見てみて下さい。」

「えっ…何これ…。」

これから通る予定だった道の先を分断する様に、地面がいきなり大

きくえぐれてる。

何か巨大なものが通った様な跡が、横の森から街道を貫き反対側の森へと続いている。

そして、その何かが通った跡らしき所から煙が上がっている。

「あんなものはわしも見た事がない…。馬も怯えるわけだ…。」

ようやく少し落ち着き始めた馬に手をあてたおじさんの後ろからジークさんがぬつと出てくる。

「こりゃ…俺の出番の様だな…。」

「ジークさんあれがなんだかわかります？」

「いんや、わからねえ。わからねえが、良くないもんだってのは感じるな。おいおっさん。」

「は…はい。」

「悪いけど、頑張つて馬をあの先まで行かせられるか？」

「手綱で引つ張つてやれば無理にでも動くとは思いますが…。」

「それで頼むわ。駄目なら押してやるし。はええとこ王宮に戻つて、うちの守備隊の総動員かけるわ。こりゃ守備隊の初めてのデカイ仕事になりそうだぜ。」

そう言ったジークさんの横顔は、不覚にもちよつとドキツとする引き締めた表情だった。

いつもこつという顔してたら本当にモテるんだろうに。

馬車は速度を落としつつ、謎の跡に近付いて行く。

煙は大分おさまってはきているものの、臭う。よく見ると、周りの木々も煙を上げながら枯れているものまである。

「こりゃ毒かなんかだな…。相当やべえぞ。出来るだけ早く通り過ぎちまおう。」

「はい…。蹄鉄と馬車の車輪が溶けないといいですが…。」

「とりあえず俺らと馬と、念の為口元覆った方がいいな。吸って身体にいいもんじゃなさそうだ。」

「わかりました…。」

こんな状態なのにぐっすり寝ていたコンスケときちゆねを起こしてタオルやハンカチで口を覆わせる。俺はセーラー服のスカーフでい
いや。

どうにか馬車は無事に通過。金属も長時間触れていると溶けるのか、若干煙を上げかけていてビビったがすぐにおさまった。

「ちょっと待っててくれや。」

ジークさんが馬車を降りて、先ほどの跡の場所に向かう。
俺も気になるので後に付いて行く。

「しかし馬鹿でけえなこれ…。こんなサイズの生き物見た事ねえぞ。」

確かに…。トラック…。いやタンクローリーが暴走してもこんな被害は発生しないと思う。そんなサイズの何かが、ミミズが這った様に蛇行しながら森の奥へ進んだ形跡がある。

ビルの2階位の高さがある木々の、上の方の葉まで煙を上げているから横幅・高さ共にクジラ並みじゃないのかな…。陸上を蛇行しながら移動出来るクジラがいればだけど。多分像でもない。

「ん…なんかあそこ、道の端に落ちてますよ。」
「なんだあ？」

ジークさんが愛刀を使って器用にこちら側に弾く。素手で触るのは危険だからって自分の剣使っちゃうんだ…。いいのか？

「緑色の鱗だな？蛇か何かか？だとしてもこのサイズの蛇なら人間は数人一気に丸のみ出来んな。」

濃い緑色、ビリジアンというのかな？

そんな色した鱗はH・DやF・Dにもらったサイズよりも何周りも大きく、俺やコンスケの顔位ある。

「とりあえず持ってかえるべ。」

あ…この人で素手で掴んだよ！平気そうだし。厚いのは面の皮だけじゃないんだな…。

ノック・ナ・ニーヴ（後書き）

馬は汗をたっぷりかくので塩分補給が大事です。

塩をなめさせないと危なくなりませう。

汗かいた手を近づけるとマジ噛みされるので注意しませう。

私はカジラレマシタ。馬刺し美味い。

王宮ナイルシックス（前書き）

大変遅くなりました。資料集めに時間がかかってしまいました。続きです。

王宮ナイルシックス

王宮：ナイルシックス。

山の稜線に沿って、崖の上に作られた城と、その麓に広がる城下町だ。

立派な城壁が町の周りを囲い、がっしりとした作りの門の前には門番が二人気楽に立っている。
乗合馬車が凄い勢いで走ってくるまでだったけれど…。

「止まれ！止まれ！」

「何事だ！」

土煙りを上げ急角度で停止した馬車に、正門を通ろうとしていた通行人も何事かと呆気に取られて見ている。

槍を構えた門番二人と通行人達が見守る中、馬車の扉がゆっくり開きジークさんが颯爽と飛び出し、二人と一匹はコロコロキューと地面に転がった。

「俺だ。悪いな、緊急事態だったからな。」

「隊長！お帰りなさいませ。激しいご帰還で。」

「旧交を温めてくるからのんびりしてくる…とのことでしたが？」

「まあその話は今度な。街道に謎の化け物が現れた様だ。守備隊を緊急招集する。馬を貸せ。」

「了解しました！」

「お連れの方々は？」

「ああ、俺の客だ。後から王宮へ来させといてくれ。」

「わかりました。」

「とうわけだから嬢ちゃん達のはんびり王宮へ来てくれや。オイおっさん。ありがとな。」

そういつて地面でのびてる俺達の返事を待たずに、御者のおじさんに結構な量のお金を渡すとジークさんは用意された馬に乗って城へと向かって行った。

「いや〜きちゆねさん以上でしたね。」

「ジェットコースター越えてたわ…。馬もよく持ったな〜。」

「コロン…。」

城まで送ろうかという御者のおじさんの言葉を断り、俺達は城に向かって歩いていった。

小腹も空いたからちよつとつまんでから城行きたいし。

「馬も相当疲れてたからな…。なんか可哀想で無理させたくないし。うちらは歩けばいいさな。」

「ですよ〜。あつあの屋台なんですかね〜。」

「串焼きかな。あつちにはプディングも売ってるなあ。どっちも買うか。」

「はいです!!」

「コロン。」

テクテクと屋台を冷やかしながら、増えていく食べ物、減っていく

財布の中身。

コンスケお前も結構食いしんぼうじゃないのか…？

往来もそこそこあるし、活気もリーフタウンに比べればかなりある。平日の繁華街位かな。この位の人の多さは落ち着く。猫耳の人とか、犬耳の人とか、獣族の人も結構いるな。狐はうちらだけみたいだけど。

そんなこんなで城門に到達。既にジークさんから話が通っていたのですね。中へ。

不用心な気もするけど、狐二人と一匹御一行なんて、そんなにないだろうから大丈夫か。

受付の兵がいた門を潜り、階段を上がって城の中へ。

入ってすぐのロビーの様な場所で待つようにと言われ、二人と一匹で座って待つ…が、誰も来ない。

ドタバタとすぐ下の階で守備隊の人達が用意してるのか、鎧や剣がガチャガチャ鳴る金属の音が聞こえてくる。

周りを見渡してみると、かかっているタペストリーや置き物も全てドラゴンがモチーフの様だ。

西洋の竜もあれば、東洋の龍もあるし随分とドラゴンが好きな王様なんだな。

と、ロビーの奥から本の塊が歩いてきた。フラフラと左右に揺れながらこっちに向かってくる。

「嫌な予感がします…。」

「奇遇だな……。俺も凄いするよ……。」

案の定、歩く本はもう限界らしく、倒れかける！

すかさず俺とコンスケで両側から支える。ってこれ辞書並みの重さか！？予想外の重さでバランスが崩れる。

そして三人まとめて本の山に潰される……。あれ？三人？

「イタタタ……。ごめんね、僕のせい……。」

「こっちは大丈夫。コンスケ無事か？」

「どうにかです……。尻尾踏まないで……！」

「あ、ごめん！よいしょっと。」

「はうっ！今度は俺の尻尾が！」

「あー……。」

謝ったり踏まれたりしながらどうにか這いずり出た俺。ひどい目に合ったわ。

二人に手を貸して、全員救出完了。

「二人とも大丈夫かー？」

「はいです……。」

「僕は平気だよー。」

そう言って、服の裾を払いながら出てきた髪の毛の短い活発な感じの子は、改めて握手を求めながら自己紹介してくれた。

「本当にごめんね二人とも。って、さっきから謝ってばかりだね。

僕S・Dって言うんだ。君達がジークの言ってた狐さん達だよね？」

「そうだよ。」

「よろしくですー。」

「コココン。」

「なんかドタバタしてるけど、僕の部屋まで案内するね。」

結局三人して崩れた本を手分けして運び、城の5階へ。途中で軽く説明してくれたけど、1階がロビー兼謁見の間、そして食事も出来る大広間。2階がメイドさん達の部屋他。

地下が守備隊の詰め所と訓練所。3階は王様の部屋（広いな）4階が礼拝堂で5階がS・Dの部屋や客間等があるそう。

火を扱うキッチンが別の棟になっていて、そっちの方には庭の一部が果樹園だったり豚や鶏を飼ってたりするとか。機能的ですな！。

「運んでもらってありがとねー。ここが僕の部屋だよ。」

そう言っただけで案内された部屋は、城の外側に面していて窓からは城下町が一望出来る中々いい部屋だった。

本が本棚に大量に入っていて、入らない分は床に山積みになっている。足の踏み場はどうにかある。

窓際には望遠鏡が空に向かって置いてある。星を見るんだね。

「ちょっと調べ物が終わらなくてねー。そっちのソファに掛けてよ。」

二人と一匹…は座れないのできちゆねはソファなしだ。ごめんなきちゆね。

「なんかジークから聞いたんだけど、調べたい物があるって？」

「ああ、門の事を聞きたいんだけど、調べるまでもないかな？」

「さあねー、僕の管轄は特殊だからね。他の人達の方までは教えてもらってないし。みんながみんなF・Dみたいに適当でもないからさー。気になるなら占おうか？」

「いいんですかー？」

「まあその為にこの城にいるんだしね。王もそういう方法なら怒らないと思うよ。」

「随分と協力的だなあ。いいのか？」

「こつちもやって欲しい事もあるしね。」

「やって欲しい事？」

「うん。モンスター退治。」

「私達で!？」

「守備隊がやるから俺達の出番なんてないだろう？」

「いやー多分厳しいんじゃないかな。報告聞いた感じだと、僕達も知らないモノみたいだし。イレギュラーにはイレギュラーをね。」

「で…俺らと。」

「私戦えないですよー。」

「まあ何かしら役に立つと思うから、行くだけ行ってみてよ。」

「うーん。コンスケはきちゆねに乗って極力離れて見てるだなー。」

「…キンチョーですね。」

「帰ってきたら占ってあげるからさ。」

「なんだか乗せられてる気がするな。大丈夫なのか…。」

「あああ!？ついてくるだああ？お前さん達がか？」

「らしいですよ…?」

地下の守備隊の詰め所でジークさんに俺達がついて行くこと伝える

と、直ぐ様呆れた声が返ってきた。
やっぱりこっぴつこっぴつ反応するよな！。

「王様の命でもあるって言ったら逆らえないよね？ジーク。」
「S・Dよあ…。幾ら気まぐれな王様だからってそんな命令、俺は聞いてねえぞ。」

「うん、さっき僕が確認してきたんだもん。」

「全く…そういうのはきちんと本人に言ってくれよなあ…。で、嬢ちゃん達どの位やれるんだ？」

「私は初心者です！」

「俺はそこそこ…ですよ。」

「ほう…垂れ目の嬢ちゃんはともかく、言ってくれるじゃねえか。
おい！誰か立ち合ってみろ！」

ドヤドヤと人が集まってくる。ああ男臭いし、金属の臭いがキツイ。
コンスケも顔は我慢してるけど、尻尾がひくついている。

「隊長…俺相手しますよ…。」

「おお、オッテルやってくれるか。」

「任せて下さい…。」

随分と声の低いごついお兄ちゃんが出てきた。うちの父親よりは体格小さいけど、筋肉がミチミチに詰まった身体してる。動きは遅そうかな。

「嬢ちゃん…。加減しないぜ…。」

「望むところですよ。」

訓練場に移動して、守備隊の面々、コンスケ・きちゆね・S・Dが見守る中、木剣をお互い構える。防具はなしだ。

オツテルさんは、西洋剣らしい肩の横辺りに構えた基本の横構え。俺は少し前方に剣を突き出す感じの青眼の構え。

「勝負は俺が判定する。有効なダメージと認めたらそこで終わる。手早く頼むぜ。」

「はい。」

「了解です…。」

「よし始め!!」

「でえああああ!!!!!!」

容赦なく、本気で振り下ろしてくるオツテルさん。だが西洋剣の重い振りだから力強いけどやや遅い。

剣先だけを合わせ、直ぐにそのまま剣を傾けていなす。左下を向いた剣先をそのままにオツテルさんの右側面を抜けて、振り向き様に背中から胴斬り!

オツテルさんはこれを気配だけで察したのか、いつの間にか後ろ手に回した剣で受ける。早いっ!

さらに腕の力だけでかち上げてきた。流石に距離を取る。

「中々早いですね。」

「嬢ちゃんも…面白い技を使うな…。だが…!」

剣で自分の肩を叩いていたかと思うと、また一気に振り下ろしてきた。

「だから…西洋の技とは違うんですよ!」

振り下ろされた剣を右の脇に構えていた剣で下側から擦り合わせてそらしながら、オツテルさんの喉元まで一気に突き上げる。

これは決まった。こういう攻撃は予想外だったのか、完全に反応が

遅れたオツテルさんは無理矢理顔を逸らしたけれど、顎を剣先が掠めその勢いで後ろに倒れた。追い打ちで倒れた所に剣を突きつけた。

「参った…。」

「勝負あり!!」

「うわぁー！ユウスケさん勝ちましたね!!!」

「釣り目の嬢ちゃんやるじゃねえか。見たこともない剣術使うな。」

「この細腕じゃ、こういう技かレイピア式でないときついですからね。」

思わず喜び勇んで飛んで来たコンスケ、横から声をかけるジークさん。そして一気に寄ってくる守備隊の皆さん…にあっと言つ間にもみくちやにされたのだった。

王宮ナイルシックス（後書き）

この章はもう一話位で終われるかな？って感じですが。

西洋剣術のバスタードソードの場合、叩き潰す事が前提。東洋剣術の刀の場合はいなして斬るが前提みたいです。

侍と騎士が戦ったら、侍が勝つだろうという話もあるそうです。確かに昔の侍なら、鎧の隙間とかしっかり狙って勝てそうです。

守備隊出撃（前書き）

ハロウィン

今回戦闘描写で若干えぐい表現があるのでご注意ください。

守備隊出撃

大広間で食事を手早くすませ、馬車二台に分けて荷物と一緒に総勢50名程の部隊は動きだした。

全員出動ではなく、王宮の守りの為にも結構な人数は残っているとの事。

ジークさんと数名は馬で移動。しかもジークさんだけ、上下の完全なフルプレートメイルに馬まで鎧をつけて武装している。

周りの隊員に聞いたら結構なお値段するから、隊長クラスの給料じゃないとあそこまでは無理らしい。他の隊員は役割ごとに違う鎧を装備しているそうだ。

既に先遣隊が偵察として現場に向かっていて、それを追い掛ける形になる。

そろそろ酒場も開き始めるような時間で昼間とは違う活気が溢れる街中を、完全武装の馬と兵士満載の馬車が通る。

住人達が何事かと目を向く中を、上下の渋い黄土色に装飾が細かく入った鎧を着たジークさんを筆頭に、守備隊が移動していく様は中々の迫力だ。

沈んでいく太陽に照らされて赤く光る鎧はちょっとカッコイイ。

正門を出て、街道に入った俺達の進行方向の先に煙が上がっているのが見えた。

どうやら狼煙らしく、周りの隊員が騒然としている。

「やられたのか…。」
「まさか…。」

どうやら危険を告げる意味の狼煙の様だ。先遣隊に何かあったらしい。

「落ち着け。ここからじゃ何も出来ん。各員即時行動出来る様にはしておけ。」
「ハッ!!」

揺れる馬車の中で各々鎧を着たり、クロスボウの組み立てを始めた。

「嬢ちゃん達は用意しないのかい？」

「俺らはこの服に魔法かかってますから。」

「便利でいいねえ。こちらは普通の鎧だよ。俺も給料入ったら妖精に魔法かけてもらうかな。」

「その前に酒場のツケを払うのが先だろうよ。」

「あー忘れてたわ。」

「出入り禁止になるぞー。」

「俺の唯一の楽しみがー。」

「まあこれで怪物でも退治すりゃ特別にボーナスでも期待出来るんじゃないか。」
「じゃねえか。」

「おお楽しみだ!」

ワイワイガヤガヤと用意をしながら話す兵たち。士気は高い。

今回衛生兵に任命（他に出来そうなものがないので）のコンスケは薬箱を点検してる。

のはずが…いつの間にかミイラ娘がいるのは何故だ…。

「ユウスケさんへるぷーですー。」
「コンスケ…お前ホント不思議な器用さだよな。」

包帯をほどきつつ巻きつつしている俺らを見て、馬車の空気が少し和んだ。

「これはひでえな…。」

現場に到着してみると、テントがなぎ倒され、先遣隊の人達もあちこちで倒れて呻いている。

手が空いている人間で馬車に運び込み鎧を脱がす。打ち身が主だけれど、命に別条はない様だ。コンスケが青い顔しながらも、薬を塗ったりしていく。

「隊長！一人意識が戻りました。」

「うううう…すみません隊長…。」

「無理するな。何があつた。」

「…テントを張りつつ、後発部隊を待つていたら、いきなり凄まじい音と共に巨大な物が突っ込んで来たんです。あれは…あれは巨大な蛇の様でした…。狼煙をどうにか上げた次第です…。」

「分かった。頑張つたな。もう休め。」

巨大な蛇…ワームか。

イレギュラーとS・Dも言ってたけど、モンスターはまだ実装されてないはず。ここまでの強い存在はあの10の頭を持つ竜以来だ。

一体どうなってるんだ…。

「弓部隊は全員装填状態で中心で待機、槍部隊は周囲を見張りつつ、いつでも動ける様にしておけ。重装歩兵も大盾用意で槍部隊と一緒に周囲を見張れ！歩兵隊は俺と共に各所フォローだ！」

「ハッ！！」

クロスボウの弦を巻き上げるキリキリという音や、鎧のガシャガシヤ鳴る音で一気に騒がしくなる。

ただ、やはり手慣れている様で、直ぐにかがり火やランプの火が時折はぜる以外はほとんど無音になった。

俺は中心で弓隊と共に周囲を見張っている。少し離れて置いてある馬車から、治療が終わったのかコンスケが顔を出しているのが見える。きちゆねはコンスケと一緒にいる。念のための用心だ。きちゆねの方が戦闘力あるだろうし。

月明かりが雲で隠れ、辺りが一瞬暗くなった時、遠くから音が聞こえた。多分他の人にはまだ聞こえない微かなものだけど、近付いてくるのが分かる。頭の上の耳に手を当てて方向を探る。

王宮とツリータウンを南北に繋ぐ街道、その両側の森。その森のどこかから木を潰すバキバキという音が確かに聞こえてくる。

「ジークさん3時の方向！俺の向いている方向から向かって来てる！」
「弓隊構え！目視で確認次第各人で発射！大盾隊前方に終結！槍部隊左右に展開！」

音がどんどん大きくなってくる…。来た！

前方の木々が突然はじけ飛び、そこから巨大な物がそのまま突っ込んでくる。

弓隊のクロスボウが発射され、鱗に弾かれるものもあるけれど何本かが鱗の隙間に突き刺さる。ひるんで動きが遅くなる。

雲が切れ、月明かりに照らされたその全体像を見て思わず皆一瞬動きを止める。

道路二車線分にも渡りそうな太さに、もたげた頭は小さな家程もあるだろうか。身体の長さは全部は見えないが飛行機位はあるのか。顔は蛇と言うよりもドラゴンに近い。かなり醜悪な顔してるけど。やはり巨大で太い蛇、ワーム…ドラゴン的一种か。とても話しが通じるタイプには見えない。

「槍部隊突撃！歩兵隊抜剣！行くぞ！俺に続け！」

呆気にとられていたのも束の間、ジークさんの声で皆我に返り、応という掛け声と共に攻撃に入る。

勢いよく突き出された槍は鱗に当たって折れるかそのまま刺さっても抜けない様だ。直ぐに槍から手を放し、歩兵隊に場所を譲りつつ、それぞれ剣を抜く槍部隊。

ジークさんを中心に歩兵部隊が斬り込んで行く。が、敵も黙ってやられはしない。もたげた頭を反らせると口から液を吐きかけてきた。大盾部隊が急いで自分の身体を覆える程の盾を掲げてガードするが、外れた部分の地面からは煙が上がり、何人かが避けられずまともに食らって悲鳴を上げる。

みんなそれぞれ鎧の形は違っけれど、兜は顔をしっかりと覆っている物だったから顔は平気な様だ。それでも肉の焦げる様な嫌な臭いが辺りに漂う。

「負傷したやつは下がれ！下がれ！」

ジークさんは誰かが取り落とした使えそうな槍を拾うと馬に拍車をかけて突撃した。数名と共に俺も続く。ワームの方は毒液を吐いた直後で動きが鈍っている。

また毒液を吐こうと身体を反らせた所に、ジークさんが馬の勢いそのままに槍を思い切り突き上げる。ズブリとしっかりと槍が刺さった。

「身体の下側は鱗がないようだ！集中させる！」

装填が完了したクロスボウが俺達の届かない顎の辺りに弓を放つ。歩兵隊の面々も斬撃から突きに変え腹を狙う。俺も走った勢いのまま長脇差で一気に突く。肉に刀が刺さる感触がひどく生々しい。肉が堅いから抜くのがきつい。

と、攻撃した箇所から煙を上げながら血が流れ始めた。これも毒か？

ワームにはこの集中攻撃はかなり効いている様でのたうち回り始めたけれど、それだけで十分こちらからすると攻撃レベルに感じる。血と毒が辺りに上げる煙で臭いも凄く、とてもじゃないが近付けやしない。

その中で不意打ちに尻尾が振り払われた。堪らず吹っ飛ぶ面々。俺も馬車の方まで勢いよく飛ばされる。

この高さで落ちたらヤバイ！

「コーンー！！」

馬車から飛びだしたきちゅねがそのまま一気に高くジャンプ。どう

にか手を伸ばしてきちゅねの毛を掴んで一緒にふわりと地面に降りる。

「助かったよ…きちゅね。」

「コン！」

「ユウスケさん大丈夫ですか！！？？」

「馬鹿！まだ出てくるな！」

「え！？？」

のたうち回っていたはずのワームがこちらに向かってくる。マズイ。負傷者も乗ってるこの馬車がやられるわけにはいかない。さっきの衝撃でどこか骨でもいったのかズキズキと呼吸する度に痛むが、踏ん張らねば。

「コンスケ…守り刀は持つてるな…。」

「はい…、ベルトに差してます。」

「多分一回位は何か魔法が守ってはくれるとは思っけど、いざという時はお前だけでも逃げるよ…。」

「死に行くみたいだな事言わないで下さい！！一緒にポルチーニ食べるんでしよう！？」

「死なないさ、死んでたまるかよ。」

「ユウスケさんっ！」

袖を引こうとするコンスケを振り切り、きちゅねに跨る。

迫ってくるワームの顔まで近付けさせ、きちゅねの上から一気に飛ぶ。ワームはきちゅねに狙いを定めていたからこっちの動きにはついて来れない。飛び上がった勢いそのままに俺と同じ位のサイズの目玉に思いつきり刀を振り下ろす。

「グギヤアアアアア！！！！！」

けたたましい叫び声を上げてワームが仰け反り天を向く。宙に飛ばされる俺。

これで馬車からは離れるはずだ。

仰け反り天を向いたワームはそのまま口を大きく開いた。まさか……。そのまま重力に引かれ俺はスポッと口の中に取り込まれた。

守備隊出撃（後書き）

書いてて自分でも予想外の方角になってきました。

追撃戦

ユウスケさんが…食べられた…。

ユウスケさんの攻撃で目をやられた大きな蛇…ワームは、そのままユウスケさんを口の中に入れてしまった。きちゅねさんも急いで方向転換したんだけど間に合わなかった…。

嘘…。

ついさつき一緒に帰るって約束したのに…。
これでもう会えないの…。

いきなり分かってしまった。
突然現れて、私の分身だと私の生活に入り込んできたあの人を、何となく自然に存在を認めて、いるのが当たり前で、きちゅねさんと二人と一匹でいる生活に慣れて…。親父さんとおかみさんとみんな毎日を過ごして…。
当たり前だと思ってたけど、きっとそれは私にとって家族というものだったんだ。
それを私は今失った…。

いや、まだだ。

戦う力もない私だけど、ユウスケさんも言っていた。同じ能力はあるはずと。

少しずつでもやれることをやればいいと。
今やらなくて、いつやるんだ私は。

ここであの人を本当に無くしては失くしては亡くしては絶対にいけない。

笑ってみんなで大熊亭に帰るんだ絶対に。

ワームは左目にユウスケさんの剣を差したまま、しっかりと口を閉じて、ゆっくりと森の奥に向かって進み始めた。

「垂れ目の嬢ちゃん…無事か…。釣り目の嬢ちゃんはどうした？俺達の周りにはいなかったから、こっちに飛ばされて来たんじゃないかねえのか？」

鎧の顔の部分（面頬というらしい）が壊れて、帽子を被っている様な状態のジークさんがゆっくりとこちらにやってきた。見えない所でどこか痛めてるのかな。

「ユウスケさんは…あのワームに食べられました。」

「はあ！？何だと！」

「ジークさん、我儘を言います。私は今からユウスケさんを助けに行きたいんです。だから助けて下さい！」

「戦えねえんじゃないのか。」

「はい、未経験です。でも…どうしても助けたいんです！」

私はしっかりとジークさんの目を見る。ジークさんも私の視線をしっかりと受けて外さない。

「随分といい顔する様になったな嬢ちゃん。いやコンスケ。」

フツと息を吐き表情を緩めたジークさんはそんな事を言った。

「分かった。今動ける人間を確認するが…多分壊滅的だ。俺の馬も

動きやしねえ。こつなつたらやる事は一つ。」

「はい！」

「今度は俺らがアイツに奇襲をかける。少数…俺とお前だ。やれるな。」

「やります。出来なくてもやってみせます！」

「その意気だ。武器を持って。直ぐにやつを追うぞ。早くどうにかしないと消化された釣り目の嬢ちゃんなんてお互い見たくねえもんな。」

「はい！」

ジークさんの見立てたとおりに、まともに動ける人は皆無だった。

クロスボウもほぼ全て壊され、怪我の軽い人でも隠密で動けるような状態にはない。

本当は衛生兵と任命された私は残って傷の手当てをしないとイケないんだけど、今は正直命に問題がありそうなのはユウスケさんの方だ。比較的動ける人達が手当ては変わってくれとジークさんが請け合ってくれた。

私はうなだれて戻ってきたきちゅねさんの背中を撫でながら、ベルトに差している守り刀を強く握る。

絶対助けますユウスケさん。

鎧を脱いで、その下に着ていた鎖帷子のみの状態になったジークさんと私ときちゅねさんは、ワームの後を追う。

他の人達は体勢の立て直しを最優先させるそうだ。

もし私達が万が一にも戻らなかつた時は、王宮に引き返し全軍で攻

撃に当たらせるといっ。
でも、もしそうなら終わりな気がする。

木がなぎ倒されて道の様になってるから、後を追う事自体は簡単だった。毒液と血が付いている所を避けながら足早に歩いて行く。しばらく行くと沼地が見え、その奥の丘に洞窟が見えた。這いずった跡がそこに続いている。

「ねぐらにしているようだな…。」

「みたいですね…。」

沼地を気をつけて渡りながら、既に囁き声で会話する。

洞窟の近くは地面があちこち割れていて、隠れる場所には困らなかつた。私が立ち上がったても平気な、ジークさんなら腰をかがめれば完全に外からは見えなくなる位深い亀裂達だ。

「…コンスケ、中が見えるか…。」

「あまり…奥は深くないみたいです。そもそもあのワームが大き過ぎるせいもあると思いますけど。」

「そうだな…。中に入って寝込みを襲うにしても、腹を地面に接して寝ていたら鱗に攻撃が弾かれるだろうな…。」

「ですね…。」

「…俺がオトリになる…。クロスボウで攻撃した後にはヤツを誘い込む。この割れ目の上に誘導するから下からズブリつてのどつだ？」

「じゃあその剣を置いてって下さい。」

「重くて持ち上がらねえだろう？」

「私が地面に寝そべって身体で支えて無理矢理突き上げます。私の体重と、きちゅねさんの力ならどうにかなると思います。」

「結構行き辺りばつたりの作戦だが、何せ時間がない。これで行く

ぞ、無理はするなよ。」

「既にしてますよ。でもこうでもしないと…。」

「皆まで言いなさんな。やっこさん倒して吊り目の嬢ちゃん助けたら…美味しい酒を飲もうや。王宮の飯も悪くないぜ。」

「いいですね。約束ですよ。」

「ああ約束だ。行くぞ…。」

「はい…。」

ジークさんは洞窟の入り口に近付くと、わざと乱暴にクロスボウの弦を巻き上げるハンドルを回して矢を装填し始めた。丁寧にはやらないとあんなに大きな音が鳴るんだ…。

キリキリキリ…

ズ…ズズズズズ…

動いた！

亀裂の中で寝そべってお腹の上に剣の柄を置き、真上に向けて真っ直ぐ剣を構える。

きちゅねさんも身体で支えてくれてるからどうにか固定出来た。後はここをワームが通過してくれば…。

「おい！出てこいよ！化け物蛇！お前の手ぬるい攻撃でこっちはピンピンしてるぜ。流石長いだけあって細けえ動作は苦手なのか化け物よお！…」

意味を理解したのか、単純に大きな音に反応したのか、ゆっくりとワームが出てくる気配がする。

緊張で手が汗でぬるぬるするし、鼓動も速くなって息を吸うのもき

「わかるのか。」
「双子の勘ですかね。」

私の守り刀と、ジークさんの持っていた短刀でお腹をザクザク斬る。すごい嫌な作業だ。

何か感じた通り、開いた所の奥からユウスケさんの頭が見えた。動いていない。

「ユウスケさん！」

「こりゃ…ちよつとやべえな…。急いで出すぞ！」

身体の中はましなのか、煙は上がってなかったけど、なんかネバネバしたものがくっついててすごく嫌だ。

ユウスケさんの顔を拭ってあげるとぐったりしている。地面に寝かせて顔を近づけると、ごくわずかだけど呼吸がある。でもドンドン弱くなってくる。

「嘘…折角助けたのに…。」

「マジか…。おい！吊り目の嬢ちゃん目え開けるよ！」

ジークさんが軽く頬を叩いても反応もない。まずい…まずいよ。どうしよう…傷薬位しか持ってない。

「……………コン…………。」

きちゅねさんが私の服の裾を引っ張る。振り向くと、きちゅねさんは口で私の手を尻尾に誘導すると、何といきなり尻尾の一本を噛みちぎった。

「ちよつと！きちゅねさん！」

何やってるの！と続けようとした私の目をきちゅねさんはしっかりと見つめるとその眼を私の手元にある尻尾の一本に落とした。すると私の手の中の尻尾は白く淡く光ったと思うと、形を変えて白く輝く綺麗な玉に変わった。

きちゅねさんはそのままユウスケさんの所に来ると、座り込んで私をじっと見詰めてくる。

「この玉を使えばいいの？」

「……コン。」

そうだといわんばかりにきちゅねさんは残った八本の尻尾を振る。

半信半疑でその球をユウスケさんに近付けると、玉はそのままユウスケさんの身体に静かに吸いこまれていった。

固唾をのむ私とジークさんの目の前でユウスケさんの瞼がピクピクと動き、呼吸が落ち着いてきた。そしてゆっくりと目を開けた。

「また僕のそばにいてくれたんだね……。狐のお姉ちゃん」

そう言ってやけに幼い顔で私を見たユウスケさんはまた意識を失った。でも今度のは安らかな寝息だった。

追撃戦（後書き）

書いてて消耗したのは初めてです。
後二話位この章は続きそうです。

星を見た狐達（前書き）

大変遅くなりました。久しぶりの更新です。

星を見た狐達

「ああ~~~~~生き返る~~~~~」

広々とした浴槽に身体を伸ばす。

竜の形した置き物からドボドボとお湯が出て来ている。

やっぱりあれだね。こう身体を伸ばして入れるお風呂はいいね。

そのまま尻尾で浴槽の床に突っ張って身体を水面の上の方にプカ〜とさせてたらコンスケに怒られた。

「文字通り死にかけてたんですから気をつけて下さいね！あれからほぼ丸一日寝てたんだし…。他に人が入ってきたら止めて下さいよー」

普段の俺みたいなお事言ってる。いいじゃないか、たまにはこうやって童心に帰るといふのは大事だよ。昨日は行水レベルでしかお風呂入ってないんだし。ようやくヌルヌルが全部取れた。

「コンスケもやってみなよー。気持ちいいぞー」

「もう〜ユウスケさん悪いことを人にすすめて〜、…あ…いいかも」
「だしよー？」

二人して湯船にぷかぷか浮かぶ。

「天井は竜じゃなくて星が描いてあるんですねえー」

「ホントだなー」

星か…。

.....あの時.....俺は、ワームの目を攻撃して、口の中に取り込まれて...。

気が付いたら馬車に寝かされていた。

なんだか体中がベトベトして気持ち悪かったけど、何の粘液かは敢えて考えないようにした。横を見るとコンスケが俺の手をずっと握りながら、きちゆねと寄り添うようにして寝ていた。なんだかとても安心して、ふと窓の外を見たら綺麗な星空だったのを覚えている。

それと同じ星空の絵が天井に広がっている。この辺りに見える夜空の絵なんだろうか。

「あれって何座ですかー？」

「ギザギ座」

「そんな名前の星があるんですね！すごい！」

「いや...冗談だ...ごめんコンスケ」

「あれはオリオン座だね、少し離れた所で大きく光ってるのが北極星だよ。あっちと同じだね」

そう言いつつ湯煙の間からS・Dが入ってきた。
え！ちよつとここ女湯！

コンスケと二人でワキヤワキヤ言いながらお湯に身体を浸す。湯煙で隠せるかな。

「って！女湯になんでS・Dさんいるんですか!？」

「だって僕女の子だもん」

「うええええ!？」

僕っ娘だったのか。胸も薄いし、髪の毛も小ざっぱりしてたし服装

も短パンとかだったから全然気がつかなかったぞ。

「なんか今失礼な事考えてなかった？」

「イイエワタシハナンニモ」

俺の視線で気付いたのか胸元を隠しながら睨むS・D。

「君達だつて似たようなものでしょ？」

「むー。成長途中ですよー」

「大きさはじゃないんだよ。形だよ大事なのは。なあコンスケ」

「形もへつたくれもないじゃん。そもそも僕と比べても…」

「うわああああ、ここでもイジメがああ」

「落ちて着けコンスケ」。でもなんか人に言われると腹立つな。うる

さいぞーこのまな板」

「うっ！自分達だつて…」

「最近洗濯板だ！」

「え…？同じじゃない？」

「段差がある」

「ユウスケさん…もうなんか言えば言つほど哀しいから止めましょ

う…」

「うん…」

確かに言いながら俺も切なくなってきた…。

浴槽の端できちゆねが我関せずとお湯に浸かりながらクアアとあくびをした。

別棟のお風呂から上がった俺達は用意してあった正装であるドレスに着替えさせられて1階の大広間へ。王宮は祝賀会状態だ。あんだ

け攻撃したし、もうトドメも刺しただろうし大丈夫だろうというこ
とで、攻撃部隊は全員帰還し、王宮に残っていた部隊の一部が代わ
りに街道や周辺の整備に向かったそうだ。元々、街以外は何も無い
ような所だったから被害はほぼ無いらしいが、市街地だったら大変
な事態になっていただろう。

メイドさんに着せ替え人形にされながらコンスケにようやく殊のあ
らましを聞いてぞっとした。ジークさんと二人して奇襲をかけるだ
なんてあまりにも無謀な作戦…成功してなかったら本当に大変な事
になっていただろう。俺の為に頑張ったコンスケ、そして尻尾が欠
けて九尾じゃなくて八尾になってしまったきちゆね。二人（一人と
一匹）があまりに愛おしくて思わず抱きしめてしまった。コンスケ
が目を白黒させてたな。

「おう〜今日の主役たちが到着したぞ〜！」

腕を包帯で吊ったり、足を包帯で固定した白い人が多い守備隊の面
々の前に赤や青のドレスの俺達が部屋の入口に立っただけで彩りが
鮮やかになり、それと同じ様に華やいだ歓声がわっと上がる。この
男祭りの中でドレスとか無茶苦茶恥ずかしいんですが…。ちなみに
俺が赤主体で、コンスケが青主体のドレスだ。

照れで少し赤くなった顔を隠そうと、大広間の入口で思わず下を向
いて立ち止まってしまった俺にコンスケが声をかけてきた。

「ユウスケさん。私達はなんだかんだで頑張ったんだから胸を張りましょうよ。」

「そうだぞ吊り目の嬢ちゃん。いやユウスケよお。お前さんが身体張って目ん玉片方攻撃してくれてなかったら、馬車ごとここにいるやつら何人かやられてたんだぜ。胸張ってくれや。主役は堂々とするもんだぜ。」

そうだそうだと同意して騒ぐ守備隊の皆さん。何か随分持ち上げられてるなあ。確かに主役が小さくなっても仕方ない。でも…。

「今日の主役はお前だろ、コンスケ」

「いいえ、二人と一匹です」

そう言つて肩に置いた俺の手を引っ張つて繋ぎながら、きちゆねを促し歩き出す。二人ときちゆねでいざテーブルへ。

「二人は俺の両側な！」

ずるいとか横暴だ！という声上がる中で、隊長特権で無理矢理席を決めるジークさん。ふふ…両手に花だな。オトリになつてくれたりと色々コンスケ共々お世話になつたからいいとするか。

乾杯の音頭をジークさんが取り、宴が始まった。料理が運ばれて来るのを食べるだけでも何かご馳走つて感じたなあ。最近働いてばかりだったし。結局怪我をした部下の所に杯を持って移動したりするジークさん。なんだかんだで相当部下想いだこの人。誰の所に移動しても、みんな嫌そうな顔しないし。

「いい人だよ、ジークつて」

気が付くと横にS・Dがいた。そういえば俺達がドレスに着替えさせられている時に、即行でどこかに逃げたと思っただらいつもの恰好じゃないか。

「普段カッコつけた事いいながら、ああやってみんなを大事にするから、みんなにも大事にされる…。死人が出なくてよかったよ。この世界でも」

「そうだな、でも本当にカッコつけ酷いぞ？」

「知ってる。でもそうやって照れ隠ししてるのかもよ？でもたまには一人をじつと見詰めてもいいんじゃないかな…」

そういつてジークさんを見詰めるS・D。あれ？これはもしかして…。と、さつきからきちゆねと二人で貪り食いながら飲みまくっていたコンスケが声を掛けてきた。慎みという文字を墨で書いて貼り付けたいなこいつら…。

「あれーS・Dさんはドレス着ないんですかー？」

「ぼ…僕は…ああいうヒラヒラしたの似合わないし…」

「そうかな？S・Dはボーイッシュな感じだから色とかも軽めのでサマードレスみたいのなら似合うんじゃないのか？」

そうやって話している俺らの声が聞こえたのか、離れた所からジークさんの声が聞こえてくる。

「ユウスケいいんだって、こいつは言っても聞かねえんだし。ホラ乾杯すつぞ〜」

「隊長〜もつ何回目の乾杯ですか〜」

「いいじゃねえか、今度はこの俺様と、美女の為に乾杯で！」

「それもさつきやりましたよー！」

「そうだったか？はっはっはっ！」

そう言ったジークさんの言葉で一瞬悲しそうになったS・D。仕方ない一肌脱ぎますか。

「S・Dちよつとお手洗いの場所を案内してくれないか？」

「あ、うん。いいよー」

「それと化粧直しというか、したいからメイドさんをお借りしたい」
「???いいけど」

「よし行くぞ！漏れそうだ、急いでくれ」

「ちよつと女の子がそんな事を言わないでよ」

「お前も女の子だろS・D」

「そうだけど」

メイドさんを借りて、お手洗いではなく、ドレスルームにS・Dを拉致。暴れるS・Dを抑えつけて、メイドさんと二人で無理矢理ドレスを着せる。

「えー！恥ずかしいから絶対広間戻らない！」

「煩い！だったらあんな乙女な顔して見詰めてるんじゃない！」

「何さー」

「何さじゃない。嫌なら洗濯板話をジークさんにするぞ！」

「酷い！！」

ぶーたれるS・Dを無理矢理大広間へ連れて行き、ジークさんの前に引っ立てる。守備隊の面々もジークさんも誰だか分からない様だ。

「おい…ユウスケ…この可愛い娘誰だ？俺の美女センサーにビビッと来たぞ」

「さあー誰でしょうね〜」

ってこういうのを言うんだね。ジークさんがもう溶けきってるわ。邪魔者は退散しましょ。

「お腹空いたから俺行くわー。んじゃね」

それに二人してコクコクと頷く。S・Dが目でありがとうと言ってる。凄い嬉しそうだなあ、初々しいなあ。俺はさっさと戻ってもりもり食べよう。結構気を使ってあんまり胃に入れてないんだよね。

遅くまで続いていた宴を途中で抜け、割り当てられた5階の来客用の部屋へ。コンスケも眠そうだったので引き摺ってきた。きちゆねはまだ食べそうな感じだったけど、きりがないのでおあずけにした。尻尾が減った分の回復に使うのかな。その横で未だに飲み続けている守備隊の皆様。さすが体力がある。昨日の今日なのに元気な方々だわ。

そのままドレスだけ脱いで、その辺のハンガーに掛け、いつもの和セーラーがないから、用意してあった肌着とローブを着込む。寒くないからいいけど、結構スースーするね。コンスケは眠る前に無理矢理着がえさせた。ドレスを皺にはいけない。食べ物のシミはついてなかったからOKだ。ベッドが二つ用意されていて、片方のベッドにコンスケがきちゆねを抱えて寝て、もうひとつを俺が使った。

「といれ…」

横になってすぐに寝付いたけれど、何となく眼が覚め、もそもそと起きだして同じ階のトイレへ。中世をリアルに再現かと思ったら、何か普通の陶器の便座だった。そういえばリーフタウンのトイレも普通に使ってたけど、現代のに近いなあ。用を足して戻ろうとする、廊下にS・Dが立っていた。まだドレスを着てる。

「夜更かしだなー。もう流石に宴会も終わったんじゃないか？」

「うん、さつきお開きになって大体みんな寝たよ。その場で動かない人は放置。ちよつと見てもらいたいものがあったさ。来て」

「コンスケも起こす？」

「いいよ。ぐつすり寝てるみたいだし。」

「うい」

階段で一つ下の階へ降りて礼拝堂へ。蠟燭の明かりで見るとそこは確かに神聖な気配だ。入口の反対側の壁には大きな竜の見事なレリーフになっていて、ほぼ壁全部を覆っている。

「こつちの世界はさー、あつちの世界と違って宗教は一つなんだよね」

「そうなんだ」

「まああつちも元々は一つかもしれないし、色々政治の道具になってるものもあるみたいだけど、こつちはもっと単純だよ」

そういつてかざされた蠟燭の光に照らし出されるのは、竜のレリーフ。

「竜、ドラゴン信仰か」

「そう、まあ別に祈りを捧げる必要もないけど、なんだかんだでこの世界に移動した民の皆さんも来た時にお世話になってるという意識があるからか、ちゃんと祀ってくれて僕達も嬉しいよ」

「で、夜更かしして宗教談義したかったん？」

「ううん、これを渡そうと思っただけ」

そう言うとS・Dは、胸元から一枚の薄いキラキラと光る板状の物を出した。鱗か。胸と同じで薄い。どこにしまってたんだ…。

「いいのか？その…見極めとやらは」

「うん、街ごと救ってもらっちゃったし。僕らは本来の力は封じられてるからさ。助かったよ」

「分かった。ありがたく頂くよ」

「それを、その奥にかざしてみて」

「ん…こうか？」

奥に安置されていた大きな竜のレリーフが音も無く消えて、奥には門が現れた。こんなとこに隠してあるのか地獄の門。触れてみると反応はなし。上部にはキラキラと輝く竜の彫刻がくっついていて、これがS・Dの本当の姿なのかな。

「いつか…見せて欲しいな、本当の姿」

「惚れちゃうよ？」

そういつてふふつと静かに微笑んだS・Dの顔は本当に綺麗で、ちよつとクラつと来た。

「ジークさんに怒られちゃうな」

「何でそこでジークが出てくるの!？」

「え？違つもの？じゃあ誘惑しちゃおうかな」

「え！ちよつとやめて！本当にやめてよね！」

「大丈夫。男に惚れる趣味はない。一応中身は男だからな。からかつて遊ぶかもしれないけど」

「もー」

そういつてふくれつ面するS・Dの頭をわしゃわしゃと撫で、部屋に戻る様に促す。

「さつ寝ようぜ。明日には馬車でまた寝るかもだけど、まだ疲れてるし」

「あ、うんごめんね。ありがと付き合ってくれて」

「こちらこそ。ありがとう」

礼拝堂を出る時に振り返って見てみたらもう門は消えて、レリーフが静かに佇んでいた。

「あーあつたあつた」

月と星明かりの中、蝙蝠の様な羽の生えた女の子がパタパタと飛びながら決戦のあった地へと降り立つ。

「うわスゴイ状態だねー。まだ生きてるかな？」

死体となったワームの頭に近付く。

「うん！やっぱり生きてるね。さすが我が着族。生命力半端ないねー。はるはる？」

ピクリとも動かない巨体に話しかける女の子。

「とりあえず私がこの世界の主の一人だよー。気軽にさっちゃんて呼んでね。何？小娘消える？全く。本性見ないと理解出来ないみたいね」

そういつて女の子の背後に一瞬ワーム並みの巨体が浮かび上がる。既に動かないはずだったワームの身体が一瞬ピクリと反応する。

「理解した？というわけで忠誠を誓ってくれるなら、人間形態で復活させてあげるよー。始めの7人じゃないから地域はあげられないけど、普通の生活も楽しいもんだよ、うん！」

開かないワームの眼を覗き込んでいた女の子はポンッと手を打つ。

「あーあつちだと宝物の守り神だったのね？指輪は置いてきた？よかったー。また一個神話が始まる所だったよ。じゃあこっちでも城で会計とかどう？ちょうど収支の決算が大変なんだよー。私は面倒だからやんない」

暫くして、何か了承を得たのか大きく頷いた女の子。

「OK、OK。商談成立だね。うちにもお馬鹿キャラのF・Dっていうのもいるけど、あれも結構辛い過去があるのよねー。みんな何かしら抱えて生きてるからさー、ゆつくりでいいからここの生活を楽しんで貰えたらウレシイなー。だから恨まないでね、みんなを。憎しみで返さないでね。それさえ守ってくれたら私が全力で守るからー」

そういつて何やら念じ始めた女の子。

「ささやいてーいのってーえいしょー。ほいつ！」

ワームの身体が光り輝き、暫し後に消えた光の後に、お腹のでつぷりと突き出た少し眼付きの悪い男が一人座りこんでいた。左目は潰れている。

「あーそれも反映しちゃったか。まあ個性個性。眼帯でも巻くといね。しかし太り過ぎだね…。食べ物悪かったんじゃない？暫くベジタリアンになりなよー。人間は食べても美味しくないからねー。というーか駄目だかね」

目付きの悪い男は、変化した自分の身体に戸惑っていた様だったが、素直に頷いた。

「よし！最初の仕事！その狐ちゃんの剣とバスタードソードを拾ってくんない？うん！ありがと。バスタードソードはそのまま持ってたねー。狐ちゃんの剣は私が持つてくね。重いけど頑張って速度出すからちゃんと腰抱きで捕まってるね？」

そういつて腰に張りついた男共々、夜空に上がった女の子は城へと向かってヨロヨロと、しかしそこそこの速度で飛び始める。

「まったくー王様も楽しじゃないよねー。あんたホントに、ダイエツトしなさいよー。王様からの仕事その二ねー」

星を見た狐達（後書き）

これでこの章は完結です。キノコ取りから帰ってきてすぐのはずが、現実では随分と時が流れてしまいました。今、三人称視点での改訂版を書き進めております。こちらの一人称視点も好きではありませんが、情報量が少ない為、やはり三人称の視点の方がいい感じはします。色々と整合性を合わせつつ、完結までまとめて書く予定ではありませんので、投稿は年明け…2月になるかもしれません。その時に忘れられていなかったらまたお会いしたいと存じます。玉藻

ただいま私の家（前書き）

なんか小説情報を少し変えたらお客様が増えたので、ちょっと気分が上がって続きを書いてしまった現金な玉藻です。

ただいま私の家

ゴトゴトと一定のリズムで馬車が揺れる。きちゆねさんを抱えたユウスケさんが馬車の真ん中を走っている通路を挟んで、反対側の座席で眠りこけている。結局そこまでのんびり出来たワケじゃないし、疲れたんだろうな。そのまま寝かせといてあげよ。旅装のマントだけじゃちよつと眠るには寒いからユウスケさんの隣に行こうかな。私もうつらうつらしつつ、昨日までの事を思い出していた。

宴からの翌日。帰り支度をしていた私達を見て、まだ傷も癒えてないしゆっくりしていけとS・Dやジークさんから城の滞在を勧められもう一日、もう一日と気付けば三日も過ぎってしまった。一応親父さん達に状況を手紙で送ってあるけど、特にS・Dさんが強く勧めるから無理矢理帰るのもあれかなと。

働かなくてもご飯が出るのはいいけれど、何か動いてないと気が済まないで厨房やメイドさんのお手伝いをしようかと思ったら『お客様だから』とやんわりと断られた。しょうがないのでユウスケさんにちよつと稽古をつけてもらったりした。それを見ていた守備隊の皆さんも、我も我もと殺到してジークさんに怒られてた。確かにユウスケさんは教え方上手いし、みんな上達してた。ユウスケさん曰く『刀の殺陣』だから、ちよつと実戦向けじゃないと笑っていたけど周りの守備隊の皆さんは違う剣の振り方でみんな興味深々だったみたい。今度は『ひいろうしょう』の動きでも教えるかなと言ってた。

後はS・Dさんと一緒にユウスケさんも含めてメイドさん達に着せ

替え人形にされてたり、お城の図書室で本を読んだりしていた。何で『ねくろのみこん』とか『おれんじペーじ』、『ごるごさあていん』が置いてあるんだこの図書室は！とユウスケさんが叫んでたけど有名なのかな？

そんな感じで気が付くと、もう一日、もう一日と滞在が伸びて三日経った時点で流石に帰ろうという事になった。

守備隊の皆さんは仕事にならないからとジークさんに見送りを禁止させられてたけど、窓とかから手を振って見送ってくれていた。オツテルさんはユウスケさんと何か友情的なものが芽生えたらしく、握手しながら泣いていた。メイドさん達にもお世話になったな。尻尾や耳を随分もふもふされた。狐族はやっぱ珍しいみたい。それにしても、ああいうメイドさんの清楚な振る舞いとか私出来るのかなあ。勉強してみよ。

「それじゃお世話になりました」

「それは俺達の台詞だ。悪いな送ってけなくて」

「まだこっちも落ち着いてないし、隊長がいなくちゃ駄目ですよ」

「コーン」

「またねユウスケ、コンスケ、きちゅねさん達」

「落ち着いたらお店にも食べに来てくれな」

皆さんに見送られて馬車でまたツリータウンに向かい、リーフタウンへは二人だからきちゅねさんに乗って帰る予定。街道の整備はまだ完了してなくて、板とかが抉れた道の上に渡してあって馬車が頑張って通過していた。

あくびしながらそんな城での事を思い出して、随分と沢山のひと毎日いたのが、帰りは二人と一匹。いつものメンバーなのになんだか寂しいなと思つてたらユウスケさんが起きたのか声を掛けてきた。

「ふあああ。何か…長旅だったなあ」

「そうですねー」

「色々あつたけど、ありがとなユウスケ」

「何ですか改まって？」

「いや…今回は本当に死んでたかもしれないし…。いつも妹分の様なつもりでいたけど、成長してたんだな…ってさ」

「ふふーちゃんと成長してますよう。私だって」

家族がいなくなるかもしれない恐怖…というのを味わってしまった私は、確かに前とは違うかもしれない。恐怖で成長というのもなんだか嫌だけど、少し何かが変わった気はする。

「専守防衛…自衛官の考え方だけど、守る為の力。やっぱり必要だよな…」

独り言の様にユウスケさんが呟く。

「せんしゅぼ…えい？」

「力をただ闇雲に身に付けてもしょうがないけど、守る為、自衛の力はある程度は必要だなんて事さ。簡単に言つと」

「うーん。よく分からないですけど、やられる前にやれ？的なの？」

「いや逆だな。やられてからやれだ。難しいんだけどね」

「ううむう〜」

深く考えると頭が焦げそうなので、何となくで理解した。確かに私はあの時力が欲しいと思つた。でも、必要以上の力は欲しくないな。

というかムキムキな私見たくないし……。頭を抱える私の髪の毛と耳をぐしぐしと近付いたユウスケさんが撫でながら言葉が続く。

「とにかく、久しぶりに親父さんのご飯食べてゆっくりしたいな。

ドタバタが続いてたから通常運転に戻さない」と

「あー」

「きちゅね抱えてみんな寝ようぜ。まだ結構あるだろ」

「はい」

二人できちゅねさんを挟んで、座る。御者のおじさんが優しい視線をくれてた気がするけど、直ぐ意識が飛んでいった。

ツリータウンに到着し、御者のおじさんにお礼を言って別れる。結局行きと同じ人だったみたい。全然喋ったりしなかったな。F・Dさんの所にも顔出そうと思ったけど、ユウスケさんが『せくはらされるから嫌だって言って、そのまま二人できちゅねさんに乗って大熊亭へ帰った。一体何をされたんだろう……』。

「ただいま戻りました」

「ただいまーです」

お昼の営業が終わった後ののんびりした時間に帰った私達。あー帰って来たって感じがする。翌日の仕込みをしていた親父さんが手を拭きながら厨房から出てきて出迎えてくれた。

「お帰り二人共。お腹は空いてないか？怪我はしてないか？」

「怪我は大丈夫です。ご飯はいつでも歓迎ですよー」

「すいません、随分と店開けてしまってます……」

「いってことよ。コンちゃんとユウちゃんがいなくてお客さんも少なかったから。うちのやつと二人でのんびりで回ったしな」

「それはいいんだか、悪いんだか」

「とりあえず荷物置いてくるわ、コンスケ荷物頂戴。お前は手を洗ってうがいしてご飯の用意な」

「はいはい」

ユウスケさんが二階に荷物を置きに行っている間に、テーブルにささと食器を用意する。

「親父さん何か手伝いますか？」

「ん？大丈夫だよ。温めるだけだし。今日はミネストローネとサラダとパンだけどいいかな？」

「十分です」

「お城で美味しいもの食って来た二人の口に合うかな？」

「私にはここの味がお袋の味ですよ」

「ははは、親父の味だな。よし、持っててくれ」

「はい」

テーブルの上に料理を用意して、まだユウスケさんが戻って来ないのを見計らって、洗い物している親父さんを後ろからハグする。

「えいっ！」

「おやおや、どうしたコンちゃん」

「ちょっと色々あったので、改めてただいまです」

「うん、お帰りなさい」

そういつてそのまま振り返らないで洗い物をする親父さん。うん、血は繋がってないけどやっぱり親父さんは私の家族だ。おかみさんにも後でハグしよ。ユウスケさんに見られると子供扱いとか言われ

そつだから何か恥ずかしいんだよね。でも…ここが私の家だ。帰つてくる場所だ。

ただいま私の家（後書き）

短いですが、ちょっと書きたいテーマではありましたが、そろそろ次の『D』さんを登場させる予定です。前回の話でもポロツと誰かさんが言っていました。7人います。Dの名前を持つ人達。なので後二人出てくる予定です。

帰って来てすぐに去りし日常（前書き）

短いですが、筆が乗っているので投稿してしまいます

帰って来てすぐに去りし日常

あれから数日…。

コンスケにも言った通り、通常営業…日常が戻って来た。

起きて身支度を整えて、軽くジョギング & amp ; 木刀の素振りや型の確認。汗を拭いて、お店が開く前にご飯を済ませて、井戸水を飲料用に汲み、エプロンと三角巾を付けてランチタイムに臨む。常連さん達と会話しながら忙しく動き回り、終われば片付けして翌日の用意して賄いを食べて終わり。その後はコンスケと一緒に風呂に入って洗いっこ（主に尻尾）することもあれば、お互い好きに行動してる。夜は深夜になる前に寝て翌日…という感じだ。

最近、コンスケが朝の稽古に参加する様になったのが、ちょっと変わった事かな。この前の事もあつたし、動ける様になっておきたいらしい。基本は俺と同じ身体なので、身体を鍛えるというよりは、身体に動きを覚えこませたり、イメージトレーニングを中心に行わせている。

人間自分の動きを客観的に、意識的に捕らえる事が出来れば、身体作りが出来ていれば動けるものである。カンだけで全部行う人もいるけれど、やはりしつかりしたイメージというのは大事だ。昔、一緒にCMの仕事した人の話だけど、バスケットのシュートを入れる場面シーンを取ることに、何度も練習するのではなく、ボールを触りながら成功したイメージを一週間ずっと考えていたら見事に一発でシュートに成功する事が出来たらしい。とにかく、その位イメージは大切という事だ。

俺の場合は、本来の自分の動きにどれだけイメージを近付ける事が

出来るか…というのを中心に稽古をしている。大分体格は変わっているけど、肩幅はそこまで無茶苦茶変わらないのが哀しい。元々なで肩だったからな…。お陰様でたまに女形おやまとかの仕事も来たけど、やっぱり実際に女性の身体になると色々違うのでいい勉強になる。またそういう仕事があるかは別だけど。

今日も一仕事終えて、二人で賄いを食べていると、おかみさんが血相を変えて俺達の所へやってきた。

「どうしたんですか？おかみさんそんなに慌てて」

「団体さんでも来ましたか？」

「そう、まさにそれなのよ！なんと団体さんの予約が入ったのよ！」

「ええ！！」

「何名様ですか！？」

「4名様と、1名様＋妖精さんと巨大な荷馬車だそうよ！」

「え？妖精？」

「巨大な荷馬車ですか？」

「何でも巡業の劇団さんが、王宮への街道が通れなくてこっちに廻つて来たらしいのよ」

「へえ〜〜」

「あれのせいかな…」

「というわけで休んでるとこ悪いんだけど、二人共手伝ってくれろ？掃除は空き部屋も毎日少しずつしてあるから大丈夫なんだけど、寝具の用意なんかがあるのよね」

「あれ…？ちよつと待って下さい…。1名＋4名＋妖精さんって最低でも5部屋は必要ですよね」

「そうね」

「そーですね」

「一階は親父さんとおかみさんの部屋、2階は俺が今使ってる部屋に入れて5部屋、3階屋根裏部屋はコンスケの部屋…。数足りないです…」

「あーあらゝあたしったらうつかりして予約受けちゃったわ！どうしましょ。こんなに予約入ることなんてないから慌てちゃって…。

ついさつき下で受付したのよね。先に一人来て知り合いの分って事で御予約されたのよ…。烏龍亭のマスターさんんだけど」

「え？マスターが予約？知り合いなのかな」

「まだいるか俺見てきます！」

「あー有難う。お願いねユウちゃん。私ちよつとうちの人と相談してくるわ」

「あーユウ姉ちゃん私が行く！つてもう出て行っちゃった…。じゃあ…私はとりあえず寝具の用意始めてますね」

ドタバタと三人でそれぞれの方向に走る。何やらコンスケが俺に叫んでたけど、もう外に走り出していた俺には聞こえなかった。

全力で走って大熊亭を出ると、のんびり歩いている男の人が見えた。多分あの人かな。

「すいませーん！！大熊亭のものですが…」

くるつと振り返った姿は、チョッキに黒いズボン、黒髪をオールバックにして、銀色の前髪何本かは垂らしてある。何かいかにも喫茶店のマスターって感じだなあ。多分この人だ。

「何かなユウスケ君」

「はい、あの先程の予約の事なんです…えっ？何で俺の名前を？」

「大熊亭の双子の狐娘の事は有名だよ」

「あ…はい、ありがとうございます。実は予約の事なんです…」
「ああ。俺の仲間達が来るんだ。S・Dも来るから是非泊めてあげて欲しいな全員」

「えっ！？それって…」

「俺はB・D…通称マスター。こう言えば分かるかな？敵意はないよ」

「っ！了解しました。用意させて頂きます（俺の部屋にS・Dで俺はコンスケの部屋で寝るかな）」

「もう一人、君にとって新顔が来る。M・Dだ。気を付けたまえ。

彼は…天然だ」

「ほへっ！？」

「じゃあよろしく頼んだよ。君もそのうち飲みに来るといい俺が淹れたコーヒーを。H・Dが納品してくれたハーブティーもあるから苦手でも平気だぞ」

「あ、はい。ありがとうございます」

「色々頑張ってくれたまえ…」

そういつて大仰に頷くとB・Dもといマスターは去って行った。この街にもいたのか…。全く気付かなかった。しかし…渋いおじ様だな…。

「お帰り〜ユウちゃんどうだった？」

「すいません。受ける事にしました。俺の部屋片付けて、使ってもらいましょ？荷物もそんなにないし、コンスケの部屋で寝袋で寝ますよ。それでいいかなコンスケ」

「私はいいですけど、おかみさんは？」

「悪いわねえ〜。私はまあお客様に迷惑掛からなかったのはありがたいけど、ごめんなさいね、私の早とちりのせいで」

「大丈夫ですよ。この街にこんな人が来るのも珍しいですしね。」

コンスケ、S・Dも来るって」

「え！？S・Dさんが？」

「うん、他にもゾロゾロと来るらしい。多分四名様の方は全員俺達の知り合いだと思う」

「あらそうなの？じゃあ余計に歓迎しなきゃだわね」

「あー普通でいいですよおかみさん」

「あらそう？」

多分：あの辺りが来るだろう事は予想出来る。四人って事は俺は会ってない一人にも会えるのか…。確か水晶の谷のC・Dか。やたらと不気味らしいから覚悟しないとな。

帰って来てすぐに去りし日常（後書き）

ようやくB・Dさんがユウスケと会いました。実は初対面です。

猫は被るのか、装備品なのか（前書き）

今回登場する人が今までで一番多いです。

猫は被るのか、装備品なのか

全ての準備が終わった次の日。

ランチタイムが終わって、賄いも食べて予約のお客様達に備える。結局私達もいつぞやのメイド服を来てお出迎え要員だ。お城の人達並に出来る自信はないけど頑張ろー。

横でユウスケさんが何故か凄くしつかりとストレッチをしている。何と戦うんだろぅ…。

SDさんは最近あつたけど、他の人達は多分久しぶり。C・Dさんもきつと来るんだよね…怖いなあ。初めての人も来るみたいだし…でも、妖精さんはちよつと会ってみたいなあ。

「ユウスケさん…ちよつとトイレ行って来ます…」

「そんなに緊張してるのか？」

「ユウスケさんは味わってないからですよ。あの至近距離で垂れ下がった前髪から覗く赤い目…ひゅ」

「おいおい…」

「とにかく…来たら…お任せ…しますっ！」

走って一階のトイレへ。パニエって付けてるとスカートが綺麗に広がって可愛いんだけど、用を足すのはちよつと大変。あれ？入口のドアベルが鳴って何か声も聞こえるけど、もう到着したのかな。急がなきや。

「いらっしゃいますせ。ようこそ大熊亭へ…って誰ですか？」

「え？コンスケ会った事あるんだろ？C・Dさんだそうだよ。綺麗な人じゃないかー」

「あら、褒めても何も出ませんことよ」

そう言つて、ユウスケさんを小突く謎の女性。誰？本当誰この人。服はユウスケさんがよく着ている和装セーラーに似た雰囲気で、黒髪ロングが少しカールしてて、前髪も後ろにやって顔がハッキリと見えている。美人さんですね。目は赤目：え？本当にC・Dさん？

「あの…、C・Dさんなのですか？」

「そうよ」

「本当に…、C・Dさんなんですか？」

「そうだつて言つてるじゃない」

「本当に本当にホントにC・Dさんですか？？？？」

「もうっ失礼しちゃうわね。水晶の谷で会つたでしょ？」

嘘だあああああ、偽物だああああ。人が違い過ぎるうううう。大混乱している私を余所に、おかみさんが受付をして、ユウスケさんが荷物を運び、二階に消えていくC・Dさん？
入口のベルが鳴つてS・Dさんが入つて来た。今日は旅装のマントを羽織つた下はスカートに上は半袖だ。

「久しぶりコンスケちゃん…つてそこまで経つてないけどね。どうしたの…？」

「ああああお久しぶりですS・Dさん。ちょうどいい所に！C・Dさんつて変形します！？」

「ああ…先に着いてたんだ…。うん…、最早変身とかじゃなくて変形するね彼女。外だと無茶苦茶猫被るんだよね」

「猫を装着すると変形出来るんですか！？」

「いや…あの…、言葉のあやだね。本来の意味は『本性を隠してお

となしくみせる』って事なんだけど、おとなしくというより、大人になつてる？感じだねC・Dの場合…。慣れないときついと思うけど、あれもC・Dだよ…」

「そうなんですか…」

あそこまで人が変わった様に出来るなら、水晶の谷でもあの位は愛想振りまいて欲しい。不気味なあゝの雰囲気の方が狙つてやるのは難しい気がするんだけど…。とにかくS・Dさんを案内しなきゃ。

「S・Dさんは荷物は？」

「うん？僕はほとんどないから別に自分で運ぶよー。ありがと」

「じゃあ、後でお部屋に案内するからちよつと座つて待つてて下さいね。お茶でも淹れましょか？」

「あーお願い。久々にしつかり馬車に乗つたから疲れたよー」

おかみさんが案内してくれるから、食堂の椅子に座ってもらい、お茶を淹れる為にお湯を沸かそうと厨房に向かつたら声が聞こえてきた。

「あら、随分可愛い格好してるじゃない。淹れるならハーブティーあるわよ」

「H・Dさん！お久しぶりです」

「おーH・D随分久しぶりー」

「あら、S・D何か見ない間に女の子らしくなつたわね」

「え？あ…そうかな？えへへ」

「服装だけじゃなくて…、うん。雰囲気柔らかくなったというか。恋でもしてるのかしら？」

「そんな事あったり…ナカタリィ…」

相変わらずH・Dさん綺麗だなあゆつたりしたロングスカートに上

はカーディガン。そしてS・Dさんが顔を真っ赤にして俯いてる。うん、どうみても女の子だねー。

H・Dさんが厨房のカウンターにハーブティーの入った缶を置いてくれる。

「余ったらそのまま貰っていいわよ。お土産ね」

「わぁ！ありがとうございます〜」

「お！S・DにH・Dもう来てたのか！早いなあ！俺なんて近いからって油断してたぜ」

「あら、その騒がしい声はF・Dね。相変わらず変わりないようね」

「おーF・D久々ー。さっちゃんが最近遊んでくれないって文句言ってたよ」

「元気がいいって言うてくれよ！俺も最近遊びたいんだけどなあ〜。温泉忙しいんだよ。今日は流石に任せて来たけどな〜。うちの部下ちゃん達に」

火は落ち切ってなかったから大鍋でお湯を沸かしてる内に、F・Dさんも来た。今日もいつもと同じ格好で頭には手拭を巻いている。知り合いが沢山いるなあ。あ、コップ足さなきゃ。そうこうする内にユウスケさんとおかみさんが二階から下りて来た。

「随分賑やかになったと思ったら、皆さんお揃いか。H・D久しぶり。S・DとF・Dはちよつとぶりだな」

「お久しぶりユウスケ君」

「ユウスケさんちよつとぶり」

「メイド服も可愛いね〜。狐さんの今日のパンツの色は…、冗談だよ冗談！！」

全員から、もの凄い目で睨まれるF・Dさん。よく見たらここにいるのはF・Dさん以外女子だもん。睨まれるよ、そりゃー！

「F・D…あんたそこまで落ちたのね…。前々から知ってはいたけど…」

「F・Dサイテーー」

「本当に最低だよF・Dさん。もうこれは永年無料だな温泉」

「うわああああ冗談だって言ってるのにくくく。しかも狐さん…条件がさらに吊り上がってませんか!？」

「自業自得ね。変態避けのハーブはないわよ」

「そういう星の廻りなんだね。ああ残念さん」

「せくはら」

「うづうづううづ。すいませんでした…」

総攻撃を食らって撃沈するF・Dさん。まあいきなり挨拶があれば喜ぶ人がいたら見てみたい。ジークさんならやりそうだけど、S・Dさんの前だとやらないだろうなあ。

「お茶が入るまでの間に、女性陣の荷物運んどくよ? F・Dは自分でやってね」

「あの…、一応お客なんです…」

「正しいお客様はいきなり『せくはら』しなれないと思いまーす」

「はい、正座待機してます」

ユウスケさんが荷物を二階に運び、おかみさんが部屋割を説明する。椅子に腰掛けて聞いているS・DさんL・Dさん。本当に床に正座してるF・Dさん。でも何か嬉しそうに見えるなあ。こういうのをマゾって言うって前にどっかでユウスケさんが言ってた気がする。

お湯が沸いて、お茶ポットを温めて、コップを温めようとしたらC・Dさんも下りて来た。コップ追加して…コップも温めて…。

「みんな揃ったみたいだな」

ベルの音を鳴らして烏龍亭のマスターが入って来た。マスターもいつも通りの恰好だ。あ、さらにコップ追加しなきゃ。

「あーB・D久しぶりー」

「さっきからお互い久しぶりばかり言ってる気がするわね。お久しぶりーB・D。息災？」

「おっすB・D景気はどうよー」

「お兄様！ー！」

え？お兄様？しかも誰もマスターって言わないでB・Dって呼んでるけど、マスターはB・Dって名前なのか。へー。あれ？なんかみんな共通ばい。

「だから、いつも『お兄様』はやめるといつてるだろ？C・D。まあ元々の住んでいた地域は近かったけれども」

「お二人は兄妹なんですか？B・Dさん」

「いいや、ユウスケ君。勝手に呼ばれているだけだよ…。懐かれるのはいいのだけどね…」

「だってお兄様がこんなに渋くてカッコよくて、マスターよ！いいのに！スゴクいいのに！萌えるのに！」

「……………オタクさんなのか……………」

「……………ああ…そんな言葉があったわね。多分そうよ……………」

「まあB・Dは渋いよねー」

「……………いいなあB・D…。俺も張付かかれたいぜ……………」

「F・Dさん…。外の納屋にヤギがいるから寝る時ハグするといよいよ…。ついでに朝乳もみもみしてヤギ乳絞ってね」

「……………なんかチガウ」

賑やかで、平和だなあ。

「お茶入りましたよー。皆さん椅子に座ってくださいねー。F・Dさんは床でいいんですか？」

「ちゃんと椅子に座ってもいいの!？」

「早くしろよF・Dさん」

「F・D待ちなんだけどー」

「F・Dさっさとしなさい」

「……………早く……………」

「まあ、ほら、座りなさいF・D。みんなお待ちかね…………だからね」

「アリガトウゴザイマス」

何か今、素になったよC・Dさん……。とりあえず人数分のお茶を配って一安心。何故かハーブティーにドボドボと砂糖を入れてるF・DさんがH・Dさんに怒られてた。香りを楽しむものじゃないのかな。

猫は被るのか、装備品なのか（後書き）

今までに出て来た人達が集合です。力関係としては、F・Dさんは作中の通りです。残念なイケメンを地でやらかす人です。

M・D 参上(前書き)

散々煽っていた人が飛び出します。

M・D 参上

食堂に集まったDの名前を持つ人達。

人なのかは微妙だけど、それを言ったら俺もこの身体は微妙に人じやないしな。尻尾をパタリと動かす。

序列でもあるのか長方形の大きいテーブルの短い一辺の上座にB・Dさん、そのすぐ横の長い一辺の角にH・D、S・Dの順に並び、反対側にはC・D、F・Dと並ぶ。F・DとC・Dの間だけやたらと空いている。正直F・Dは床でもいいんだけどな、ホント。

「さて…、一心地着いた所で本題に入ろうか…」

「まだ部屋にも入ってないよー」

「悪いが、M・Dが来る前に話をしたいのでな、我慢してくれ…。あいつが居ると会話にならないからな…」

「そうね…。全部吹き飛ばわね、あのこがいると」

「まあ、妖精がついてからまだマシなんじゃねえのかな？昔はもつと凄かったぜ。楽しいからいいけど」

「あー、F・Dはノリが似てるもんねー。F・Dも妖精さんが一緒にいた方がいいんじゃない？お爺ちゃん系の地霊とか気にいられると思うよ」

「えゝ俺だつて可愛い娘がいいよゝ。目覚めは耳元で『起・き・て

』とかされたいじゃん」

「……………ウルサイ……………夢を見過ぎ…」

「あれ？今C・Dさんが素だったような…」

「あら？何のことかしらメイドさん。私分らないわ」

あれが本性か…。女って怖い…。しかし俺達もなし崩的に参加していいのかな？この話し合い。というか、とりあえず先に部屋に案

内したりとかして落ち着きたいんだけど。よっぽどなんだな、そのM・Dさんとやらは。

「ああ、居てくれて構わないよユウスケ君、コンスケちゃん。君らにも関係している話だから。それと座ったらどうかね？」

「そうなんですか？」

「じゃあ、お言葉に甘えて、失礼します」

「狐ちゃんこっち！俺の隣！」

「いや、俺S・Dの隣でいいや、せくはらされそうだし。S・Dちよつと詰めてー、ごめんなー」

「じゃあ、私もその横でー」

「シクシク」

「……………日頃の行い…因果応報……………」

また止まらない流れになりそうなのをマスター、B・Dさんが咳払いで止める。

「ゴホン。とにかくだ、いいかね？」

「はい」

「はいです」

「この場にいるのは、証を渡した者達だ。何であれ君達を認めた者だよ」

「『料理対決』とか、『観光地の知名度アップ』とかもありましたけど…。というか、全員のは貰ってないはず……………」

「私、黒と透明なの持ってますよ。マスターと、C・Dさんの」

「コンスケいつの間にか貰ってたんだ！？じゃあ全員分貰ってるわけか」

机の上に並べてみる。真珠、赤、黒、透明（水色の乱反射）、透明（黄色い乱反射）の五枚。社長は門は7つあると言っていた。つま

り後二人はいるわけだな。…つてあれ？門も触ってないぞ？

「コンスケ、お前門って二つ触ったの？」

「え？知りませんよ？」

「私の水晶の谷の鏡を見たでしょ…？あれが一つよ…。はい、ネタばらし…ふふ…うふふふ…」

何がおかしいのかクツクツと笑うC・D。うん、この人怖い…。

「もう一つは俺が管理しているが、まだ触らせるわけにはいかない。鱗は渡したが、見極めは済んでいない」

「そういう事ね…」

「これから来るM・Dも間違はなく何か試練を与えてくるだろうが…。我々以上に一筋縄ではいかないぞ…」

「ああ、あのこは…すごいものね…」

「あいつはヤバイからなあ…」

「うん、M・Dは色々スゴイから二人共覚悟してね」

「……………楽しみ…」

何があるんだよ…。ヤバいのかスゴイのか…。

その時、けたたましくドアベルが鳴り響き、それ以上にけたたましい声の持ち主が参上した。

「チャオ！アミーゴ！！遅くなってしまつてスクーリージイ！」

「ああ…来た…。ちよつと耳栓欲しくなるわね…」

「おっす！M・D相変わらず飛ばしてるなあ！！」

「あーM・Dこんにちわ…」

「……………やかましい……………」

「分かっていてもきついな…。久しいなM・Dよ…」

「エラ、ウンセイコロ〜〜！！！！久しぶりだね！我が仲間達！！

「！」

ああ……うん、何か、あんだーすたん。理解したよ……。首にキラキラと光る赤いスカーフたなびかせ、『すなきん』みたいな黄色い帽子被って、上はピンクのピツタリしたシャツに、下もなんかタイツみたいな緑のを履いている。マントは色取り取りだ。何これ……。F・Dが普通に見えて来た。どうしよう……。本当どうしよう……。コンスケも『え？』って顔して固まってる。うわ、そのM・Dさんがこっちを見た。

「セニヨリ〜ナ！可愛い狐さん達じゃないか！？配役にもピツタリだ！グラツツエ！B・D！」

「ああ……うん。喜んで貰えて何よりだ、M・Dよ……」

B・Dさんすら引き気味なんだけど……、誰も止められないのこの人……。何その配役って……。

「というわけでだね、君達」

「え？あ？はいです？」

「ほわっつ？」

何かノリで中学の時に勉強した基礎の英語が飛び出したよ。これは……M・Dはイタリア〜ノな言葉なのかな？

「僕のテアットロ……お芝居に出て頂こう！」

「ええええええええええ？？」

「何でええええええええええ……！！！」

目をキラキラさせながら俺とコンスケの手を握り締めるM・D。近い！距離が近い！鼻当たる……！！

「さてと…おかみさん部屋への案内をお願いしますわ…」
「あら？もういいのかい？面白い一幕だったわね」

頭を抱えながらおかみさんに話しかけるH・Dに、カラカラと笑いながら対応するおかみさん。待つてゝ助けてゝ。

「あ！僕も部屋案内して下さい」

「……………私も少し休むわ…。お兄様！私の部屋に来て下さってもいいのよー！」

「あ、ああ…。店の準備もあるので、そろそろ帰らせて頂くよ。

すまないなC・D」

「代わりに俺っちが行こうか？C・D」

「……………カエレ……………」

「ひでえ……………」

皆そそくさと二階へ去って行く。マジカ…友達甲斐のない…。S・Dだけは階段登る時にチラツと目顔でそれとなく謝ってた。いい娘だ…。

「さてセニヨリーナ…。君達にはある神話を芝居として演じて頂くよ！タイトルは『アポカリッセ デイ ジョバンニ』だ！！」

M・D 参上(後書き)

日本語と、イタリア語を混ぜて喋ると、結構す凄い事になります。
音で聞くと破壊力あります…。こつこついう演出家実際見た事あります。

稽古と学ぶ（前書き）

今回かなり短いですが、区切りのところで投稿します。

先に軽くイタリア語の説明。特に気にしなくても読めます。

「Si シイ」 はい。「ミ ピアーチェ」 好ましい・好き。「レジオネ」 レッスン。「カンターレ」 歌うように（のだめカンタービレってありましたね）。

稽古と学ぶ

「そこで回って…スモルツァンド！うん、シイ！」

半分位しか言っている事が分からない状態なのに、無理矢理お芝居の練習が始まった。いないなあと思ってた妖精さんは、M・Dさんの帽子から時々出て来て通じない言葉を訳してくれる。親父さんの手の平位しか身長がなくて、透明で綺麗な羽が生えてる。女の子だつて。この娘も緑色の服着てるけど、ド派手な感じはしない。M・Dさんの服は見るだけで目がチカチカする…。

私とユウスケさんがそのまま食堂のテーブルを端に寄せて練習の為に捕まっていた間に、二階に上がったS・Dさん達は、何やら紙を手を持って出て行った。後で親父さんに聞いた話によると、既にこっそりとチラシは作られていて、これを配りにいったらしい。村の人達も実は昨日には知らされていて、用意を始めていたそうだ。そういえば昨日の夕方にお出かけしたら広場に何か大きい物が用意されてた気がする…。

動きや台詞が少ないからという理由で、私が騎士役で、ユウスケさんが姫役らしい。逆じゃないの？って思ったけど、まあお芝居自体初めての私だから文句は言えない。人前で何かやるなんて緊張するなあ…大丈夫かなあ。

今はユウスケさんがメインの練習の時間なので、私はようやくお休み。台本を持ちながら、たどたどしく台詞を口にする私と違って、ユウスケさんは何も持たないでやってる。嫌がってたワリにはノリだあ。

「お疲れ様ー！。はいお水」

「あ、S・Dさん。ありがとうございます」

「どう？はかどってるー？」

「ううん。ユウスケさんは大丈夫そうだけど、私が心配です」

「まあ、初めての事だし、しょうがないよー」

「そうなんですけどね。そもそも台詞覚えられるかな…」

「そうだねー。目で見て字面で覚えるか、音として耳で覚えるか、後は書いて覚えるか…」

「ううむうう。私は耳かなあ」

「やっぱり耳が大きいと音の方がいいのかなー？」

「そんなもんですかねー？」

二人でそんな事を喋ってたらユウスケさんも休憩になった。M・Dさんと二人で息が荒い。激しいなあ。

「おつすS・D。俺も水頂戴。あゝ久々にすっかりと声出したわ」

「お疲れー。頑張ってるねー」

「まあ、やれと言われたらやるのが役者だからね。俺はどっちかつーとアクター系だけど、やっぱりやれと言われればやるさね。親父の知り合いにもさ、真冬にやれと言われて川に飛び込んで凍死しかけた人もいるし」

「根性だねー」

「根性というか魂というか」

「そう、まさにスピリット！」

「M・Dさん休憩しましょうよ、さっきからあなたも全開で叫んでたんですから…」

「おう、スクージィ。ついね、盛り上がってしまっただよ。しかしシィ、うん。凄くいいよ君達！」

「そうですか…？」

「まだまだですよ」

「その謙遜が堪らない…。ミ、ピアーチェ…むしろアモーレ、カン

「ターレ、マンジャーレ！」

「まんじゃーれ…ああ、ご飯ですね。ちょっと小腹が空きましたね。何か摘まみます？多分パンとスープ位はいつもあると思うので…」
「ババーネ！問題ない…。私の心は、はち切れそうだよ！さあ始めようかレジオネを！」

「レツスン再開ね。元気だなあ〜」

「頑張れー」

「ありがと、S・D達もそっちで何か色々やってるみたいだね？」

「ああ、うん。僕達もいつの間にか明日の設営の用意とかに駆り出されてるよ。村人さん達もやる気満たんだね。もう舞台の設営とか大体出来たみたい」

「あー娯楽とかあんましないからなあ。普段はホントに静かな村だし」

「たまにはいいですよね〜、こういうの」

「というわけでそっちも頑張れー。うし、M・Dさん始めましょうか」

「シィ。さあやろうか！」

「じゃあ僕も戻るねー」

それにしても、お芝居って凄いなあ。文字で書かれているだけの物を人間が動きを付けたりして世界を表現しちゃうんだから。

暗くなつてからも練習は続き、いつもは寝る時間によつやく終わりになった。

「レジオネ、エ、フィニート！稽古は終わりだ…。ヴォルピ！」

「え？ああ狐達ね、お疲れ様です」

妖精さんがユウスケさんに耳打ちして訳してくれてる。分かる言葉

で言ってくれればいいのになー。とにかく長く続いた練習も終わり。
明日のお昼に本番だ。大丈夫かなあ。

稽古と学ぶ（後書き）

イタリア人の人って、何故あんなにパツシオーネ（感情的）なんでしょう？ 気持ちいいですけどね。単純にテンション高過ぎる人が多い気がします。ラテンのノリかな。大体相槌の様に*si* シイは連発されます。「うんうん」って感じで。真冬に川へくは、某仮面のバイクの特撮の戦闘員さんの実話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0762w/>

ふおっくすている

2011年12月25日01時53分発行